

ServerView Suite

ServerView Operations Manager V4.92

Installation under Windows:

Installation ServerView Operations Manager

Installation ServerView Update Manager

Installation ServerView Event Manager

ServerView database (Windows)

製品名称の表記

本書では、本文中の製品名称を、次のように略して表記します。

製品名称	本文中の表記	
Microsoft® Windows Server® 2008 Standard Microsoft® Windows Server® 2008 Enterprise Microsoft® Windows Server® 2008 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2008 Foundation Microsoft® Windows® Small Business Server 2008 Standard Microsoft® Windows® Small Business Server 2008 Premium	Windows Server 2008	Windows
Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Standard Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Enterprise Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Datacenter Microsoft® Windows Server® 2008 R2 Foundation Microsoft® Windows® Web Server 2008 R2	Windows Server 2008 R2	
Microsoft® Windows Server® 2003, Standard Edition Microsoft® Windows Server® 2003, Enterprise Edition Microsoft® Windows Server® 2003, Enterprise Edition for Itanium-based Systems Microsoft® Windows® Small Business Server 2003	Windows Server 2003	
Microsoft® Windows Server® 2003, Standard x64 Edition Microsoft® Windows Server® 2003, Enterprise x64 Edition	Windows Server 2003 x64	
Microsoft® Windows Server® 2003 R2 Standard Edition Microsoft® Windows Server® 2003 R2 Enterprise Edition Microsoft® Windows® Small Business Server 2003 R2 Microsoft® Windows® Storage Server 2003 R2, Standard Edition	Windows Server 2003 R2	
Microsoft® Windows Server® 2003 R2 Standard x64 Edition Microsoft® Windows Server® 2003 R2 Enterprise x64 Edition	Windows Server 2003 R2 x64 または Windows Server 2003 R2	

製品名称	本文中の表記	
Red Hat Enterprise Linux 5	Red Hat Linux	Linux
	RHEL5	
Red Hat Enterprise Linux AS (v.4)	RHEL4	
Red Hat Enterprise Linux ES (v.4)		
SUSE Linux Enterprise Server 11	SuSE Linux	
	SuSE Linux SLES11 または SLES11	
SUSE Linux Enterprise Server 10	SuSE Linux SLES10 または SLES10	
VMware ESX 4	ESX4	VMware
VMware ESX 3.5	ESX3.5	

著作権および商標

Copyright © 2010 Fujitsu Technology Solutions GmbH.

All rights reserved

Microsoft、Windows、Windows Server、Hyper-V は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Linux は、Linus Torvalds 氏の米国およびその他の国における登録商標あるいは商標です。

Red Hat および Red Hat をベースとしたすべての商標とロゴは、米国およびその他の国における Red Hat, Inc. の商標または登録商標です。

BrightStor、ARCserve は、CA, Inc の登録商標です。

VMware、VMware ロゴ、VMware ESXi、VMware SMP および VMotion は VMware, Inc の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

その他の各製品名は、各社の商標、または登録商標です。

その他の各製品は、各社の著作物です。

目次

1	まえがき	9
1.1	対象者および目的	11
1.2	ハードウェア / ソフトウェア要件	11
1.2.1	管理用サーバ / パソコン（最小限の要件） — ハードウェア	11
1.2.2	管理用サーバ / パソコン — ソフトウェア	12
1.2.3	監視対象サーバ	14
1.2.4	Operations Manager の表示条件	15
1.2.5	Operations Manager が使用するプロトコルとポート番号	16
1.3	前バージョンからの変更点	17
1.4	本書の表記	18
2	サーバ管理	19
2.1	アーキテクチャ	19
2.2	管理用サーバ / パソコンでのインストール	20
2.3	監視対象サーバへのインストール	21
2.4	Operations Manager の統合オプション	22
3	管理端末へのインストール	23
3.1	ServerView Operations Manager のコンポーネント	24
3.2	Web サーバ	26
3.2.1	ServerView Web サーバ	26
3.2.2	Microsoft Internet Information Server (IIS)	27
3.2.3	Apache Web サーバ	30
3.2.4	Web サーバの通信ポート番号と変更可否	31
3.3	Web ブラウザ	32
3.4	SSL 暗号化	32
3.5	認証証明書	33
3.6	ユーザー ID / パスワード機構	33

目次

3.7	使用ポート	34
3.8	準備	35
3.8.1	SVOM for Windows インストール前の留意事項	36
3.9	SQL Server のインストール	37
3.9.1	管理端末のローカルへのインストール	39
3.9.2	別のシステムへのリモートのインストール	40
3.9.3	SQL Server のドメインコントローラへのインストール	41
3.10	SQL Server 2008	43
3.10.1	ソフトウェア要件	43
3.10.2	SQLServer のエディション	43
3.10.3	サービスアカウントのセットアップ	44
3.10.4	SQL Server 2008 Express Edition のインストール	46
3.10.5	SQL Server 2008 Enterprise/Standard/Workgroup Edition のインストール	49
3.10.6	SQL サーバ管理者権限を持つユーザアカウントの追加	51
3.11	SQL Server 2005	52
3.11.1	エディション	53
3.11.2	インストールの準備	54
3.11.3	SQL Server 2005 Express Edition のインストール	54
3.11.4	SQL Server 2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition のインストール	58
3.12	SQL Server 2000 (MSDE 2000)	61
3.12.1	MSDE 2000	61
3.12.2	SQL Server 2000	62
3.12.2.1	エディション	62
3.12.2.2	インストール	63
3.13	リモートの SQL Server の設定	64
3.14	SQL Server のアップグレードインストール	70
3.14.1	新しいバージョンの SQL Server へのアップグレード	70
3.14.1.1	SQL Server インスタンスのアップグレード	71
3.14.1.2	ServerView データベースの移動	78
3.14.2	SQL Server 2008 Express から SQL Server 2008 へのアップグレード	85
3.14.3	SQL Server 2005 Express から SQL Server 2005 へのアップグレード	88
3.14.4	MSDE 2000 から SQL Server 2000 へのアップグレード	92
3.15	Operations Manager の Windows ターミナルサーバへのインストール	96

3.16	Operations Manager ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール	98
3.17	他の Operations Manager ソフトウェアのインストール	115
3.18	Operations Manager ソフトウェアのアンインストール	116
3.19	技術情報	119
3.19.1	バインド 順序の変更	119
3.19.2	インストール後のコンピュータ情報変更	120
3.19.3	SVOM のシステムサービス	121
3.19.4	データベースのバックアップとリストア	127
3.19.5	アクセス権設定	130
3.19.6	SVOM のプロセス（デーモン）について	138
3.20	トラブルシューティング	139
4	ServerView データベース	143
<hr/>		
4.1	構成ファイル ServerViewDB.ini	143
4.2	データベースへの接続中断	145
4.3	ServerView データベースの管理	146
4.3.1	SQL Server 2008/2005	146
4.3.2	SQL Server 2000 および MSDE	148
4.4	ServerView データベースのバックアップ	150
4.4.1	ServerView データベースのバックアップジョブ	150
4.4.2	ジョブの実行要件	152
4.4.3	バックアップジョブの進行確認と編集	154
4.4.4	バックアップファイルがあるかどうかをチェックする	159
4.4.5	バックアップファイルの内容をチェックする	162
4.5	ServerView データベース のリストア	164
4.5.1	SQL Server Management Studio によるリストア	164
4.5.2	Enterprise Manager によるリストア	167
4.5.3	DbMgr2k によるリストア	171
4.5.4	データベースバックアップのチェック	175
4.6	ローカルからリモート SQL Server への ServerView データベースの移動	176
4.6.1	リモートサーバの要件	176
4.6.2	構成手順	177
4.7	負荷分散の変更	180

目次

4.8 エラー診断 182

4.8.1 ログファイル 182

4.8.2 エラーイベントの重要な情報 183

4.8.3 ServerViewDB_log.LDF ファイルの肥大化 184

4.8.4 ServerView データベースのエクスポート 188

5 コマンドラインインターフェイス 191

5.1 コマンドラインによる Operations Manager のインストール . 191

5.2 osql によるデータベース管理 (Windows) 193

6 Fujitsu Technology Solutions
Software License Agreement for End User 197

関連マニュアル一覧 205

索引 211

1 まえがき

ServerView Suite にはサーバ管理ソフトウェアの ServerView Operations Manager（以下、Operations Manager と呼びます）があり、業界標準のサーバ類を集中管理することができます。

Operations Manager によって、監視対象のサーバに関するデータにイントラネットやインターネットを経由してアクセスすることができ、標準的な Web ブラウザを搭載した PC から監視対象サーバのデータを見ることができます。

Operations Manager は、ハードディスク、換気ファン、電源や温度などのサーバの重要な機能を監視します。これらのパラメータの規定値を越えたりエラーが発生した場合は、必要に応じてメッセージを出力し、是正措置を行います。

大規模なネットワークのオペレータにとって、Operations Manager によるサーバ管理には以下のような決定的な利点があります。

- 高信頼のサーバによる生産性の向上
- データプロセッシング設備の自動モニタリングによるコスト削減
- Operations Manager としての柔軟なシステムの拡張に対応
- シンプルなエラー解析によるダウンタイムの短縮
- エラー発生時の反応時間の短縮
- ネットワークコンポーネントやリソースの有効活用による総運用コスト（総所有コスト）の削減
- 分かりやすいデータ表示、高機能なユーザインターフェイス、支援的ヘルプシステム

ServerView のコンセプトにおいて重要な側面は、ハードウェア機能と Operations Manager との相互作用です。システムボードに組み込まれた予防保守機能（PDA: Prefailure Detection and Analysis）、ASR&R（Automatic Server Reconfiguration and Restart）機能、Operations Manager によって、個々のシステムコンポーネントの動作に関連するデータを交換できます。例えば、エラーが発生した場合は、障害のあるハードウェアモジュールを停止することでサーバは運用状態に戻ります。

サーバの監視において 2 つのパートから構成されています。"Operations Manager" は管理用サーバ / パソコンにインストールされ、もう一方の "ServerView エージェント" は Operations Manager と情報を交換する監視対象サーバ上で使用します。

この情報の交換には、マネージャ（管理用サーバ / パソコン）とエージェントに共通の情報ベースが提供されている必要があります。この共通の情報ベースは "Management Information Base (MIB)" と呼ばれます。MIB は管理されるエレメントを抽象的なフォームで記述するデータモデルです。

ネットワーク内の各エージェントは MIB を提供し、ネットワーク内のエージェントが提供するすべての MIB 記述ファイルはこのマネージャシステム上で使用可能です。これにより、マネージャとエージェント間で交換される情報が正しく解釈されます。

ServerView は、ネットワークマネジメントプロトコルである SNMP（Simple Network Management Protocol）に基づいた異機種ネットワーク内で作動します。ServerView は、標準的なインターフェイスを採用しているため、簡単に他の管理システム（HP OpenView NNM や Microsoft SMS など）と接続することができます。さらに、ServerView によって、PRIMERGY を Tivoli TME10 のような全社的なネットワーク管理システムにシームレスに統合することができます。

1.1 対象者および目的

本マニュアルは、ハードウェアおよびソフトウェアについての基本的な知識をもつシステム管理者、ネットワーク管理者、およびサービス技術者を対象としています。本マニュアルは、OS ごとの Operations Manager の使用に関する要件や、ServerView Operations Manager、ServerView イベントマネージャ、および ServerView エージェントのインストールについて記載しています。

1.2 ハードウェア / ソフトウェア要件



- SuSELinux はサポートされていません。
- 変更および訂正情報は、ServerView Suite DVD 1 の Readme ファイルに記載されています。(SVSLocalTools - Japanese - Svmanage - WinSVOM の配下 にあります。)

1.2.1 管理用サーバ / パソコン（最小限の要件） — ハードウェア

- プロセッサ : 2 × 2GHz 以上推奨
- メモリ : 4GB 以上推奨
- ハードディスク : 10GB 以上推奨
- ディスプレイ : XGA (1024 × 768) 以上の解像度
- LAN カード : 必要 (オンボード LAN でも可)
- マウス : 必要

1.2.2 管理用サーバ/パソコン — ソフトウェア

- OS
 - Windows Server 2008 R2
 - Windows Server 2008
 - Windows Server 2003 R2
 - Windows Server 2003
- Web サーバ
 - Microsoft Internet Information Server
 - ServerView Web-Server (Apache for Win32 ベース)
Operations Manager for Windows に同梱されています。Operations Manager for Windows のインストール時に選択すると、インストールできます。
 - Apache 2.0
 - Apache 2.2
- プロトコル

TCP/IP が動作していること
- サービス
 - SNMP (サービスおよびトラップ) が動作していること
 - タスクスケジューラが動作していること
- Web ブラウザ

次のものがインストールされていること

 - Microsoft Internet Explorer 6.0 以降
 - Java™ 2 Runtime Environment Standard Edition
ServerView Suite DVD 1 に収録された JRE、または JRE バージョン 1.6 以上

- データベース

次のいずれか

- Microsoft SQL Server 2008
- Microsoft SQL Server 2008 Express
- Microsoft SQL Server 2005
- Microsoft SQL Server 2005 Express
Operations Manager for Windows に同梱されています。Operations Manager for Windows のインストール時に必要に応じてインストールされます。
- Microsoft SQL Server 2000 SP4
- MSDE 2000 SP4 (Microsoft Desktop Engine)
Operations Manager for Windows に同梱されています。Operations Manager for Windows のインストール時に必要に応じてインストールされます。

- アカウント

Administrator と同等の権限が割り当てられていること




- リードオンリーメインコントローラ (RODC) への Operations Manager のインストールは未サポートです。
- 次の OS は未サポートです。
 - Microsoft® Windows Storage Server 2003 R2, Standard Edition
 - Microsoft® Windows Server® 2003, Enterprise Edition for Itanium-based Systems

1.2.3 監視対象サーバ

- 100MB 以上の空きディスクメモリがあり、LAN および http アクセスが可能なサーバ
- 以下の OS で使用可能な ServerView エージェントがインストールされていること
 - Windows Server 2003
 - Windows Server 2003 x64
 - Windows Server 2008
 - SuSE Linux SLES 10 および 11
 - Red Hat Enterprise Linux 4 および 5
 - Mware ESX Server V3.5 および V4.0
- エージェントおよびインストール済みのコントローラ / サブシステムに対して使用可能な、稼働中のサーバ OS

1.2.4 Operations Manager の表示条件

- Web ブラウザ
 - Windows
 - Microsoft Internet Explorer 6.0 以降
 - RHEL5(x86)/RHEL5(Intel64)
 - Mozilla FireFox 1.5.0.9 以降
 - RHEL-AS4(x86)/RHEL-ES4(x86)/RHEL-AS4(EM64T)/RHEL-ES4(EM64T)/RHEL-AS3(x86)/RHEL-AS3(IPF)/RHEL-ES3(x86)
 - Mozilla-SeaMonkey V1.0.3 以降
 - Mozilla FireFox 1.5.0.3 以降
 - Java
 - Java™ 2 Runtime Environment Standard Edition ServerView Suite DVD 1 に収録された JRE、または JRE バージョン 1.6 以上
-  RHEL-AS3(IPF)/RHEL-AS4(EM64T)/RHEL-ES4(EM64T)/RHEL5(Intel64) では、同システム上のブラウザでの監視は未サポートです。
Java™ 2 Runtime Environment Standard Edition V1.6.0_10 以降を Mozilla FireFox で使用する場合、Mozilla FireFox は 3.0 以降を使用してください。Java™ 2 Runtime Environment Standard Edition V1.6.0_10 以降では、Mozilla-SeaMonkey での動作は未サポートです。

1.2.5 Operations Manager が使用するプロトコルとポート番号

Operations Manager 関連プログラムでは、次のプロトコルとポートを使用します。

コンポーネント	通信方向	コンポーネント	使用するプロトコル (ポート番号)
Operations Manager	← →	ServerView Agent	SNMP [注 1] (UDP 161)
	←		SNMP TRAP (UDP 162)
	← →		SERVERVIEW-RM [注 2] (TCP/UDP 3172)
	← →	PING	ICMP [注 3]
	← →	SMTP Server	SMTP (TCP/UDP 25 (デフォルト) [注 4])
	← →	RSB	SNMP [注 1] (UDP 161)
	←		SNMP TRAP (UDP 162)
	← →	iRMC/BMC	RMCP (UDP 623) [注 3]
	←	iRMC	SNMP TRAP (UDP 162)
Linux の場合	← →	PostgreSQL DB [注 5]	PostgreSQL [注 6] (TCP/UDP 9212)
Windows の場合	← →	Microsoft SQL DB	MS-SQL-S [注 6] (TCP/UDP 1433)
			MS-SQL-M [注 6] (TCP/UDP 1434)
Web Browser	← →	Operations Manager	HTTP (TCP 80) IIS 使用時
	← →		HTTP (TCP 3169) ServerView Web-Server 使用時
	← →		HTTPS (TCP 443) IIS 使用時 (SSL)
	← →		HTTPS (TCP 3170) ServerView Web-Server 使用時 (SSL)
	← →		HTTPS (TCP 443)
	← →	RSB/iRMC	HTTP (TCP 80)
	← →		HTTPS (TCP 443)

注 1 : Operations Manager では「SNMP version 1」にのみ対応しています。

注 2 : ServerView エージェント V4.20 以降で ServerView Remote Connector サービスが使用します。

注 3 : IPMI over LAN に使用されます。

注 4 : 設定により変更できます。

注 5 : Operations Manager に同梱されているデータベースです。

注 6 : ローカル環境内のみでのアクセスとなります。ポート番号 9212 は正式に予約されている番号です。

1.3 前バージョンからの変更点

本版は、2009 年 9 月版のオンラインマニュアル「ServerView Operations Manager バージョン 4.90 (Windows)」の更新版です。

本マニュアルには、以下の変更やエンハンス内容が含まれます。

- バージョン 4.92 に対する ServerView エージェントおよび ServerView アップデートエージェントのインストールについての説明は別途提供されます。従って、この Installation Guide からは削除されました。
- SQL Server 2008 のアップデートについて説明しています。[51 ページの「SQL サーバ管理者権限を持つユーザアカウントの追加」の項](#)をご覧ください。
- インストール中に SQL Server データベースのバックアップを設定できます。リモートでインストールされた SQL Server インスタンスを使用している場合は、バックアップファイルのパスも定義できます。
- バックアップ機種の概要を含む ServerView データベースの説明が更新されました。[150 ページの「ServerView データベースのバックアップ」の項](#)をご覧ください。

1.4 本書の表記

本マニュアルでは次の表記が使用されます。






	注意 この記号は、人的傷害、データ消失、機材破損の危険性を示しています。
	この記号は、重要な情報やヒントを強調しています。
	この記号は、操作を続行するために行わなければならない手順を示しています。
斜体	コマンド、ファイル名、およびパス名は 斜体 で表記されています。
固定フォント	システム出力は、固定フォントで表記されています。
太字の固定フォント	キーボードから入力する必要があるコマンドは、太字の固定フォントで表記されています。
<abc>	山カッコは実数値に置き換えられる変数を囲っています。
<u>Key symbols</u>	<p>キーは、キーボード上の該当するキーを表しています。また大文字を入力する必要がある場合は、シフトキーも表示されています。</p> <p>例：大文字 A の場合、  -  </p> <p>2つのキーを同時に押す必要がある場合は、それぞれのキー記号の間にハイフンが表示されています。</p>

表 1: 本書の表記

マニュアル内の本文や項を参照する場合は、章や項の見出しを参照先として示し、その章や項が始まるページを記載しています。

画面出力

画面出力は、使用するシステムによってある程度異なります。そのため、お使いのシステムで表示される出力は、本マニュアルの記載と若干異なる可能性があります。また、利用できるメニュー項目もシステムによって異なる場合があります。

2 サーバ管理

2.1 アーキテクチャ

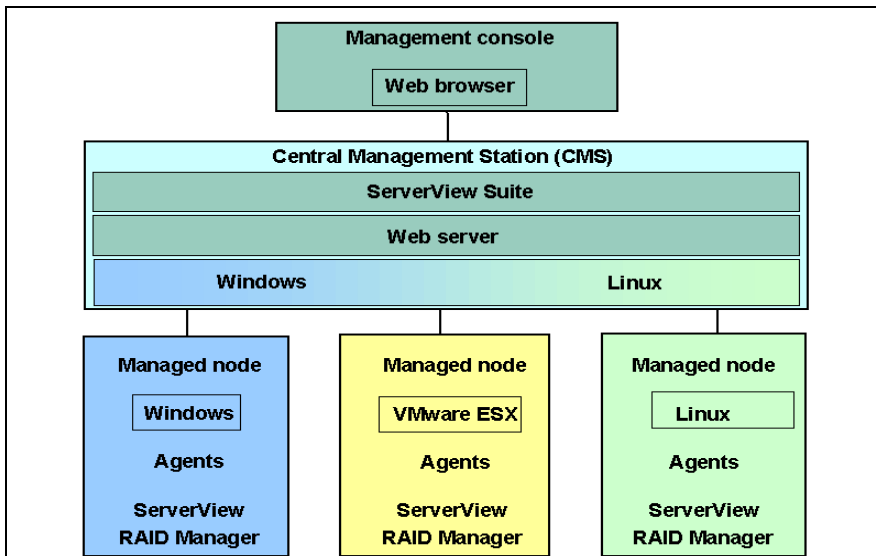


図 1: アーキテクチャの概要

管理コンソール

監視対象サーバの全データは、標準的な PC からイントラネットまたはインターネットアクセスおよび Web ブラウザ（Web ベースのコンソール）を使用して見るすることができます。

管理用サーバ/パソコン（CMS）

ServerView Operations Manager は管理用サーバ/パソコンにインストールされています。

管理ノード

監視対象サーバに ServerView エージェントはインストールされており、その情報は管理用サーバ/パソコンに提供されます。ServerView RAID Manager は監視対象サーバにオプションでインストールすることができます。

2.2 管理用サーバ/パソコンでのインストール

Operations Manager（ServerView アップデート マネージャなど）を管理用サーバ/パソコンにインストールできます。これにより、PC またはノート型パソコンで標準的な Web ブラウザを使用してサーバを監視できます。さらに、管理用サーバ/パソコンや別のサーバに、ServerView イベントマネージャ（イベント管理）をインストールすることもできます。

Operations Manager は、Windows、SuSE Linux（未サポート）、および Red Hat Linux の各 OS にインストールすることができます。

Operations Manager は ServerView Suite DVD 1 に格納されています。

- インストールウィザードは Windows 用のインストーラーです。Operations Manager、アップデート マネージャ、および ServerView イベントマネージャ のインストールも行えます。また、このウィザードを使用すると、別のサーバに Operations Manager をインストールすることができます。

インストールは Windows コマンドラインモードで実行することもできます。

管理用サーバ/パソコンでのインストールに関する説明は、「[3 管理端末へのインストール](#)」の章（23 ページ）および [191 ページ](#)の「[コマンドラインによる Operations Manager のインストール](#)」の項に記載されています。

- Linux へのインストールは、スクリプトベースまたは YaST/YUM によるもので、Operations Manager および ServerView イベントマネージャ のインストールを含みます。

インストールに関する説明については、Linux 用の ServerView Operations Manager インストールガイドを参照してください。

2.3 監視対象サーバへのインストール

監視対象サーバには、ServerView エージェントをインストールする必要があります。これらは OS ごとに異なるプログラムで、管理用サーバ/パソコンに情報を提供します。

各 OS 用のエージェントについては、ServerView Agent Installation Guides for Windows または ServerView Agent Installation Guides for Linux をご覧ください。

追加インストール

- ServerView Online Diagnostics

Windows 用の ServerView エージェントインストール時に、Online Diagnostics もインストールされます。Online Diagnostics を使用して、管理されているサーバに対して離れたワークステーションから一連のハードウェアテストを実行することができます（ServerView エージェントの版数によります）。

- ServerView RAID Manager

ServerView RAID Manager を使用すると、PRIMERGY のハードディスクを管理できます。

ServerView RAID Manager がインストールされていない場合、RAID ドライブおよびそれらのステータスに関する情報は使用できません。

インストールについては、ServerView RAID Manager のマニュアルを参照してください。

- ServerView エージェント（Windows）を Expert モードでインストールしている場合、Asset CLI、Configuration Tools、PrimeCollect などの追加コンポーネントをインストールするかどうかを選択できます。

2.4 Operations Manager の統合オプション



本機能は未サポートです。ご使用になれません。

標準化プロトコルおよびインタフェースを使用すると、Operations Manager を他の管理システムと容易に統合できます。Operations Manager 統合モジュールにより、接続された管理システムのコンソールにおける サーバのステータスに関する詳細情報の出力を確認します。このように、センターエンタープライズ管理コンソール（単一管理ポイント）でサーバを管理できます。ネットワーク管理、アプリケーション管理、ソフトウェア分配などの追加の管理機能も、サーバにおいて問題なく使用できます。

統合モジュールは以下のシステムで使用できます。

- IBM Tivoli TME 10™ Framework TE/C
- IBM Tivoli NetView
- HP OpenView Network Node Manager
- HP Operations Manager
- Microsoft MOM および SCOM 2007
- Microsoft SMS および SCCM 2007
- Nagios および BMC Patrol
- PRIMEPOWER ServerView Suite


一部の統合モジュール（Microsoft SMS、MOM）は、ServerView Suite DVD 1 に収録されており、Operations Manager のインストール時に管理用サーバ/パソコンに自動的にインストールされます。これは、関連する管理ソフトウェアがすでにシステムにインストールされている場合のみ有効です。詳細は [98 ページの「Operations Manager ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール」](#) の項を参照してください。

他の統合モジュール（HP Operations Manager、IBM Tivoli TME NetView など）は、ServerView Integration CD に収録されています。

統合モジュールの詳細情報は、対応する統合マニュアルおよびデータシート ServerView 統合を参照してください。

3 管理端末へのインストール

本章では Operations Manager (ServerView アップデート マネージャを含む) と ServerView イベントマネージャを管理用サーバ/パソコンにインストールする方法を記載します。

 アップデート マネージャ (バージョン 4.71 以前) がすでに管理用サーバ/パソコンにインストールされている場合、インストール済みのアップデート マネージャをアンインストールしてから Operations Manager をインストールしてください。アンインストールしていない場合、インストールが異常終了します。

ServerView エージェントを管理用サーバ/パソコンにインストールする場合、現在の ServerView エージェント (V4.90) をインストールしてから Operations Manager をインストールする必要があります。

必要なソフトウェアは、ServerView Suite DVD 1 に格納されています。

ソフトウェア製品は集中管理用サーバ/パソコンにまとめてインストールすることも、別々のコンピュータにそれぞれインストールすることもできます。

Windows (Windows Server 2003 または Windows Server 2008) へのインストールはメニューから選択する方式になっており、Microsoft Windows Installer Technology に基づいています (98 ページの「[Operations Manager ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール](#)」の項を参照してください)。

インストールは Windows のコマンドラインからもでき、編集可能なインストール用スクリプト (サイレントインストール) が用意されています (191 ページの「[コマンドラインによる Operations Manager のインストール](#)」の項を参照してください)。

3.1 ServerView Operations Manager のコンポーネント

ServerView Operations Manager

ServerView Operations Manager をインストールすると以下の ServerView コンポーネントも同時にインストールされます。

ServerView Configuration Manager

ServerView Configuration Manager は、システムに応じた環境ファイルを監視対象サーバに作成できます（Windows 用の ServerView エージェントがインストールされているサーバに対してのみサポートしています）。

ServerView Archive Manager

Archive Manager は、サーバのシステムおよび運用データを記録し、管理コンソールに保管することができます。その後データを確認したり評価することができます。

ServerView Inventory Manager

Inventory Manager は、1 つまたは複数の監視対象サーバのデータを取得して画面に表示します。Operations Manager からデータをエクスポートし、様々なフォーマット（CSV、ODBC など）で保存することができます。

ServerView Performance Manager

Performance Manager は、特定のサーバのコンポーネントのパフォーマンスを監視することができます。Performance Manager はルールに従って実施されます。管理コンソールで作られたルールはどのサーバに対しても実行することができます。

ServerView Threshold Manager

Threshold Manager は、1 つ以上の監視対象サーバとそのサーバ上で稼動するあらゆる仮想マシンを、しきい値に基づいて管理コンソールで監視することができます。

ServerView Remote Management Frontend

ServerView Remote Management Frontend は、Web ベースのワーク環境を提供してサーバのリモート管理ができます。

ServerView アップデート マネージャ (オプション)

個別に ServerView アップデート マネージャをインストールすることもできます。このインストールにより以下のコンポーネントが提供されます。

アップデート マネージャ

アップデート マネージャは、管理コンソールを介して、すべてのドメインに対してソフトウェアのインストールおよびアップデートを行うことができます。

Repository Manager

Repository Manager は、アップデートレポジトリを管理することができます。

Configuration

Configuration は、アップデート マネージャのためのグローバルパラメータを設定することができます。

ServerView Download Manager

Download Manager は、ご使用のサーバ用のファームウェア、BIOS、ドライバ、および ServerView エージェントの最新のものを適宜入手することができます。

ServerView イベントマネージャ

ServerView イベントマネージャをインストールすると、以下の ServerView Operations Manager コンポーネントもインストールされます。

Alarm Monitor

Alarm Monitor は、選択されたサーバおよびサーバグループへの受信アラームをすべて Operations Manager のメインウィンドウに表示します。

Alarm Configuration

Alarm Configuration コンポーネントは、アラームの取り扱いを設定できます。アラームのルール、フィルタのルール、一般的なルールを設定できます。

3.2 Web サーバ

Operations Manager は、Windows プラットフォーム上の Microsoft Web サーバ（MS Internet Information Server）または専用の ServerView Web サーバ（Windows 用 Apache ベース）のいずれかにインストールすることができます。

ServerView Installation Manager により SVOM を自動インストールする場合は、ServerView Web-Server がインストールされます。

3.2.1 ServerView Web サーバ

ServerView Web サーバを使用する場合、ServerView Web サーバは Operations Manager をインストールすると自動的にインストールされます。



- ServerView Web-Server のセキュリティ対応などにより、ServerView Web-Server のアップデートを行うためには、SVOM for Windows をバージョンアップする必要があります。ServerView Web-Server のみアップデートすることはできません。
また、最新版 ServerView Web-Server を含む SVOM for Windows の提供に時間がかかる場合があります。この場合、IIS または Apache2.0 / Apache2.2（別途用意）を使用することを推奨します。
- SVOM の Web サーバとして、ServerView Web-Server をインストール後は、Apache をインストールしないでください。
ServerView Web-Server と Apache の同時インストールは未サポートです。

3.2.2 Microsoft Internet Information Server (IIS)

使用中の Windows OS 用の最新 Microsoft Web サーバがサポートされます。

Web サーバは通常プレインストールされています。プレインストールされていない場合、新たにインストールする必要があります。

IIS を新たにインストールする手順はすべての Windows OS に共通であり、以下のとおりです。Windows の CD を CD ドライブにセットし、「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「プログラムの追加と削除」の順に選択してください。

詳細は <http://www.microsoft.com/JAPAN/> または OS のドキュメントを参照してください。



- Windows Server 2008(64-bit) / Windows Server 2008 R2(64-bit) / Windows Server 2003 x64 / Windows Server 2003 R2 x64 において、SVOM での IIS の使用は未サポートです。
- IIS での SSL 接続は可能ですが、事前に IIS 側で SSL を使用できるように設定してください。
設定方法は、SSL の認証局、または Microsoft へ確認してください。

IIS 7 の Windows Server 2008 へのインストール

IIS 7.0 の Windows Server 2008 へのインストールは以下の手順で行います。

- ▶ 「スタート」→「管理ツール」→「サーバーマネージャー」の順に選択します。
- ▶ 「サーバーマネージャー」ウィンドウが開きます。
- ▶ 「役割」を選択します。
- ▶ 「役割の概要」の下「役割の追加」ボタンをクリックして Web サーバ (IIS) を追加します。
- ▶ 「役割」をクリックして、IIS がインストールされていることを確認します。

Operations Manager を起動するには、以下のサービスをインストールする必要があります。

- HTTP 基本機能

- 静的なコンテンツ
- 規定のドキュメント
- ディレクトリの参照
- HTTP エラー
- HTTP リダイレクション

- アプリケーション開発

- CGI
- SAPI 拡張

- セキュリティ

- 基本認証
- Windows 認証
- ダイジェスト認証

- 管理ツール

- IIS 管理コンソール
- IIS 管理スクリプトおよびツール
- 管理サービス

サーバーマネージャー画面 - 役割

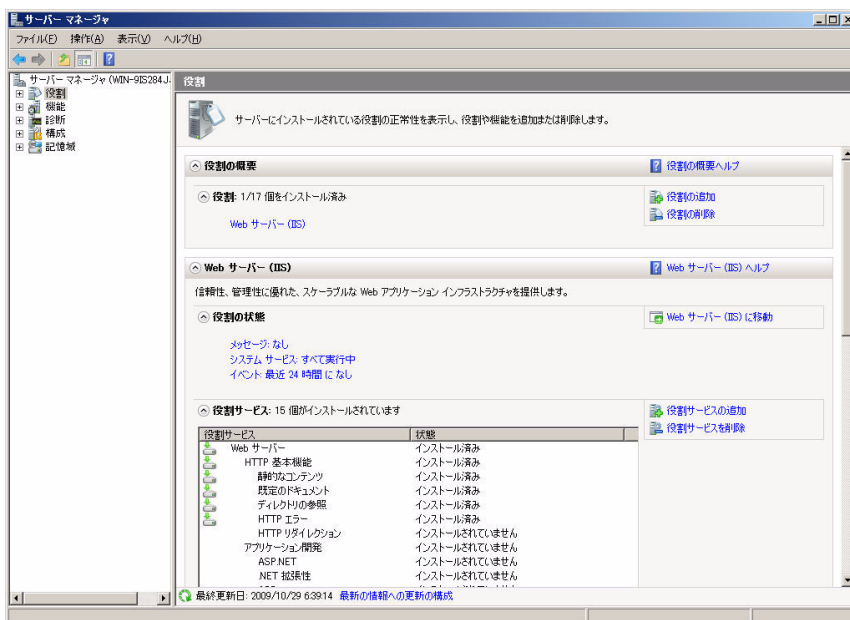


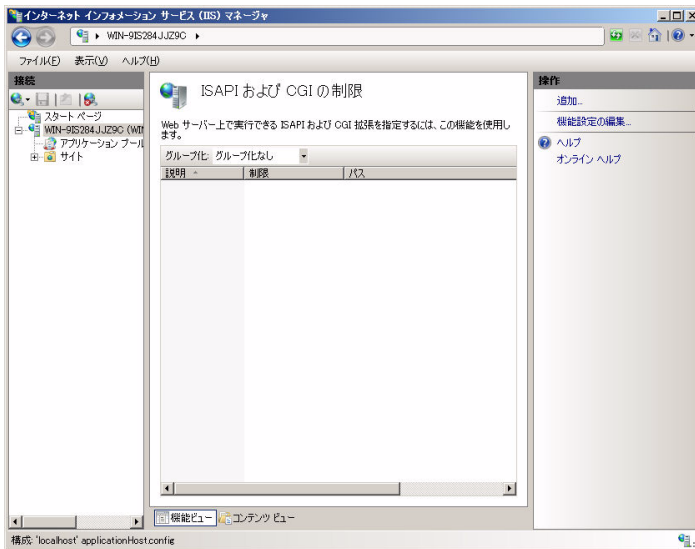
図 2: サーバーマネージャー画面

Operations Manager のインストール中、IIS 上で各種の設定が行われます。これらの設定は IIS Manager により表示させることができます。

IIS Manager は以下のように起動させます。

- ▶ 「スタート」→「すべてのプログラム」→「管理ツール」→「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャー」の順に選択します。
- ▶ 次に「Default Web Site」を選択します。これにより ISAPI と CGI のインターフェイスや MIME タイプなどを表示することができます。


以下のウィンドウは Operations Manager の ISAPI と CGI の制限です。



3.2.3 Apache Web サーバ

Apache Web サーバは OS の標準インストールの一部です。この場合の Apache Web サーバは、標準 Apache Web サーバです。

SSL 暗号化を使用したい場合は、インストールした Apache が SSL をサポートしているかどうか、または Apache SSL を事後インストールしたりフルインストールする必要があるかどうかを確認しなければなりません。詳細はインターネットで <http://www.apache.org> または <http://www.apache-ssl.org> にアクセスして参照してください。

-  - SVOM の Web サーバとして、ServerView Web-Server をインストールした場合は、Apache をインストールしないでください。ServerView Web-Server と Apache の同時インストールは未サポートです。
- Apache を SVOM の専用 Web サーバとして使用する場合は、必ず SVOM のインストール前に Apache をインストールしてください。その後、SVOM をインストールしてください。

- 次の場合は、SVOM の Web サーバに IIS を使用してください。
 - Apache を業務目的でインストールする場合
 - Apache を利用するソフトウェアをインストールする場合
 - Apache をインストールするソフトウェアをインストールする場合
- Apache2.0 / Apache2.2 での SSL 接続は可能ですが、事前に Apache 側で SSL を使用できるように設定してください。設定方法は SSL の認証局、または Apache 入手先へ確認してください。

3.2.4 Web サーバの通信ポート番号と変更可否

SVOM で使用できる Web サーバの、通信ポート番号（デフォルト番号）と通信ポートの変更可否は、次の表のとおりです。

OS : Windows

○ : 変更可能 × : 変更不可

SVOM で使用できる Web サーバ	通信ポート（デフォルト番号） 上段 : http / 下段 : https (SSL)	通信ポートの変更可否
ServerView Web-Server	TCP/3169 番	×
	TCP/3170 番	×
Microsoft Internet Information Server (IIS)	TCP/ 80 番	○
	TCP/443 番	○
Apache2.0 / Apache2.2	TCP/ 80 番	○
	TCP/443 番	○

表 2: SVOM で使用できる Web サーバの通信ポート番号（デフォルト番号）と通信ポートの変更可否

3.3 Web ブラウザ

データを表示するには Web ブラウザが必要です。そのため、Web ブラウザを持つ他のコンピュータに LAN 経由でデータを送信し、コンピュータで表示させることができます。HTML V3.2 と Javascript V1.1 以上がインストールされているものは、どのブラウザも使用可能です。

Web サーバへのアクセスに問題がある場合は、ブラウザで以下のいずれかの設定を行ってください。

- ブラウザにおけるプロキシを完全に無効にする。
- この Web サーバが稼動するホストに対してプロキシが使用されないように、IP アドレスの除外設定を行う。

3.4 SSL 暗号化

任意で、管理端末と監視対象サーバのデータ転送を他のプロトコルである SSL (Secure Socket Layer protocol) 経由で安全に行うこともできます。

このオプションは ServerView Web サーバと IIS の両方で利用することができます。

ServerView Web サーバを使用する場合、「Web サーバのプロパティ画面」で Operations Manager をインストールする際に「SSL と認証の使用」を選択することができます。この場合、管理端末と監視対象サーバの通信は暗号化されます。これにより、データ転送が安全に行われます。

IIS やシステムにインストール済みの Apache Web サーバでは、この機能は別に設定する必要があります。

システムにインストール済みの Apache Web サーバに対する手順は <http://www.apache.org> をご覧ください。

3.5 認証証明書

認証証明書を認証プロバイダより入手する必要があります。そのためには、証明書署名要求 (CSR: Certificate Signing Request) を認証局 (CA: Certification Authority) に送信します。認証局への要求は OpenSSL を経由して送信します。詳細は、<http://www.openssl.org> または <http://www.modssl.org> をご覧ください。

認証局のアドレス

- 日本ベリサイン (<https://www.verisign.co.jp/>)
- Thawte-Japan Local Representative (<http://www.jp.thawte.com/>)
- CertiSign Certificadora Digital Ltda. (<http://www.certsign.com.br>) (≠日本語)
- IKS GmbH (<http://www.iks-jena.de/>) (≠日本語)
- Uptime Commerce Ltd. (<http://www.uptimecommerce.com>) (≠日本語)
- グローバルサイン (<http://jp.globalsign.com/>)

新しい証明書は、`<webserver>%conf%ssl.crt` と `<webserver>%conf%ssl.key` に保存してください。



ServerView Web サーバに同梱のセキュリティ証明書はテスト用です。通常の運用には適しません。

3.6 ユーザー ID/ パスワード機構

安全なデータ転送に加えて、ユーザー ID/ パスワードによりリモートからのアクセスを安全に行うこともできます。

Operations Manager のインストール時に ServerView Web サーバ、そして「Web サーバのプロパティ」を選択した場合、管理端末と監視対象サーバのデータが暗号化されて転送されるだけでなく、リモートからのアクセスがユーザー ID/ パスワードにより保護されます。

IIS やシステムにインストール済みの Apache Web サーバでは、ユーザー ID/ パスワードを別に設定する必要があります。

システムにインストール済みの Apache Web サーバに対する手順は <http://www.apache.org> をご覧ください。

ServerView Web サーバをインストールすると、ユーザ「admin」とパスワード「admin」がデフォルトで入力されています。セキュリティのため独自のユーザー ID を入力してデフォルトのユーザー ID を削除してください。

新しいユーザは *Apache* コマンドの *<ServerView Services path>%Webserver%\bin\httpasswd.exe* により入力します。これにより新しいユーザが *<ServerView Services path>%Webserver%\bin* ディレクトリ内の *passwd* ファイルに格納されます。

さらに、ServerView Web サーバではオプションとして、Windows のアカウントを ID として使用できる SSPI (Security Support Provider Interface) 認証も選択できます。この場合は、ドメインの指定が必要です。

3.7 使用ポート

暗号化を利用する場合、Operations Manager のエントリアドレスは http ではなく https から始まります。

ServerView Web サーバはポート番号 3169 を使用し、セキュアモードではポート番号 3170 を使用します。

セキュリティについての詳細は、「Secure PRIMERGY Server Management」に記載されています。

3.8 準備

以下の手順が完了していることを確認してから Operations Manager ソフトウェアをインストールしてください。

- ▶ Windows OS (Windows Server 2003 または Windows Server 2008) を管理端末にインストールします。
- ▶ Windows Service Pack を適用します。

必要に応じて SVOM の各コンポーネントをインストールするすべてのサーバおよびパソコンに、Service Pack を適用してください。

Windows Server 2003 の場合は、Service Pack 2 以降を推奨します。



- Service Pack は必ず適用してください。Service Pack を適用しない場合、動作は保証できません。
すでに Service Pack が適用されている場合には、再度適用の必要はありません。
- 必ず SNMP サービスがインストールされていることを確認してから、Service Pack を適用してください。
- ▶ ネットワーク OS の TCP/IP、SNMP サービスをセットアップします。管理用サーバ/パソコンに SNMP サービスをセットアップした場合は、どちらのコミュニティやサーバ (IP アドレス) から管理端末がトラップを受け取るか、指定する必要があります。

Windows Server 2003

- ▶ 「スタート」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」の順に選択します。
- ▶ 「SNMP Service」を選択した後、右クリックから「プロパティ」を選択します。

Windows Server 2008

- ▶ 「スタート」→「サーバーマネージャー」の順に選択します。
- ▶ 左側のウィンドウで「機能」をクリックします。
- ▶ 「機能の追加」を選択します。
- ▶ オプションの「SNMP サービス」を選択します。
- ▶ 「次へ」、「インストール」の順にクリックします。

SNMP の設定の詳細は、ServerView Agent Installation Guides for Windows マニュアルをご覧ください。

3.8.1 SVOM for Windows インストール前の留意事項

- SVOM for Windows のインストール後、Web サーバ（Apache2.0 / Apache2.2、IIS）を変更、またはアップデートする場合は、アンインストール実施後、インストールを行ってください。
また、Web サーバで使用するディレクトリパスを変更する場合は、インストールの際に「Web サーバの格納先」を条件に合わせて変更してください。SVOM インストール後にディレクトリパスを変更する場合は、一度 SVOM をアンインストールする必要があります。
なお、ServerView Installation Manager で SVOM を自動インストールした場合、Web サーバは ServerView Web-Server がインストールされます。アンインストールについては、[116 ページの「Operations Manager ソフトウェアのアンインストール」](#)の項を参照してください。
- ターミナルサーバがインストールされているシステムでは、アプリケーションのインストール方法が通常とは異なります。[96 ページの「Operations Manager の Windows ターミナルサーバへのインストール」](#)の項を参照してください。
- SVOM をインストールする前に Java がインストールされていない場合、次のメッセージが表示されます。
「Java Virtual Machine が検出されません。Java Virtual Machine をインストールするまで、適切に動作されない機能があります。」
「OK」をクリックすると、インストールが継続されます。SVOM のインストール終了後、Java のインストールを行ってください。
- 複数のバージョンの SVOM をお持ちの場合は、SVOM は必ず最新のものをインストールしてください。
- ServerView Windows エージェントと SVOM を同一のサーバにインストールする際、「SVOM」→「ServerView Windows エージェント」の順番でインストールを行うと、SVOM において自サーバの自動登録が行われません。
ServerView Services の再起動、またはシステムの再起動を行ってください。

3.9 SQL Server のインストール

Operations Manager には、SQL データベースの *ServerViewDB* をインストールする SQL Server が必要です。

Operations Manager のインストール中に、ある条件下では SQL Server を自動的にインストールします。しかし、事前に SQL Server をインストールしてから Operations Manager をインストールしなければならない場合もあります。

システムに既存する SQL Server が Operations Manager に適応する場合は、その SQL Server を使用することができます。

インストールに関する要件や制約に従う必要があります。



Microsoft SQL Server 2008 Express、Microsoft SQL Server 2005 Express および MSDE 2000 SP4 は、500 台以下のサーバを監視するのに適しています。

それ以上の数のサーバを監視する場合、Microsoft SQL Server 2008、Microsoft SQL Server 2005、または Microsoft SQL Server 2000 をインストールすることを推奨します。

SQL Server のパラレル (side-by-side) インストール

SQL Server は、それぞれ異なるインスタンス名で同一システムのどのエディションにもパラレルに 16 個までインストールできます。

SQL Server 2008 のインスタンスは SQL Server 2000、SQL Server 2005 と side-by-side にインストールできます。

SQL Server 2005、SQL Server 2000、MSDE 2000、SQL Server 6.5、SQL Server 7.0、および MSDE 1.0 のインスタンスは、side-by-side にインストールできます。



SQL Server インスタンスの異なる言語版の同一システムへのインストールはサポートしていません。

例

同一システムへの SQL Server 2005（英語）と SQL Server 2005（日本語）の同一システムへの side-by-side インストールはサポートしていません。

日本語版以外の SQL Server インスタンスがシステムにインストール済みの場合、Operations Manager は日本語版 SQL Server を並列的に自動でインストールすることはできません。この場合、ダイアログボックスが開き、適切な言語版の SQL Server を手動でインストールするように促します。

既存のインスタンスの表示

以下の手順で SQL Server の既存のインスタンスを表示できます。

- ▶ コマンドプロンプトを開きます。
- ▶ 以下のコマンドを入力します。

SQL Server 2008/2005 には `sqlcmd -L | findstr <computer_name>`

SQL Server 2000 には `sosql -L | findstr <computer_name>`

システム上のすべてのインストール済み SQL Server インスタンス `<computer_name>` が表示されます。なお、このコマンドの実行には数分かかります。

システム上にインスタンスが 16 個未満の場合、Operations Manager をインストールできます。

SQL Server インスタンス名に関する一般的事項

インスタンスが 1 個の場合はインスタンス名は必要なく、規定のインスタンスとみなされます。規定のインスタンスは、名前 (*local*) の下、またはリモートサーバの場合はサーバのコンピュータ名の下を選択リストに表示されます。他の 15 個のインスタンスには個別のインスタンス名が必要です。これらのインスタンスは名前付きインスタンスと呼ばれます。MSDE や SQL Server 2005 Express の場合、`<server_name>\<instance_name>` という名前の下を選択リストに表示されるインスタンス名でインストールされます。

SQL Server の各種言語版と OS の言語

SQL Server には様々な言語版があります。OS の言語と互換性のある言語版の SQL Server をインストールする必要があります。

- 英語版の SQL Server はサポートするすべての OS にインストールすることができます。英語版の SQL Server は欧米の Windows OS にインストールすることをお勧めします。
- OS と同じ言語の SQL Server をインストールすることができます。

SQL Server がインストールされるディスクが圧縮されていないことを確認してください。

3.9.1 管理端末のローカルへのインストール

SQL Server は、管理用端末のローカルにインストールするか、Operations Manager によって自動的にインストールすることができます。

Windows Server 2008 上の Operations Manager での SQL Server インスタンス名は、以下のとおりです。

- インスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の SQL Server 2008 Express
- インスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の SQL Server 2005 Express（これは ServerView Operations Manager のインストール時に同時にインストールした場合のインスタンス名でもあります）
- 任意のインスタンス名の SQL Server 2008/2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition



Microsoft は Windows Server 2008 上の MSDE 2000 や SQL Server 2000 のサポートを終了しています。

Windows Server 2003 上の Operations Manager での SQL Server インスタンス名は、以下のとおりです。

- インスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の SQL Server 2008/2005 Express
- 任意のインスタンス名の SQL Server 2008/2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition
- インスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の MSDE 2000 Service Pack 4（これは ServerView Operations Manager のインストール時に同時にインストールした場合のインスタンス名でもあります）
- 任意のインスタンス名の SQL Server 2000 Service Pack 4 Enterprise/Standard/Workgroup Edition

Operations Manager インストール中の SQL Server インスタンスの認識

データベースサーバは ServerView Suite DVD 1 にあります。SQL Server インスタンスがシステム上にインストールされてないか、またはインストールされていてもインスタンス名が「SQLSERVERVIEW」以外の場合は、Operations Manager のインストール中に SQL Server インスタンスも自動的にインストールすることができます。

自動的にインストールされた SQL Server には「SQLSERVERVIEW」というインスタンス名が付けられます。

Operations Manager に適する SQL Server インスタンスがすでに使用可能な場合は、SQL Server の自動インストールは提供されません。既に SQL Server のインスタンス名が、「SQLSERVERVIEW」として使用されている場合、SQL Server の自動インストールは行われません。

SQL Server 2008、SQL Server 2008 Express のインストールについての詳細は [43 ページの「SQL Server 2008」の項](#)を参照してください。

SQL Server 2005、SQL Server 2005 Express のインストールについての詳細は [52 ページの「SQL Server 2005」の項](#)を参照してください。

MSDE 2000 のインストールについての詳細は [61 ページの「MSDE 2000」の項](#)を参照してください。

SQL Server 2000 のインストールについての詳細は [62 ページの「SQL Server 2000」の項](#)を参照してください。

3.9.2 別のシステムへのリモートのインストール

Operations Manager バージョン 4.7 では、リモートにインストールされた SQL Server インスタンスを使用して ServerView データベースをインストールすることもできます。



- このオプションが使用できるのは Operations Manager の新規のインストール時と ServerView バージョン 4.20 以前のアップグレードインストール時です。
- Operations Manager はリモートのサーバ上にローカルから同時にインストールしないでください。
- Operations Manager を複数のローカルの管理端末にインストールしたり、リモートにインストールされた同一の SQL Server インスタンスを各管理端末に使用することはできません。

要件

ローカルの管理端末とリモートのシステムは同じドメインに属している必要があります。Domain Users グループ内では少なくとも 1 つのドメインユーザアカウントが必要です。

適する SQL Server インスタンスは、Standard、Workgroup、Enterprise Edition の SQL Server 2008/2005/2000 です。SQL Server インスタンスは、Operations Manager がインストールされる前にリモートのサーバにインストールし、設定する必要があります。

SQL Server をリモートの SQL Server として使用するための設定についての詳細は、[64 ページの「リモートの SQL Server の設定」](#)の項を参照してください。



SQL Server 2008/2005 Express、MSDE 2000 はサポートしていません。

SQL Server 2008、SQL Server 2005 は Windows Server 2008 で使用してください。

3.9.3 SQL Server のドメインコントローラへのインストール

セキュリティ確保のため、SQL Server をドメインコントローラにはインストールしないでください。



Windows Server 2008 Read Only Domain Controller (RODC) へのインストールはサポートしていません。

インストールの順序に注意してください。

1. サーバをドメインコントローラに設定します。
2. SQL Server と ServerView Operations Manager をインストールします。

手順は以下のとおりです。

- ▶ 静的 IP アドレスをコンピュータに割り当てます。
- ▶ ローカルの管理者としてログオンします。
- ▶ 「スタート」→「プログラム名を指定して実行」の順に選択します。
- ▶ 「名前」に「dcpromo」と入力し、「OK」をクリックします。Active Directory Installation Wizard を実行します。
- ▶ ドメインの管理者としてサーバにログオンします。

- ▶ Workgroup/Standard/Enterprise Edition などの SQL Server をインストールします。

SQL Server のサービスアカウントは Windows のドメインユーザアカウントとして実行しなければなりません。各 SQL Server サービスは別々の Windows アカウントで実行してください。ドメインコントローラでは SQL Server サービスはローカルサービスやネットワークサービスとして実行することはできません。SQL Server のサービスアカウントをインストールしてローカルシステムとして実行することもできます。このオプションは推奨しません。

- ▶ ServerView Operations Manager をインストールします。

SQL Server Configuration Manager によるインストール後も、サービスアカウントの割り当てを、変更することができます（例えば Express Edition 用など）。



SQL Server のインストール後にそのサーバの役割を変更しないでください。

例えば、SQL Server をメンバーサーバにインストールした場合、Active Directory Installation Wizard (*dcpromo.exe*) ツールを使用してそのサーバをドメインコントローラに変更しないでください。

また、SQL Server をドメインコントローラにインストールした場合、Active Directory Installation Wizard を使用してそのサーバをメンバーサーバに変更しないでください。

SQL Server のインストール後にサーバの役割を変更すると機能が損なわれるほか、サポートもされません。

3.10 SQL Server 2008

Operations Manager バージョン 4.90 では、Windows Server 2008 または Windows Server 2003 上の SQL Server 2008 インスタンスに ServerView データベースをインストールすることができます。SQL Server 2008 は Operations Manager をインストールする前にインストールしてください。

3.10.1 ソフトウェア要件

- OS:
Windows Server 2008 SP1 以上
Windows Server 2003 SP2 以上
- Internet Explorer 6 SP1 以上
- Microsoft .NET Framework 3.5 SP 1 以上
- Windows Installer 4.5 以上
- Windows PowerShell 1.0 以上

3.10.2 SQLServer のエディション

以下のエディションを使用できます。

- Express Edition
SQL Server 2005 Express と MSDE 2000 の後継である SQL Server 2008 Express 無償エディションであり、Microsoft ダウンロードセンターから入手できます。
- Workgroup Edition
- Standard Edition
- Enterprise Edition

3.10.3 サービスアカウントのセットアップ

SQL Server 2008 をインストールする場合、「サーバ設定」画面でサービスアカウントを指定する必要があります。インストールの前に 1 つ以上のサービスアカウントをセットアップすることをお勧めします。

サービスアカウントは以下のサービスに必要です。

- SQL Server データベースサービス
- SQL Server エージェント（SQL Server Express ではない）
- SQL Server ブラウザ

SQL Server と Operations Manager を同一のシステムにインストールする場合は以下の点にご注意ください。

- 「Network Service アカウント」を使用しないでください。
「Network Service アカウント」で SQL Server を実行すると Operations Manager のインストールがキャンセルされます。
- SQL Server のインストールのセキュリティを確保するため、ローカルの Windows のユーザアカウントで各サービスを実行する必要があります。ローカルの Windows のユーザアカウントを管理者のグループに割り当てないでください。

ただし、ローカルの Windows のユーザアカウントの使用に関しては例外があります。

- リモートのプロシージャのコール、レプリケーション、ネットワークドライブへのバックアップ、リモートのデータソースを異なる SQL サーバ上で使用する場合、ローカルの Windows のアカウントでは不十分です。
- 以前のバージョンの SQL Server との side-by-side 構成で SQL Server 2008 をインストールする場合、グローバルのドメイングループからのアカウントだけが使用できます。
- フェイルクラスタのインストールにはローカルのシステムやローカルのサービスアカウントは使用できません。

- ローカルのサービスアカウントをセットアップしたくない場合は、システムアカウントを使用することができます。手順は以下のとおりです。
 - 「SQL Server」と「SQL Server Agent」サービスには「Local System」を選択します。
 - 「SQL Server Browser」サービスには「Local Service」を選択します。



ローカルのシステムアカウント（「Local System」）は非常に高い権限を持つ統合アカウントです。システムアカウントを使用する場合は注意が必要です。

SQL Server と Operations Manager を別々のシステムにインストールする場合は、SQL Server サービスは管理者権限を持たないドメインユーザアカウントで実行してください。

SQL Server 2008 のインストール後も、SQL Server 構成マネージャーによりサービスアカウントを割り当てることができます。

サービスアカウントについての詳細は「SQL Server 2008 Books Online」を参照してください。

3.10.4 SQL Server 2008 Express Edition のインストール

SQL Server 2008 Express は SQL Server の無償バージョンです。このエディションは Microsoft ダウンロード センターからダウンロードできます。SQL Server 2008 Express のインストールについての詳細は、Microsoft ダウンロード センターを参照してください。

Microsoft ダウンロード センターでのファイルのダウンロード

- ▶ Microsoft ダウンロード センター
<http://www.microsoft.com/Japan/download.htm> にアクセスします。
- ▶ 「Product Families」で「Servers」を選択します。
- ▶ 「Show Downloads for」で「Microsoft SQL Server」を入力し、「Go」をクリックします。
- ▶ 「Show Downloads for」で「Microsoft SQL Server」を入力し、「Go」をクリックします。
- ▶ 表示されたリストから、リンクの「Microsoft SQL Server 2008 Express with Tools」をクリックします。「Released」欄をクリックするとリリース日付順にダウンロードをソートすることができます。
- ▶ 「Change Language」で、該当する言語版を選択します。
- ▶ 「Change」をクリックします。
- ▶ 32 ビットシステムには x86 パッケージをダウンロードし、64 ビットシステムには x64 パッケージをダウンロードします。
- ▶ 「Instructions」の下に、以下のパッケージが表示されます。
Microsoft .NET Framework, Windows Installer and Windows PowerShell
パッケージをダウンロードし、インストールします。Windows Power Shell 1.0 の Windows Server 2008 へのインストール手順は以下のとおりです。
 - ▶ 「スタート」→「サーバーマネージャー」の順に選択します。
 - ▶ 左側のウィンドウペインで「機能の概要」を選択します。
 - ▶ 「機能の追加」を選択します。
 - ▶ オプションの「Windows PowerShell」を選択します。
 - ▶ 「次へ」、「インストール」の順にクリックします。

インストール

- ▶ 管理者としてシステムにログオンします。
- ▶ 該当する以下の *.exe ファイルを実行します。

SQLEXPRTW_x64_JPN.exe または *SQLEXPRTW_x64_ENU.exe*
SQLEXPRTW_x86_JPN.exe または *SQLEXPRTW_x86_ENU.exe*

インストールは対話式です。Operations Manager に必要な入力項目は以下の通りです。Operations Manager はインスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の SQL Server 2008 Express だけを認識します。

- ▶ 64 ビットの OS をご使用の場合、左側のウィンドウペインで、プロセッサタイプ「x64」が後に続く「オプション」を選択します。
- ▶ 「インストール」を選択します。
- ▶ ウィザードを起動して、「非クラスタ環境に SQL Server 2008 をインストールするか、既存の SQL Server 2008 インスタンスに機能を追加します。」を選択します。
- ▶ 「機能の選択」画面で、オプションの「データベースエンジンサービスと」「管理ツール」→「基本」を選択します。
- ▶ 「インスタンスの構成」画面で、「名前付きインスタンス」を選択し、インスタンス名の「SQLSERVERVIEW」を入力します。
- ▶ 「サーバの構成」画面で、「すべての SQL Server サービスで同じアカウントを使用する」をクリックします。
- ▶ SQL Server を実行したい Windows ユーザアカウントを指定します。[44 ページの「サービスアカウントのセットアップ」](#)の項に記載されている適切なアカウントを選択します。
- ▶ また、「SQL Server Browser service」の「スタートアップの種類」は、「自動」を選択します。
- ▶ 「データベースエンジンの構成画面」画面で、「現在のユーザの追加」をクリックします。



SQL Server 2008 をインストールすると、デフォルトではローカルの管理者グループが自動的に SQL Server へはアクセスできないようになっています。したがって、ここで追加するユーザアカウントを後で行う Operations Manager のインストールに使用する必要があります。さらに、Operations Manager のインストールダイアログに入力されるユーザアカウントはすべて認証済み SQL Server 管理者である必要があります。これは「Download Manager Logon Information」画面などに適用されます。後で現在のユーザとして他のユーザアカウントを使用したい場合は、ここで認証済み SQL Server 管理者を他のユーザアカウントとして追加することができます。

ユーザアカウントは後で SQL Server Management Studio でも確認および追加することができます。SQL Server Management Studio では、認証済み SQL Server 管理者は「セキュリティ」→「サーバー ロール」→「sysadmin」にあります。

デフォルトでは、TCP/IP ネットワークプロトコルは SQL Server Express Edition ではアクティブではありません。しかし TCP/IP ネットワークプロトコルは Operations Manager データベースアクセスに必要です。したがって、SQL Server Express をインストールした場合は、TCP/IP ネットワークプロトコルをアクティブにしてから Operations Manager のインストールを開始する必要があります。手順は以下のとおりです。

- ▶ SQL Server 構成マネージャを起動します。
- ▶ 「SQL Server ネットワーク構成」で、インストール済みの SQL Server インスタンスの SQL Server インスタンス名を選択します。
- ▶ TCP/IP プロトコルを「有効」に設定します。

この変更を有効にするためには SQL Server サービスを再起動する必要があります。

3.10.5 SQL Server 2008 Enterprise/Standard/Workgroup Edition のインストール

Microsoft .NET Framework、Windows Installer、Windows PowerShell の各パッケージは、SQL Server 2008 Enterprise/Standard/Workgroup Edition のインストール時に自動的にインストールされます。

Windows PowerShell 1.0 の Windows Server 2008 へのインストール手順は以下のとおりです。

- ▶ 「スタート」→「サーバーマネージャー」の順に選択します。
- ▶ 左側のウィンドウペインで「機能の概要」を選択します。
- ▶ 「機能の追加」を選択します。
- ▶ 「Windows PowerShell」を選択します。
- ▶ 「次へ」、「インストール」の順にクリックします。

インストール

- ▶ 管理者としてシステムにログオンします。
- ▶ インストールメディアをセットします。
- ▶ ルートディレクトリの *setup.exe* ファイルを実行します。

インストールは対話式です。Operations Manager に必要な入力項目は以下のとおりです。インスタンス名には、規定のインスタンス名や他のインスタンス名も使用できます。

Microsoft .NET Framework がインストールされていない場合

- ▶ 「ライセンス条項」画面で使用許諾に同意します。
- ▶ 「セットアップ完了」画面で「Exit」をクリックし、アップデートを開始します。

必要なパッケージの自動インストール後、「SQL Server インストールセンター」が起動します。

- ▶ 64 ビットの OS をご使用の場合、左側のウィンドウペインで、プロセッサタイプ「x64」が後に続く「オプション」を選択します。
- ▶ 「インストール」を選択します。

- ▶ ウィザードを起動して、「非クラスタ環境に SQL Server 2008 をインストールするか、既存の SQL Server 2008 インスタンスに機能を追加します。」を選択します。
- ▶ 「機能の選択」画面で、オプションの「データベースエンジンサービス」と「管理ツール」→「基本」、または「管理ツール」→「完全」を選択します。
- ▶ 「インスタンスの構成」画面で、「名前付きインスタンス」を選択し、インスタンス名の SQLSERVERVIEW を入力します。
- ▶ 「サーバの構成」画面で、「すべての SQL Server サービスで同じアカウントを使用する」をクリックします。
- ▶ SQL Server 2008 Edition を Operations Manager と同じシステムにインストールしようとしている場合は、管理者権限のないローカルの Windows ユーザアカウントとパスワードを入力します。リモートのデータベースの場合は、管理者権限のないドメインユーザアカウントとパスワードを入力します。[44 ページの「サービスアカウントのセットアップ」の項](#)を参照してください。
- ▶ また、「SQL Server Agent」と「SQL Server Browser サービス」の「スタートアップの種類」は、「自動」を選択します。
- ▶ 「データベースエンジンの構成」画面で、「現在のユーザの追加」をクリックします。



SQL Server 2008 をインストールすると、デフォルトではローカルの管理者グループが自動的に SQL Server へはアクセスできないようになっています。したがって、ここで追加するユーザアカウントを後で行う Operations Manager のインストールに使用する必要があります。さらに、Operations Manager のインストールダイアログに入力されるユーザアカウントはすべて認証済み SQL Server 管理者である必要があります。これは「Download Manager Logon Information」画面などに適用されます。後で現在のユーザとして他のユーザアカウントを使用したい場合は、ここで認証済み SQL Server 管理者を他のユーザアカウントとして追加することができます。

3.10.6 SQL サーバ管理者権限を持つユーザアカウントの追加

SQL Server Management Studio でユーザアカウントを確認し追加することもできます。SQL Server Management Studio の「セキュリティ」－「サーバールール」－「sysadmin」に承認された SQL Server 管理者が表示されます。

コンテキストメニューで「Properties」を選択し、SQL サーバ管理者権限を持つユーザアカウントを追加します。

3.11 SQL Server 2005

Operations Manager を使用するには SQL データベースが必要です。SQL Server 2005 がすでにシステムにある場合、Operations Manager ソフトウェアのインストール時に SQL Server 2005 を指定することができます。SQL Server 2005 Express Edition の場合は、Operations Manager 専用のインスタンスが必要であり、SQLSERVERVIEW という名前であればなりません。常に最新のサービスパックを使用することをお勧めします。

Windows Server 2008 では、SQL Server 2005 または SQL Server 2005 Express を使用しなければなりません。Operations Manager ソフトウェアをインストールすると、SQL Server 2005 Express が自動的にインストールされます。

Microsoft は Windows Server 2008 上の MSDE 2000/SQL Server 2000 のサポートを終了しています。



ServerView V4.52 は、SQL Server 2000 または MSDE 2000 からの SQL Server 2005 または SQL Server 2005 Express へのアップグレードをサポートします。

データベースを管理するために、SQL Server Management Studio (Express)、osql、または sqlcmd を使用することができます。[146 ページの「SQL Server 2008/2005」の項](#)を参照してください。

3.11.1 エディション

以下の SQL Server 2005 のエディションを使用できます。

Express Edition

SQL Server 2005 Express は MSDE 2000 の後継バージョンであり、Microsoft ダウンロードセンターから入手できます。最小で 512 MB の RAM が必要であり、最大で 1 個の CPU と 1 GB の RAM を使用します。

Workgroup Edition

小規模の組織向け。最大 2 個の CPU と 3 GB の RAM を使用します。

Standard Edition

小・中規模の組織向け。
最大 4 個の CPU を使用します。最大使用 RAM は OS がサポートする最大サイズと同じです。フェイルオーバークラスタをサポートします (2 ノードまで)。

Enterprise Edition

4 個を越える CPU をサポートします。最大使用 RAM は OS がサポートする最大サイズと同じです。フェイルオーバークラスタをサポートします。

3.11.2 インストールの準備

SQL Server 2005 のインストール中、ハードウェアとソフトウェアの要件の確認があります。これらの詳細、最新のサービスパック、および SQL Server 2005 Express パッケージのダウンロードは、

<http://www.microsoft.com/Japan/download.htm> の Microsoft ダウンロードセンターを参照してください。

ダウンロードセンターには、SQL Server 2005 のインストールについてさらに詳細な Readme ファイルと SQL Server 2005 Books Online があります。

SQL Server 2005 をインストールする前に .NET Framework 1.2 とそれ以降の 1.x バージョンをご使用のコンピュータからアンインストールしてください。.NET Framework 1.0 と 1.1 はアンインストールする必要はありません。

SQL Server 2005 のエディションはすべて対話式にインストールすることができます。



SQL Server インスタンスの異なる言語版の同一システムへのインストールはサポートしていません。

例

SQL Server 2005（英語）と SQL Server 2005（日本語）は、同一システムへの並列インストールされたインスタンスとしてはサポートされません。

3.11.3 SQL Server 2005 Express Edition のインストール

ServerView Suite DVD 1 には SQL Server 2005 Express（日本語版）が梱包されている Operations Manager が入っています。Windows Server 2008 では、Operations Manager ソフトウェアのインストール中にこのバージョンを自動的にインストールすることができます。Windows Server 2003 では、このバージョンを Microsoft ダウンロードセンターでダウンロードした後、対話式にインストールすることができます。[55 ページ](#)を参照してください。



SQL Server 2005 Express は、任意のインスタンス名の SQL Server 2005 Workgroup/Standard/Enterprise Edition、もしくは ServerView インスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の SQL Server 2005 Express のどちらもインストールされていない場合に、Operations Manager と一緒に自動でインストールされます。

Microsoft ダウンロードセンターからの SQL Server 2005 Express のインストール

以下の項には Microsoft ダウンロードセンターで入手できる SQL Server 2005 Express のインストール方法が記載されています。常に最新のサービスパックを使用するように注意してください。この項では現時点で最新の Service Pack 3 について記載します。

Microsoft ダウンロードセンター

(<http://www.microsoft.com/Japan/download.htm>) から以下のファイルをダウンロードします。検索フィールドに以下の内容を入力し、QuickInfo セクション内で該当の言語を選択します。

- .NET Framework 2.0 再頒布可能パッケージ (Windows Server 2008 以外の場合)
- SQL Server 2005 Express Edition SP3
- オプション : SQL Server Management Studio Express SP3
- オプション : SQL Server 2005 Books Online

次の順序でソフトウェアをインストールしてください。

1. .NET Framework 2.0 再頒布可能パッケージをインストールします。
2. SQL Server 2005 Express Edition SP3 をインストールします。

SQLEXPRESS.EXE を実行し、インストールを開始します。SQL Server 2005 Express のインストールは対話式です。ほとんどのダイアログボックスではデフォルトの設定のままでいいですが、以下の項目は設定する必要があります。

- ▶ 「登録情報」画面で、「詳細構成オプションを非表示にする」を無効にします。
- ▶ 「インスタンス名」画面で、インスタンス名を「SQLEXPRESS」から「SQLSERVERVIEW」に変更します。

▶ 「サービスアカウント」画面において

- 「Network Service」アカウントは使用しないでください。
- 「ドメインユーザーアカウントを使用する」をクリックし、ユーザー名、パスワード、ドメイン名を入力します。

ドメインユーザーアカウントには管理者権限は必要ありません。このアカウントは SQL のすべてのサービスに使用することができます。

ここにローカルの Windows のユーザーアカウントを入力する場合は、最小の権限と最高のセキュリティレベルを持つアカウントを使用してください。

ローカルの Windows のユーザーアカウントの使用に関しては例外もいくつかあります。

- リモートによる手順の呼び出し、レプリケーション、ネットワークドライブへのバックアップ、および異なる形式のデータソースをリモートでサーバ上で使用する場合、ローカルの Windows のアカウントでは不十分です。
- 以前のバージョンの SQL Server との side-by-side 構成で SQL Server 2005 をインストールする場合、グローバルのドメイングループからのアカウントのみ使用できます。
- フェイルクラスタのインストールにはローカルのシステムやローカルのサービスアカウントは使用できません。

さらに詳細な情報は SQL Server 2005 Readme ファイルと SQL Server 2005 Books Online の " サービスアカウント " に記載されています。

また、「サービスアカウントごとにカスタマイズする」を選択して、サービスごとに別々のサービスアカウント（統合システムアカウントなど）を選択できます。

- ▶ 「ローカルシステム」アカウントを「SQL Server Service」サービスに、「ローカルサービス」アカウントを「SQL Server Browser」サービスに割り当てます。

インストール後に SQL Server Configuration Manager を用いて、サービスアカウントの割り当てを変更することができます。この件についての詳細は、SQL Server 2005 のオンラインドキュメントの「サービスアカウント」を参照してください。

Windows Server 2008 では、「追加情報」画面のオプション「Launch the User Provisioning Tool」のチェックを外してください。

デフォルトでは、TCP/IP ネットワークプロトコルは SQL Server Express エディションではアクティブではありません。しかし TCP/IP ネットワークプロトコルは Operations Manager のデータベースアクセスに必要です。したがって、SQL Server 2005 Express をインストールしている場合は、Operations Manager のインストールを開始する前に TCP/IP ネットワークプロトコルをアクティブにする必要があります。手順は以下のとおりです。

- ▶ SQL Server 構成マネージャーを起動します。
- ▶ 「SQL Server 2005 ネットワークの構成」で、インストール済みの SQL Server インスタンスの SQL Server インスタンス名を選択します。
- ▶ TCP/IP プロトコルを「有効」に設定します。

この変更を有効にするためには SQL Server サービスを再起動する必要があります。

3. オプション：SQL Server Management Studio Express SP3 をインストールします。

- ▶ ファイル *SQLServer2005_SSMSEE.msi* を実行します。

インストールは対話式です。ほとんどのダイアログボックスはデフォルトの設定のままでいいです。このインストールによってグラフィカルプログラムである SQL Server Management Studio Express がインストールされます。

4. オプション：SQL Server 2005 Books Online をインストールします。

これにより、SQL Server 2005 のオンラインドキュメントがインストールされます。

5. ご使用の SQL Server システムがインターネットにアクセス可能な場合は、Microsoft アップデート Web サイト (<http://www.update.microsoft.com>) を介してアップデートすることができます。インターネットにアクセスできない場合は、Microsoft ダウンロードセンターで追加のアップデートパッケージを確認してください。

3.11.4 SQL Server 2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition のインストール

本項では、Microsoft SQL Server 2005 DVD からインストールする必要のある SQL Server 2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition の初期バージョンのインストール方法を記載します。

SQL Server 2005 のインストールは対話式です。ほとんどのダイアログボックスはデフォルトの設定のままでいいですが、以下の項目は設定する必要があります。

- ▶ 「インストールするコンポーネント」画面で、オプションの「SQL Server データベースサービス」を選択し、「詳細設定」をクリックします。
Workgroup Edition では、「インストールするコンポーネント」画面は表示されません。
- ▶ 「機能の選択」画面で、「SQL Server Database Services」を開きます。
- ▶ 「データファイル」で、「ローカルハードドライブにインストール」を項目から選択します。
- ▶ 「共有ツール」で、ローカルハードドライブにインストールを項目から選択します。
- ▶ 「機能の選択」画面で、「クライアントコンポーネント」を開きます。
- ▶ 「管理ツール」で、ローカルハードドライブにインストールを項目から選択します。これによりグラフィカルプログラムである SQL Server Management Studio がインストールされます。
- ▶ 「ドキュメント、サンプル、およびサンプルデータベース」で、ローカルハードドライブにインストールを項目から選択することもできます。これにより SQL Server 2005 オンラインドキュメントがインストールされます。
- ▶ 「サービスアカウント」画面において
 - 「NetworkService」のアカウントを使用しないでください。.
 - 「ドメインユーザーアカウントを使用する」をクリックしてユーザ名、パスワード、ドメイン名を入力してください。ドメインユーザーアカウントには管理者権限は必要ありません。ドメインユーザーアカウントは SQL のすべてのサービスに使用することができます。ここにローカルの Windows のユーザーアカウントを入力する場合は、最小の権限と最高のセキュリティレベルを持つアカウントを使用してください。

ただし、ローカルの Windows のユーザアカウントの使用に関しては例外もいくつかあります。

- リモートによる手順の呼び出し、レプリケーション、ネットワークドライブへのバックアップ、および異なる形式のデータソースをリモートでサーバ上で使用する場合、SQL Server Agent メール機能、および SQL Mail を他のアプリケーション用に SQL サーバ上で使用する場合は、ローカルの Windows のアカウントでは不十分です。
- 以前のバージョンの SQL Server との side-by-side 構成で SQL Server 2005 をインストールする場合、グローバルのドメイングループからのアカウントのみ使用できます。
- フェイルクラスタのインストールにはローカルのシステムやローカルのサービスアカウントは使用できません。

さらに詳細な情報は SQL Server 2005 Readme ファイルと SQL Server 2005 Books Online の " サービスアカウント " に記載されています。

また、「サービスアカウントごとにカスタマイズする」を選択して、サービスごとに別々のサービスアカウント（統合システムアカウントなど）を選択できます。

- ▶ 「ローカルシステム」アカウントを「SQL Server サービス」と「SQL Server Agent」サービスに、「ローカルサービス」アカウントを「SQL Server Browser」サービスに割り当てます。

インストール後に SQL Server Configuration Manager を用いて、サービスアカウントの割り当てを変更することができます。この件についての詳細は SQL Server 2005 オンラインドキュメントの " サービスアカウント " 項を参照してください。

- ▶ オプションの「SQL Server Agent」と「SQL Browser」を選択します。

Enterprise/Standard/Workgroup エディションの初期バージョン以外のインストール手順も同様です。

サービスパックのインストール

SQL Server 2005 Express Edition 以外の Enterprise/Standard/Workgroup エディションはサービスパックでアップデートすることができます。

ご使用の SQL Server システムがインターネットにアクセス可能な場合は、Microsoft アップデート Web サイト (<http://www.update.microsoft.com>) を介してアップデートすることができます。「カスタム」ボタンをクリックして利用可能なアップデートを表示してください。

ご使用の SQL Server システムがインターネットにアクセスできない場合は、インターネットにアクセス可能なシステムを使用して、Microsoft ダウンロードセンター SQL Server インスタンス (<http://www.microsoft.com/Japan/download.htm>) でサービスパックをダウンロードしてください。

- ▶ 「Advanced Search」のリンクをクリックします。
- ▶ 「Keywords」で「2005 SP」を入力します。
- ▶ 「Product/Technology」リストから「Microsoft SQL Server」を選択します。
- ▶ 「Go」をクリックします。

結果のリストが表示されます。

- ▶ 結果のリストから最新のサービスパックを選択します。
- ▶ 「Change Language」リストから、インストール済みの SQL サーバの言語を選択し、「Change」をクリックします。

例

Service Pack 3:
SQLServer2005SP3-KB955706-XXX-LLL.exe

XXX

プラットフォームを示しています。

LLL

言語を特定しています。

- ▶ 「Download」をクリックし、ファイルをダウンロードします。
- ▶ 開いたウィンドウで「Save」をクリックし、ファイルの保存場所を選択します。

Windows Server 2008 では、「追加情報」画面のオプション「Launch the User Provisioning Tool」のチェックを外してください。



アップデートインストールする前にそのサーバインスタンスに関連するアプリケーションやサービスをすべて終了してください。SQL Server Management Studio と「プログラムの追加と削除」画面は閉じてください。

- ▶ インストールを開始します。

インストールは対話式で、デフォルト値のままで構いません。アップデートされたコンポーネントは「機能の選択」画面に表示されます。

インストール後にシステムが再起動します。

3.12 SQL Server 2000 (MSDE 2000)

3.12.1 MSDE 2000

ServerView Suite DVD 1 に、MSDE 2000 (日本語版) が梱包されている Operations Manager が入っています。Operations Manager のインストール中にこのバージョンを自動的にインストールすることもできます。



MSDE 2000 は、任意のインスタンス名の SQL Server 2000 Service Pack 4 や SQL Server 2005、もしくは ServerView インスタンス名が「SQLSERVERVIEW」の MSDE 2000 Service Pack 4 や SQL Server Express のどちらもインストールされていない場合に、Operations Manager と一緒に自動でインストールされます。

MSDE 2000 は、200 台以下のサーバ構成を推奨します。この上限に達した場合、SQL Server 2000 へのアップグレードを推奨します。[180 ページの「負荷分散の変更」](#)の項を参照してください。MSDE 2000 のバージョン 8.00.2039 からのアップグレードのみ可能です。

データベース管理には、Enterprise Manager または Dbamgr2k を使用することができます。Enterprise Manager は、SQL Server 2000 の基本インストールと一緒に直接インストールされます。Dbamgr2k のインストール方法については [161 ページの "Dbamgr2k"](#) を参照してください。



Operations Manager バージョン 4.8 以降の場合、MSDE 2000 では SQL Server エージェントによる ServerView データベースのバックアップやメンテナンスの実行はできませんが、SQL Server 2005 Express では、Windows タスクスケジューラが実行します。

Microsoft ダウンロードセンターからの MSDE 2000（日本語版）のインストール

日本語版 MSDE 2000 のインストールの手順は以下のとおりです。

- ▶ Microsoft ダウンロードセンター
(<http://www.microsoft.com/Japan/download.htm>) からファイル
SQL2000.MSDE-KB884525-SP4-x86-JPN.EXE をご使用のシステムにダウンロードします。
- ▶ 以下のコマンドをコマンドプロンプトに入力します。

```
cd <Directory of the unpacked data>
cd MSDE
setup.exe SAPWD=<password> INSTANCENAME=SQLSERVERVIEW
DISABLENETWORKPROTOCOLS=0
```
- ▶ システムを再起動します。

3.12.2 SQL Server 2000

Operations Manager には SQL データベースが必要です。SQL Server 2000 Service Pack 4 がご使用のシステムにインストール済み場合は、Operations Manager ソフトウェアのインストール時に SQL Server 2000 Service Pack 4 を指定することができます。

データベース管理には Enterprise Manager、DbaMgr2k、osql を使用することができます。148 ページの「SQL Server 2000 および MSDE」の項を参照してください。

3.12.2.1 エディション

以下の SQL Server 2000 のエディションを使用できます。

Workgroup Edition

小規模の組織向け

Standard Edition

小・中規模の組織向け。最大 4 個までの CPU、2 GB までのメモリステムで使用することができます。

Enterprise Edition

4 個を越える CPU と 2 GB を超えるメモリが必要です。2 ノードのフェイルオーバークラスタをサポートします。

3.12.2.2 インストール

SQL Server 2000 のインストールには、まず SQL Server 2000 の基本インストールを行い、その後 SQL Server 2000 Service Pack 4 をインストールする必要があります。基本インストールでは、Enterprise Manager もインストールされます。これはデータベース管理用のグラフィカルプログラムです。



SQL Server 2000 Standard Edition Service Pack 4 は SQL Server 2000 Enterprise Edition Service Pack 4 にアップグレードすることができません。

Standard Edition と Enterprise Edition はサーバ OS のみインストール可能です。

基本インストール

基本インストールでは以下を設定します。

- インストール範囲を選択してください。
 - ▶ SQL Server 2000 と Enterprise Manager のインストールには「サーバーとクライアントツール」（デフォルト）を選択します。
- SQL Server インスタンスを指定してください。
 - ▶ SQL Server インスタンスには「規定インストール」を選択します。Operations Manager インストールウィザードの「SQL Server Connection」では、この SQL Server インスタンスが名前（「local」）の下に表示されます。
- 認証モードを指定してください。
 - ▶ 「Windows 認証モード」を指定します。

サービスパックのインストール

アップデートパッケージの SQL Server 2000 Service Pack 4 をインストールしてください。

3.13 リモートの SQL Server の設定

リモートの SQL Server の設定手順は以下のとおりです。

- ローカルの管理者としてログインします。
- SQL Server インスタンス用の以下のサービスをリモートのシステムで起動します。

SQL Server

SQL ServerAgent

SQL Server Browser (SQL Server 2005 のみ)

「SQL Server」と「SQL Server Agent」のサービスはドメインユーザアカウントで実行してください。セキュリティのため、このアカウントは Windows グループの「Administrators」のメンバーではないものにしてください。

両サービスは、サービスアカウントの「Local System」でも実行することができます。このアカウントは高い権限を持っているため、セキュリティ上推奨されません。「SQL Server Browser」サービスはデフォルトでは、サービスアカウントの「Local Service」で実行します。

データベース管理ツールを使用して SQL Server のスタートアップアカウントを調べるか変更してください。これにより、必要な許可と Windows のユーザ権限をすべて新しいスタートアップアカウントに自動的に割り当てられるようになります。

SQL Server 2005 には SQL Server 構成マネージャーを使用してください。

- ▶ SQL Server 2005 の「サービス」をクリックします。
- ▶ アカウントを変更するには、サービスを停止し、右クリックメニューの「プロパティ」でサービスアカウントを変更します。
- ▶ サービスを開始します。

SQL Server 2000 の場合の手順は以下の通りです。

- ▶ 管理ツールの「サービス」で、「MSSQLSERVER」と「SQLSERVERAGENT」サービスを停止します。
- ▶ Enterprise Manager を起動し「SQL Server」と「SQL Server Agent」のサービスアカウントを変更します。
- ▶ 管理ツールの「サービス」で、サービス「MSSQLSERVER」と「SQLSERVERAGENT」を起動します。

- リモートの SQL Server へのアクセスは、Operations Manager サービスの Windows のドメインユーザアカウントによって認証されます。Operations Manager のインストール中には、インストールを行うドメインユーザアカウントや、サービス用に指定する他のすべてのドメインユーザアカウントが必要となります。

これらのアカウントに関しては、以下の記述に注意してください。

- ドメインユーザアカウントは使用するサーバと同じドメインに属している必要があります。
- ドメインユーザアカウントは、SQL Server 管理ツールによって SQL Server で「ログイン」として作成する必要があります。
- このログインには特定のサーバ役割を割り当てる必要があります。役割には、インストールやアプリケーションの実行に必要な権限を含みます。

ユーザアカウントの設定手順は以下のとおりです。

- ▶ リモートのシステムで管理者としてログインします。
- ▶ データベース管理に必要なプログラムを起動します。
 - SQL Server 2005 の場合、「SQL Server Management Studio」
 - SQL Server 2000 の場合、「Enterprise Manager」
- ▶ SQL Server インスタンスを選択するか、SQL Server インスタンスに接続します。
- ▶ 「セキュリティ」→「ログイン」の順に選択します。
- ▶ 右クリックメニューから、「新規ログイン」を選択します。「新規ログイン」画面が開きます。
- ▶ ドメインユーザアカウントの名前を、「ログイン名」または「名前」に入力します。他の設定はそのまま構いません。
- ▶ 「サーバーの役割」タブに切り替えます。
- ▶ サーバの役割として「sysadmin」または「System Administrators」を選択します。
- ▶ 「OK」をクリックします。

- 対応する SQL Server インスタンスへのリモートからのアクセス（TCP/IP による）をアクティブにする必要があります。
 - － SQL Server 2000 インスタンスの場合
 - ▶ 「スタート」→「すべてのプログラム」→「Microsoft SQL Server」→「サーバーネットワークユーティリティ」の順に選択して、「SQL Server ネットワークユーティリティ」を開きます。
 - ▶ 「全般」タブで、TCP/IP がこのインスタンスの「有効になっているプロトコル」の下にリストされているかどうか確認します。
 - ▶ 上記で表示されていない場合、このインスタンスの TCP/IP を有効にします。
 - － SQL Server 2005 インスタンスの場合
 - ▶ 「スタート」→「すべてのプログラム」→「Microsoft SQL Server 2005」→「構成ツール」→「SQL Server 構成マネージャ」の順に選択して、「SQL Server Configuration Manager」を開きます。
 - ▶ 「SQL Server 2005 ネットワークの構成」を選択します。
 - ▶ 次に「< インスタンス名 > のプロトコル」をクリックします。プロトコルとそのステータスのリストが表示されます。
 - ▶ 「Protocol for <instance>」の設定を確認します。
 - ▶ TCP/IP プロトコルのステータスが「有効」に設定されていることを確認してください。
 - ▶ 無効になっている場合、有効にします。
- SQL Server インスタンスへのリモートからのアクセスの場合、静的ポートが必要です。名前のない SQL Server インスタンスを使用するか、または名前付きインスタンスに静的ポートを設定します。

名前付きインスタンスのポートの設定を確認する手順は以下のとおりです。

- ▶ 「レジストリエディタ」を開きます。
- ▶ 以下の項目を検索します。

- － SQL Server 2008 インスタンスの場合

`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Microsoft SQL Server\MSSQL<n.Instance Name>\MSSQLServer\SuperSocketNetLib\Tcp\IPAll`

- SQL Server 2005 インスタンスの場合

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Microsoft SQL Server\<MSSQL.n>\MSSQLServer\SuperSocketNetLib\Tcp

- SQL Server 2000 インスタンスの場合

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Microsoft SQL Server\<instance_name>\MSSQLServer\SuperSocketNetLib\Tcp

- ▶ 「TCPDynamicPorts」と「TCPPort」の値を確認します。
「TCPDynamicPorts」の値が設定されていない場合、SQL Server は常に静的ポートを使用します。ポート番号は「TCPPort」の下にあります。



以前に静的ポートが設定された場合、SQL Server インスタンスを再起動してポートの変更を有効にする必要があります。

名前付きインスタンスの静的ポートは、以下の設定ツールによって割り当てることができます。

- SQL Server 2000 インスタンスの場合、「SQL Server ネットワークユーティリティ」
- SQL Server 2005 インスタンスの場合、「SQL Server Configuration Manager」。手順は SQL Server 2005 Books Online の " 特定の TCP ポートで受信待ちするようにサーバーを構成する方法 " に記載されています。
- ファイアウォールの設定によってポートが遮断されないように注意してください。必要であれば、ファイアウォール管理プログラムで以下の SQL Server インスタンス用のポートの設定をしてください。
 - レジストリエディタで、プログラム SQL Server とプロトコル TCP に対してデフォルトのポート番号 1433 か、「TCPPort」の下にあるポート番号を追加します。
 - プログラム SQL Server とプロトコル UDP に対してポート番号 1434 を追加します。

管理端末でのその他の手順

- ▶ ローカルの管理者としてログオンします。
- ▶ Operations Manager のインストールを行うドメインユーザアカウントと、サービス用にインストール中に指定するすべてのドメインユーザアカウントを追加します。例えば「リモート DB」画面や「ログオン情報」画面などでは「Administrators」グループに対して追加します。
- ▶ このドメインユーザアカウントでログオンします。
- ▶ ServerView Operations Manager のインストールを開始し、「SQL Server の選択」画面で「別サーバの SQL Server にリモート接続する」を選択します。98 ページの「[Operations Manager ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール](#)」の項を参照してください。
- ▶ 「リモート DB」画面で、対応する値を入力します。99 ページの「["Operations Manager インストールウィザード - SQL Server の選択"](#)」を参照してください。ローカルのサービスの「ServerView Services」はこのアカウントで実行され、上記で作成した SQL Server Login によってリモートの SQL Server にアクセスすることができます。
- ▶ ログオン情報画面で、同じドメインユーザアカウントか、SQL Server Login として作成した他のドメインユーザアカウントを入力します。
- ▶ その他のウィンドウの入力項目は 98 ページの「[Operations Manager ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール](#)」の項に記載されています。

ServerView Operations Manager のインストール後に「SQL Server」と「SQL Server Agent」のサービスアカウントを変更したい場合は、リモートのシステムで、SQL Server のバックアップフォルダ *DbBackupPath* の *%windir%\ServerViewDB.ini* 以下のファイルに書き込み許可を与えます。

アップグレードインストール

ServerView Operations Manager をインストールする際、ServerView サービスのユーザ名とパスワードを「リモート DB」画面で指定します。

パスワードは保存されないため、アップグレードインストールではパスワードを再度入力する必要があります。Operations Manager インストールウィザードではパスワード入力のために以下のウィンドウが開きます。

The screenshot shows a Windows-style dialog box titled "Fujitsu ServerView Operations Manager セットアップ". Below the title bar, the text "ServerViewサービス ログイン情報" is displayed, followed by "サービスのログインユーザ名およびパスワード". The Fujitsu logo is in the top right corner. The main area contains the text: "Fujitsu ServerView Operations Managerサービスは、以下のドメインユーザアカウントでインストールされます。" and "このユーザのパスワードを入力してください。". There are two input fields: "ユーザ名:" and "パスワード:". At the bottom left, it says "Wise Installation Wizard(R)". At the bottom right, there are three buttons: "< 戻る (B)", "次へ (N) >", and "キャンセル".

図 3: パスワードの入力

3.14 SQL Server のアップグレードインストール

3.14.1 新しいバージョンの SQL Server へのアップグレード

インストール済みの ServerView データベースでは、既存の SQL Server (SQL Server 2005 /SQL Server 2005 Express または SQL Server 2000/MSDE) のインスタンスから新しいバージョンの SQL Server へアップグレードすることができます。

- バージョン 4.52 の ServerView では、SQL Server 2000 または MSDE から SQL Server 2005 または SQL Server 2005 Express へのアップグレードをサポートします。
- バージョン 4.90 の Operations Manager では、SQL Server 2005/SQL Server 2005 Express または SQL Server 2000/MSDE から SQL Server 2008 へのアップグレードをサポートします。



より新しい SQL Server 2008/2005 のバージョンは、Windows Server 2003 以降で稼動する Operations Manager データのみ使用できます。

アップグレードには以下の 2 種類があります。

1. SQL Server 2000 または MSDE のインスタンスを SQL Server 2005 または SQL Server 2005 Express のインスタンスへアップグレードします。[71 ページの「SQL Server インスタンスのアップグレード」の項](#)を参照してください。
2. ServerView データベースを SQL Server 2000 または MSDE のインスタンスから SQL Server 2005 または SQL Server 2005 Express のインスタンスへ移動します。[78 ページの「ServerView データベースの移動」の項](#)を参照してください。

SQL Server インスタンスをアップグレードするか、または ServerView データベースを移動した後で、内部バックアップのアップデートやセットアップ、さらに Operations Manager の管理ジョブのために、その他のマイグレーション処理が必要です。このような目的のため、バージョン 4.52 のインストールでは、インスタンスをアップグレードしたりデータベースを移動した後で実行するためのバッチファイルが提供されます。

SQL Server がローカルの管理用サーバ/パソコンではなくリモートで他のサーバにインストールされている場合は ([40 ページの「別のシステムへのリモートのインストール」の項](#) をご覧ください)、次を確認し実行してください。

SQL Server クライアントツールのインストール

リモートの SQL Server 2005/2008 へアクセスする場合、ローカルの管理用サーバ/パソコン上に SQL Server クライアントツール (Microsoft SQL Server Native Client) が必要です。これらのツールがインストールされているか確認します。

- SQL Server 2005 用 : Microsoft SQL Server Native Client
- SQL Server 2008 用 : Microsoft SQL Server 2008 Native Client

ツールがインストールされていない場合は、SQL Server アップグレードを完了させ、提供されたバッチファイルを実行する前にツールをローカルの管理用サーバ/パソコンにインストールしてください。SQL Server クライアントツールは Microsoft ダウンロードセンターから入手できます。

3.14.1.1 SQL Server インスタンスのアップグレード

このアップグレード方法は「インプレース」アップグレードとも呼ばれ、SQL Server Setup のインストールオプションとして提供されます。このアップグレードは、SQL Server Setup を実行し、そこで提供されるオプションを選択すると実行されます。SQL Server のアップグレード中には、このインスタンスにインストール済みのすべてのデータベース、すなわち ServerView データベースも、自動的にアップグレードされます。

Operations Manager はシステム上にインストールされたままです。アップグレードの実行中は Operations Manager へのアクセスが一時的に停止します。

インプレースアップグレードには以下のことに注意が必要です。

- インストール済みの特定のエディションの SQL Server 2005 または SQL Server 2000 のインスタンスを対応する SQL Server 2008 または 2005 の互換性のあるエディションにアップグレードすることができます。例えば、MSDE インスタンスは、SQL Server 2005 Express または SQL Server 2008 Express のインスタンスへはアップグレードすることができますが、SQL Server 2008/2005 Standard または Enterprise Edition へは直接アップグレードすることはできません。
- インストール済みの SQL Server の 32 ビットエディションをインプレースアップグレードによって SQL Server の 64 ビットエディションにアップグレードすることはできません。
- 言語への依存性も考慮する必要があります。インプレースアップグレードの際、SQL Server 2000 のローカライズ版 (例 : 日本語版) を異なる言語版の SQL Server へアップグレードすることはできません。したがって、インプレースアップグレードでは、アップグレード前のインスタンスと同

じ言語の新しい SQL Server インスタンスをインストールする必要があります。SQL Server の英語版だけはローカライズされた異言語版へアップグレードすることができます。

インストールの要件は、SQL Server の Setup プロセス自体によってもチェックされ、必要に応じてメッセージや警告が表示されます。

SQL Server インスタンスが Operations Manager によってインストールされている場合、インストールの言語は日本語です。

インストール済み SQL Server インスタンスの製品バージョン、インストール言語、エディションを以下の手順で事前に確認できます。

- ▶ 設定ファイル *ServerViewDB.ini* の「Server_Instance」パラメータの内容を確認します。設定ファイルは <windir> ディレクトリにあります。
- ▶ コマンドプロンプトを開きます。
- ▶ 以下のコマンドを入力します。

```
osql -S <server_instance> -E
xp_msver
GO
select @@version
GO
```

バージョンや言語についての必要な情報がコマンドのアウトプットの 2 *ProductVersion* と 3 *Language* の下に表示されます。@@version にはエディションが表示されます。

quit コマンドで終了します。

インストールの準備

- SQL Server インスタンスがアップグレードされている間、Setup がハードウェアとソフトウェアの要件を確認します。この要件は事前に、Microsoft ダウンロードセンターの SQL Server 2008 または SQL Server 2005 (Express) についての Web ページや、インターネットでアクセスする SQL Server のオンラインドキュメントでも確認することができます。
- SQL Server Express Edition をインストールするには、事前に必要なソフトウェアを Microsoft ダウンロードセンターからダウンロードしてインストールしておく必要があります。SQL Server 2008/2005 のその他のエディションは必要なソフトウェアコンポーネントも同梱しており、Setup を開始するとそれらもインストールされます。
- 該当の SQL Server のオンラインドキュメントで、Microsoft が Setup でサポートしているバージョンとエディションも確認することができます。

- インストール済み SQL Server インスタンスのタイプ（既定インスタンスか名前付きインスタンスか）とその名前を確認します。SQL Server Setup が適切な SQL Server インスタンスをアップグレードするように、SQL Server のインストール中にインスタンス名とタイプを指定する必要があります。この情報は、設定ファイル *ServerViewDB.ini*（<windir> ディレクトリ内）の「Server_Instance」と「Instance」パラメータの中にあります。
 - － 「Instance」パラメータがない場合、そのインスタンスはデフォルトです。「Server_Instance」の下には、サーバ名（通常は「(local)」だけ）があります。
 - － 名前付きインスタンスの場合、そのインスタンス名が「Instance」の下にあります。「Server_Instance」パラメータには <server_name>¥ <instance_name> の情報が記載されています。

アップグレード前にしておくこと

- ▶ 該当するインスタンスのデータベースをバックアップします。
- ▶ 該当の SQL Server インスタンスにアクセスする、すべてのアプリケーションを終了します。
- ▶ すべての従属するサービス、特に「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を終了します。
- ▶ SQL Server 2008/2005（Express）のインストールに必要なソフトウェアをインストールします。

アップグレードの実行

SQL Server Setup を実行してインスタンスをアップグレードします。すべてのエディションの SQL Server に対してもインストールは対話式に行われます。常に最新のサービスパックを使用することをお勧めします。できれば、セットアップ後に Microsoft アップデートを行い、Microsoft からの SQL Server のアップグレード済みバージョンに対する最新のセキュリティのアップデートを入手してください。

SQL Server 2005/2000 エディションから SQL Server 2008 へのアップグレード

SQL Server 2008 のアップグレード中は以下の点に注意してください。

- インストールの間、SQL Server Setup プログラムはサーバ上のすべてのインストール済み SQL/MSDE Server インスタンスを検出し、様々な対話のステップで選択や設定のために表示されます。
- 最初に、「インスタンス選択」画面ではインスタンス名を表示されたリストから選択します。インストール済みインスタンスがいくつもある場合、Setup は SQL Server の標準的なインスタンスがあればそれを事前に選択します。ServerView が使用する SQL Server 2005 Express または MSDE のインスタンスは通常、名前付きインスタンス（インスタンス名は「SQLSERVERVIEW」）としてインストールされます。上述のように、ServerView が使用するインスタンスの名前とタイプは、設定ファイル *ServerViewDB.ini* で確認することができます。
- 次の「インスタンスの構成」画面では、インスタンス名を再度確認し、標準的インスタンスや名前付きインスタンスをインストールするかどうか指定します。
- インスタンス名以外の残りの設定オプションはデフォルトのままで構いません。

MSDE/SQL Server 2005 から SQL Server 2008 Express へのアップグレード

インストール済み MSDE インスタンスは SQL Server 2008 Express にアップグレードできます。SQL Server 2005 Express は、SQL Server 2008 Express または各種ツール付きの拡張版（SQL Server 2008 Express with Tools）にアップグレードできます。拡張版をインストールしたい場合は、アップグレード後に再度インストールプログラムを実行して他のコンポーネントを追加する必要があります。

SQL Server 2008 Express の必要なエディションは Microsoft ダウンロードセンターで入手できます。Setup を起動後、オプションの「SQL Server 2000 or SQL Server 2005 からのアップデート」を選択します。インストール中、続きのダイアログの中でアップグレードする SQL Server インスタンスを指定する必要があります。

他のすべての SQL Server 2005/2000 エディションから SQL Server 2008 へのアップグレード

SQL Server 2005/2000 の他のすべてのエディションも SQL Server 2008 の対応するエディションにアップグレードできます。SQL Server 2008 のエディションは、お手持ちの SQL Server 2008 インストールメディア（DVD）からインストールしてください。

SQL Server 2000 の各エディションから SQL Server 2005 へのアップグレード

MSDE インスタンスの SQL Server 2005 Express へのアップグレード

SQL Server 2005 Express については、Microsoft ダウンロードセンターでファイルを入手します。*SQLEXPRESS.EXE* を実行し、インストールします。インスタンスのアップグレードの手順は、SQL Server 2005 Express の新規インストールに必要な手順と基本的に同じです。

アップグレードについては以下の点に注意してください。

- SQL Server 2005 Express のインストールプログラムは、デフォルトではインスタンス名「SQLEXPRESS」をどのインストールでも使用します。インストール済みの異なる名前前のインスタンスをアップグレードに選択できるように、「登録情報」画面で「詳細構成オプションを非表示にする」を無効にします。
- 「インスタンス名」画面では、アップグレードするインストール済みインスタンスを選択することができます。インスタンス名を直接入力するか、「インストール済みのインスタンス」をクリックすると表示されるリストからインスタンス名を選択します。
- 次に、選択された MSDE インスタンスのインストール済みコンポーネントが「既存のコンポーネント」画面に表示されます。アップデートできるコンポーネントには関連するオプションがアクティブになります。これらのコンポーネントを選択してインストールを続行します。

SQL Server 2000 の他のすべてのエディションの SQL Server 2005 へのアップグレード

SQL Server 2005 の他のすべてのエディションは SQL Server 2005 DVD からインストールします。

ここでも、アップグレードインストールのプロセスは基本的には新規のインストールと同じですが、以下の例外があります。

- インストール中、「インスタンス名」画面で、アップグレードする既定のインスタンスまたは名前付きインスタンスを選択します。ここで選択されたインスタンスがセットアップ中にアップデートされます。インスタンス名を直接入力するか、「インストール済みのインスタンス」をクリックすると表示されるリストから、インスタンス名を選択します。
- インストール済みコンポーネントが「既存のコンポーネント」画面に現れます。オプションがアクティブであれば、アップグレードにこれらのコンポーネントを選択してインストールを続行します。

アップグレード後に行うこと

インスタンスのインプレースアップグレード後には、すべてのバージョンの SQL Server について以下の手順を実行する必要があります。

- ▶ 「SQL Server (< インスタンス名 >)」サービスが起動したかどうか確認します。
- ▶ SQL Server 2008/2005 Express 以外のエディションの場合 :
「SQL Server Agent (< インスタンス名 >)」サービスが起動したかどうか確認します。



Operations Manager に対してリモートの SQL Server を使用している場合は、管理用サーバ / パソコンで追加の手順を実行してください。実行するには、「Domain」および「Username」項目にある %windir%\ServerViewDB.ini ファイルで指定されているユーザアカウントで管理用サーバ / パソコンにログオンします。

- ▶ SQL Server 2008/2005 Express の場合 :
Windows のサービス「タスクスケジューラ」が起動したかどうか確認します。
- ▶ Operations Manager を再起動する前に、Operations Manager の内部バックアップとメンテナンスジョブをここで再度セットアップします。

コマンドプロンプトを開きます。

- ▶ ディレクトリ < インストールパス >¥ServerView Services¥scripts¥ServerView¥Tools. に切り替えます。
- ▶ このディレクトリにある以下のバッチファイルを実行します。
 - SQL Server 2008 のエディションへのアップグレード後 :
SVCreateJobs_Upgrade2008
 - SQL Server 2005 のエディションへのアップグレード後 :
SVCreateJobs_Upgrade2005

- ▶ 実行中、「Renamed SQL Server Instance [Y/N] ?」と問われるので、「N」と入力します。
- ▶ Operations Manager に必要なすべてのアップグレード手順はこのバッチファイルから実行されます。個々のステップはログファイル `<DbApplicationFolder>%SVCreateJobs_Upgrade2005.log` にも記録されます。「DbApplicationFolder」パラメータの内容は設定ファイル `ServerViewDB.ini` で確認できます。
- ▶ 正常に実行できたら、「ServerView Services」と「ServerView Download Service」のサービスを開始します。
- ▶ ServerView データベースのバックアップジョブがセットアップされており、実行できるかどうか確認します。

SQL Server Express エディションでは、ジョブは Windows のタスクスケジューラによってセットアップされるため、タスクスケジューラで監視されます。

- ▶ 「管理ツール」→「タスクスケジューラ」の順に開いて、ジョブとスケジュールのリストを確認します。

SQL Server の他のすべてのエディションでは、サービスの「SQL Server Agent」がジョブのセットアップに使用されます。この場合、SQL Server Management Studio によってジョブとスケジュールを確認します。


- ▶ SQL Server Management Studio を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「SQL Server Agent」を選択します。
- ▶ 「ジョブ」の下にセットアップ済みのジョブが表示されます。各ジョブの最新スケジュールは「右クリック」→「スケジュールの管理」で確認できます。

3.14.1.2 ServerView データベースの移動

SQL Server インスタンス全体のインプレースアップグレードしない、またはできない場合は、ServerView データベースをインストール済みの SQL Server インスタンスから新しい SQL Server インスタンスへ移動させることによってマイグレーションできます。この手順は、SQL Server についての Microsoft オンラインドキュメントでは「side-by-side」アップグレードとも呼ばれます。ご使用の SQL Server エディションのインプレースアップグレードを Microsoft がサポートしていない場合はこのタイプを行う必要があります。例えば、32 ビットの SQL Server のエディションを 64 ビットの SQL Server のエディションへアップグレードする場合などがこのケースにあたります。


SQL Server 2005/SQL Server 2005 Express または SQL Server 2000/MSDE から新しい SQL Server のエディションへのアップグレードについて、どのバージョンとエディションのアップグレードを Microsoft がサポートしているかは、SQL Server 2008 と SQL Server 2005 についての Microsoft オンラインドキュメントで確認できます。

このアップグレード方法では、新しい SQL Server インスタンスが既存の SQL Server インスタンスと side-by-side にインストールされます。ServerView データベースがインストール済みインスタンスからデタッチされ、新しいインスタンスにアタッチされます。この方法では、Operations Manager はシステムにインストールされたままです。

 Operations Manager に対するクライアントの設定が保持されるように、新しい SQL Server インスタンスはアップデート前のインスタンスと同じシステムにインストールする必要があります。そのため、同じインスタンス名で side-by-side にインストールすることはできません。

以下のいずれかを行ってください。

- データベースをデタッチして、SQL Server インスタンスをアンインストールしてから新しいインスタンスをインストールする。
- 新しい SQL Server インスタンスを別のインスタンス名でインストールする。

 インスタンスタイプの切り替えは、ServerView データベースのアップグレードではサポートしていません。アップグレードでは、名前付きインスタンスを別の名前でインストールすることはできますが、名前付きインスタンスから既定インスタンス（またはその逆）への切り替えはできません。

インストールの準備

- 新しいインスタンスのインストール中、ハードウェアとソフトウェアの要件が確認されます。この件については、Microsoft ダウンロードセンターの SQL Server 2008 または SQL Server 2005 (Express) の製品ページなどを参照してください。
- SQL Server Express Edition をインストールするには、事前に必要なソフトウェアを Microsoft ダウンロードセンターからダウンロードし、自分でインストールする必要があります。SQL Server のその他のエディションには必要なソフトウェアコンポーネントが同梱されています。
- インストール済み SQL Server インスタンスのタイプ（既定インスタンスか名前付きインスタンスか）とその名前を確認します。この情報は、設定ファイル *ServerViewDB.ini* (<windir> ディレクトリ内) の「Server_Instance」と「Instance」パラメータの中にあります。
 - 「Instance」パラメータがない場合、そのインスタンスはデフォルトです。「Server_Instance」の下には、サーバ名（通常は「(local)」）だけがあります。
 - 名前付きインスタンスの場合、そのインスタンス名が「Instance」の下にあります。「Server_Instance」パラメータには「<サーバ名>\<インスタンス名>」の情報が記載されています。
- ServerView データベースファイルの現在のパス名を確認します。パス名はデータベースを新しい SQL Server インスタンスに追加するのに必要です。

パス名は、Enterprise Manager/DbAMgr2k または Server Management Studio を使用して、以下の手順で確認することができます。

 - ▶ 対応するツールを起動し、インストール済みの SQL Server 2005/SQL Server 2005 Express または SQL Server 2000/MSDE のインスタンスに接続します。
 - ▶ データベース「ServerViewDB」を選択します。
 - ▶ 右クリックメニューから「プロパティ」を選択します。パス名は、「データファイル」または「トランザクションログ」タブの「場所」欄（Enterprise Manager/DbAMgr2k の場合）、または「ファイル」を選択後、「パス」欄（SQL Server Management Studio の場合）に表示されます。

3 管理端末へのインストール

パス名は、osql（または sqlcmd）を使用して以下のように確認することもできます。

- ▶ コマンドプロンプトを開き、以下のコマンドを入力します。

```
osql -S <インスタンス名> -E  
EXEC sp_helpfile  
GO
```

「filename」欄にパスの詳細が表示されています。quit コマンドで osql を終了します。

アップグレードの前におくこと

- ▶ 既存の SQL Server インスタンスにおいて、「ServerViewDB」データベースのバックアップを行い、バックアップデータを最新にします。
- ▶ 該当の SQL Server インスタンスにアクセスするアプリケーションをすべて終了します。
- ▶ すべての従属するサービス、特に「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を終了します。
- ▶ SQL Server 2005（SQL Server 2005 Express）のインストールに必要なソフトウェアをインストールします。

アップグレードの実行

- 既存の SQL Server 2005/SQL Server 2005 Express または SQL Server 2000/MSDE のインスタンスから ServerView データベースをデタッチします。

ServerView データベースのデタッチは、SQL サーバ管理ツール（SQL Server Enterprise Manager、DbaMgr2k、または SQL Server Management Studio）を使用するか、または osql でコマンドプロンプトから SQL Server のプロシージャを直接呼び出すことにより行えます。

管理ツールを使用する場合、データベースのデタッチ方法は、ご使用のツールのオンラインヘルプを参照してください。

コマンドプロンプトを使用する場合の手順は以下のとおりです。

- ▶ コマンドプロンプトを開き、以下のコマンドを入力します。

```
osql -S <インスタンス名> -E  
EXEC sp_detach_db @dbname='ServerViewDB'  
GO
```

quit コマンドで *osql* を終了します。

- デタッチでは、データベースは SQL Server から削除されるのではなく、その保存場所に残ります。ファイルはそのまま残しておいても、他のディレクトリにコピーしても構いません。データベースをアタッチする際、最新のパス名を新しいインスタンスに指定する必要があります。
- SQL Server インスタンスの名前を変えない場合は、ここで既存の SQL Server インスタンスをアンインストールしてください。
- 新しい SQL Server インスタンス（SQL Server 2008/2005 または SQL Server 2008/2005 Express）をインストールします。
 - ▶ SQL Server Express Edition の場合、ダウンロードセンターからダウンロードしたファイルからインストールします。
 - ▶ SQL Server の他のエディションの場合、インストールメディア（SQL Server 2008 DVD）から直接インストールします。
- インスタンス名を変えない場合、旧の SQL Server インスタンスをアンインストールしたら、同じタイプ（既定インスタンスまたは名前付きインスタンス）と同じ名前（名前付きインスタンス）で、例えば SQL Server Express エディションには「SQLSERVERVIEW」でインストールします。
- SQL Server 2005 Express をインストールする場合

SQL Server 2005 Express をインストールする場合は、以下の点に注意してください。

「登録情報」画面で、「詳細構成オプションを非表示にする」を無効にします。無効にしない場合、インストール時にインスタンス名を既定の名前「SQLEXPRESS」以外の名前に割り当てることができなくなります。

- データベースを以下の手順でアタッチします。
 - ▶ SQL Server Management Studio を開き、新しいインスタンスに接続します。
 - ▶ 「新しいクエリ」を選択し、以下のコマンドを「クエリ」画面に入力します。このウィンドウでは、`<data_path>` はご使用のシステムの ServerView データベースファイルのパス名です。

```
CREATE DATABASE ServerViewDB
ON PRIMARY (FILENAME='<data_path>\ServerViewDB.mdf')
LOG ON (FILENAME='<data_path>\ServerViewDB_log.LDF')
FOR ATTACH
```


- アタッチしたら以下のコマンドを実行し、整合性を確認してアップデートします。

```
DBCC UPDATEUSAGE('ServerViewDB')
```

- Operations Manager に対するリモートの SQL Server として SQL Server を使用している場合、[64 ページの「リモートの SQL Server の設定」](#)の項での説明に従ってユーザアカウントをセットアップします。管理用サーバ / パソコンでは、*Domain* および *Username* にある `%windir%\ServerViewDB.ini` ファイルでユーザアカウントを確認します。
- SQL Server 2008 を使用している場合、承認された SQL 管理者として登録されている *ServerView Services* および *ServerView Download Service* でユーザアカウントをセットアップします。[51 ページの「SQL サーバ管理者権限を持つユーザアカウントの追加」](#)の項をご覧ください。

アップグレード後にすること

インスタンスの side-by-side アップグレード後には、すべてのバージョンの SQL Server について以下の手順を実行する必要があります。

-  Operations Manager に対するリモートの SQL Server として SQL Server を使用している場合は、`%windir%\ServerViewDB.ini` ファイルの *Domain* および *Username* 項目に定義されているユーザでログオンし、管理端末で追加の操作を確認してください。
- ▶ SQL Server 2005 Express Edition の場合、アップグレードを続ける前に「タスクスケジューラ」が起動したかどうか確認します。
 - ▶ SQL Server の他のエディションの場合、「SQL Server Agent `<instance_name>`」サービスが起動したかどうか確認します。
 - ▶ Operations Manager を再起動する前に、Operations Manager の内部バックアップジョブをここで再度セットアップします。

そのためには、コマンドプロンプトを開きます。

- ▶ ディレクトリ < インストールパス >¥ServerView Services¥scripts¥ServerView¥Tools に切り替えます。
- ▶ このディレクトリにある以下のファイルを実行します。
 - For SQL Server 2008: *SVCreateJobs_Upgrade2008*
 - For SQL Server 2005: *SVCreateJobs_Upgrade2005*
- ▶ Renamed SQL Server Instance [Y/N] ? のメッセージに次のいずれを指定します。
 - 「N」: 新しい SQL Server インスタンスが同じ名前でインストールされた場合。
 - 「Y」: 新しいインスタンスが別の名前でインストールされた場合。
新しい名前を以下のプロンプトに入力します。
Please enter new SQL Server Instance Name
- ▶ Operations Manager のセットアップに必要なアップグレード手順はこのアプリケーションの実行中に実行され、ログファイル
<DbApplicationFolder>¥SVCreateJobs_Upgrade2008.log または
<DbApplicationFolder>¥SVCreateJobs_Upgrade2005.log に記録されます。
「DbApplicationFolder」パラメータの内容は設定ファイル *ServerViewDB.ini* で確認することができます。
- ▶ 正常に実行されたら、「ServerView Services」と「ServerView Download Service」のサービスを開始します。
- ▶ ServerView データベースのバックアップジョブが適切にセットアップされ、ご使用のシステムで実行できるかどうか確認します。
 - SQL Server Express エディションでは、ジョブは Windows のタスクスケジューラによってセットアップされます。ジョブとスケジュールは該当の Windows のユーザインターフェイスで確認することができます。
 - ▶ 「コントロールパネル」→「タスクスケジューラ」の順に開いて、ジョブとスケジュールのリストを確認してください。
 - SQL Server の他のすべてのエディションでは、サービスの SQL Server Agent がジョブのセットアップに使用されます。ジョブとスケジュールは SQL Server Management Studio で確認することができます。
 - ▶ SQL Server Management Studio を起動します。

- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「SQL Server エージェント」を選択します。
- ▶ 「ジョブ」の下にセットアップ済みのジョブが表示されます。各ジョブの最新スケジュールは、右クリックメニューの「スケジュールの管理」で確認できます。

3.14.2 SQL Server 2008 Express から SQL Server 2008 へのアップグレード

SQL Server 2008 Express インスタンスを SQL Server 2008 のフルバージョンにアップグレードインストールすることができます。ServerView データベースが最大サイズ（SQL Server 2008 Express では 4 GB）に達した場合、または SQL Server 2008 フルバージョンの機能やコンポーネントで SQL Server 2008 Express には含まれていないものを追加して使用したい場合は、アップグレードが必要になります。

インストールの準備

アップグレードインストールを行う前に以下の準備を行ってください。

- SQL Server 2008 のインストール中、ハードウェアとソフトウェアの要件が確認されます。この件については、Microsoft の Web サイトを参照してください。
- SQL Server 2008 のどのエディションのアップデートを Microsoft がサポートしているかについて、SQL Server 2008 のオンラインドキュメントを参照してください。
- 特定の機能やコンポーネントが必要な場合、アップグレードしようとしているエディションに機能やコンポーネントが入っているか、確認します。

アップグレードについては以下の点に注意してください。

- SQL Server 2008 Express のローカライズ版は、SQL Server 2008 の同じ言語のローカライズ版または英語版にアップグレードすることができます。
- 常に最新のサービスパックをインストールすることをお勧めします。アップグレード後には必ず最新のアップデートがないか確認し、あればインストールしてください。
- SQL Server Management Studio の別のエディションは side-by-side にインストールできないため、SQL Server Management Studio (Basic) がインストールされている場合は、アンインストールしてから新しいエディションにあわせて再インストールする必要があります。

アップグレード前にしておくこと

- ▶ インストール済みインスタンスのデータベースをバックアップします。
- ▶ 該当の SQL Server 2008 Express インスタンスにアクセスするすべてのアプリケーションを終了します。
- ▶ 「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を停止します。

アップグレードの実行

アップグレードは SQL Server 2008 Setup をインストール DVD から実行して行います。

- ▶ アップグレードするエディションの Setup を起動します。
- ▶ 左側のウィンドウで「メンテナンス」を選択し、「エディションのアップグレード」を選択します。
エディションをアップグレードするためのインストールウィザードが開きます。
- ▶ 「インスタンスの選択」画面で、アップグレードしたいインスタンスを選択します。Operations Manager が名前付き SQL Server Express 2008 インスタンスに使用するインスタンス名は「SQLSERVERVIEW」です。
- ▶ プログラムがエディションのアップグレードが可能かどうか確認し、「エディションのアップグレードの準備完了」画面で再確認のメッセージが表示された後、アップグレードが実行されます。

アップグレードが成功すると、「完了」画面が表示されます。

アップグレード後の操作

- ▶ 新しいエディションに対する未処理のサービスパック、サービスパックのアップデートやホットフィックスアップデートをインストールします。
- ▶ 「SQL Server (< インスタンス名 >)」サービスが起動したかどうか確認します。
- ▶ 「SQL Agent (< インスタンス名 >)」サービスが起動したかどうか確認します。

ServerView サービスと Operations Manager を再起動する前に、ServerView データベースの内部バックアップとメンテナンスジョブを再作成してください。手順は以下のとおりです。

- ▶ コマンドプロンプトを開きます。
- ▶ ディレクトリ `<インストールパス>%ServerView Services%\scripts\%ServerView%\Tools` に切り替えます。
- ▶ このディレクトリにあるファイル `SVCreateJobs_Upgrade2008` を実行します。実行中、「Renamed SQL Server Instance [Y/N] ?」のメッセージに「N」を入力します。

すべての必要なアップグレード手順はこのバッチファイルから実行され、ログファイル `<DbApplicationFolder>%SVCreateJobs_Upgrade2008.log` に記録されます。

`<DbApplicationFolder>` のパスは設定ファイル `ServerViewDB.ini` で確認してください。

- ▶ ファイルの実行が成功したら、サービスの「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を開始します。
- ▶ 次に、必ず、ServerView データベースのバックアップジョブがシステムにセットアップされ、実行できるかどうか確認します。これらのジョブは、「SQL Server Agent」サービスを使用してセットアップされます。

ジョブは SQL Server Management Studio から確認できます。

- ▶ SQL Server Management Studio を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「SQL Server エージェント」を選択します。
- ▶ 「ジョブ」の下にセットアップ済みのジョブが表示されます。各ジョブの最新スケジュールは、右クリックメニューの「スケジュールの管理」で確認できます。

3.14.3 SQL Server 2005 Express から SQL Server 2005 へのアップグレード

SQL Server 2005 Express インスタンスを SQL Server 2005 のフルバージョンにアップグレードすることができます。MSDE 2000 とは違って、SQL Server 2005 Express には並列読み込みが増加した場合の一般的なワークロードの制限はありません。

例えば ServerView データベースが最大サイズ (SQL Server 2005 Express で 4 GB) に達した場合や、SQL Server 2005 の機能やコンポーネントで SQL Server 2005 Express には含まれていないものを追加して使用したい場合はアップグレードが必要になります。

インストールの準備

アップグレードインストールを行う前に以下の準備をしてください。

- SQL Server 2005 のアップグレードインストール中、ハードウェアとソフトウェアの要件が確認されます。詳細は Microsoft の Web サイトを参照してください。
- Microsoft がサポートしているアップグレードの SQL Server 2005 エディションについて、SQL Server 2005 のオンラインドキュメントで確認します。
- 特定の機能やコンポーネントが必要な場合、アップグレード対象エディションに機能やコンポーネントが入っているかを確認します。

アップグレードについては以下の点に注意してください。

- SQL Server 2005 Express のローカライズ版は、SQL Server 2005 の同じ言語のローカライズ版または英語版にアップグレードすることができます。
- アップグレード中、アップグレードするエディションのバージョン状態と、新しくインストールされるエディションのバージョン状態が確認されます。

最新のサービスパック付き SQL Server 2005 Express がインストールされている場合、すでにアップグレード対象の SQL Server 2005 エディションの基本インストールよりも最新のバージョンになっています。

上記のような原因により、セットアップ中に警告が発生したりアップグレードが中断したりしないように、新しい SQL Server 2005 のエディションのインストールは、追加の呼び出しパラメータを用いてコマンドプロンプトから行ってください。[89 ページの "アップグレードの実行"](#) を参照してください。

- 常に最新のサービスパックを使用することをお勧めします。アップグレード後は、すべての最新サービスパック、サービスパックのアップデートやホットフィックスアップデートを、アップグレード済みのエディションに再度インストールしてください。
- SQL Server Management Studio Express がすでにシステムにインストールされている場合で、今回 SQL Server 2005 の上位エディションとともに SQL Server Management Studio のフルバージョンをインストールしたい場合、SQL Server Management Studio Express をアンインストールしてからインストールしてください。SQL Server Management Studio Express と SQL Server Management Studio の side-by-side インストールはできません。

アップグレード前にしておくこと

- ▶ インストール済みインスタンスのデータベースをバックアップします。
- ▶ 該当の SQL Server 2005 Express インスタンスにアクセスするすべてのアプリケーションを終了します。
- ▶ 「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を停止します。

アップグレードの実行

SQL Server 2005 Express のインスタンスのアップグレードは、すべてのデータベースを伴うインスタンス全体の「インプレース」アップグレードとして直接行うことができます。

このアップグレードは、インストール DVD から SQL Server 2005 Setup を実行して行います。手順は新規のインストールとほぼ同じですが、以下の点が異なります。

- ▶ コマンドプロンプトを開き、インストールメディア内で、インストールされるエディション用の *setup.exe* ファイルのあるフォルダまで進みます。コマンドプロンプトでパラメータ「SKUUPGRADE=1」を用いてインストールを開始します。

例

```
<ドライブ>:\<フォルダ>\setup.exe SKUUPGRADE=1
```

- ▶ 「インストールするコンポーネント」画面で、少なくともコンポーネントの「SQL Server データベースサービス」を選択します。SQL Server 2005 Express に含まれていない追加のコンポーネントを選択することができます。

- ▶ 「インスタンス名」画面で、アップグレードする SQL Server 2005 Express インスタンスを選択します。名前を直接入力することも、「インストール済みのインスタンス」をクリックして表示されたリストから選択することもできます。
- ▶ インストール済みのコンポーネントが「既存のコンポーネント」画面に表示されます。コンポーネント名のチェックボックスが選択可能であれば、そのアップグレードが可能です。チェックボックスを選択してアップグレードを続行します。

チェックボックスが選択できない場合は、「詳細表示」をクリックするとエラーメッセージが表示され、アップグレードが不可能な理由を確認できます。

アップグレード後の操作

- ▶ 新しいエディションに対する未処理のサービスパック、サービスパックのアップデートやホットフィックスアップデートをインストールします。
- ▶ 「MSSQL\$SQLSERVERVIEW」サービスが開始されたかどうか確認します。
- ▶ 「SQLAgent\$SQLSERVERVIEW」サービスが開始されたかどうか確認します。

Operations Manager を再起動する前に、Operations Manager の内部バックアップとメンテナンスジョブを再作成してください。手順は以下のとおりです。

- ▶ コマンドプロンプトを開きます。
- ▶ ディレクトリ < インストールパス >¥ServerView Services¥scripts¥ServerView¥Tools に切り替えます。
- ▶ このディレクトリにあるファイル *SVCreateJobs_Upgrade2005* を実行します。

Operations Manager のすべての必要なアップグレード手順はこのバッチファイルから実行され、ログファイル

<DbApplicationFolder>¥SVCreateJobs_Upgrade2005.log に記録されます。

DbApplicationFolder のパスは、設定ファイル *ServerViewDB.ini* で確認してください。

- ▶ ファイルの実行が成功したら、サービスの「ServerView Download Service」と「ServerView Services」を開始します。
- ▶ 次に、必ず、ServerView データベースのバックアップジョブがセットアップされ、実行できるかどうか確認します。

ジョブは SQL Server Management Studio から確認できます。

- ▶ SQL Server Management Studio を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「SQL Server エージェント」を選択します。
- ▶ 「ジョブ」の下にセットアップ済みのジョブが表示されます。各ジョブの最新スケジュールは、右クリックメニューの「スケジュールの管理」で確認できます。

3.14.4 MSDE 2000 から SQL Server 2000 へのアップグレード

MSDE 2000 Service Pack 4（バージョン 8.00.2039）から SQL Server 2000 Standard Edition Service Pack 4 にアップグレードインストールすることができます。例えば、ServerView データベースが 2 GB に達した場合や、「推奨される構成の監視対象サーバは 200 以上」に達した場合にはアップグレードが必要になります。SQL Server 2000 Enterprise Edition が必要な場合は、SQL Server 2000 Standard Edition Service Pack 4 から SQL Server 2000 Enterprise Edition Service Pack 4 へのアップグレード インストールが行えます。

アップグレードインストールではなく、ロードディストリビューションを変更して MSDE 2000 を使い続けることもできます。[180 ページの「負荷分散の変更」の項](#)を参照してください。サーバの負荷は 2 つの方法で確認することができます。

1. イベントビューアを使用

- ▶ イベントビューアを「スタート」→「管理ツール」→「イベントビューア」の順に選択して開きます。
- ▶ イベントビューアでアプリケーションログを選択します。
- ▶ 「イベント」欄の見出しをクリックし、リストをソートして 3629 番のログが出力されているかどうかを確認します。このイベントが頻発する場合は、負荷設定を変更してください。

2. ログファイルを使用

- ▶ Enterprise Manager または Dbamgr2K を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックします。
- ▶ 「メンテナンス」→「SQL Server ログ」の順に選択します。
- ▶ 表示されたログファイルで以下のメッセージが出力されているかどうか確認します。

This SQL Server has been optimized for 8 concurrent queries. This limit has been exceeded by <x> queries and performance may be adversely affected.

このメッセージが頻発する場合は、負荷設定を変更してください。



ログファイルは、「LOG」ディレクトリの下にインストールディレクトリにもあります。

アップグレードの実行

アップグレードインストールの前に製品のバージョンを確認してください。



バージョン 8.00.2039 からのアップグレードインストールのみ可能です。

インストール済みの MSDE 2000 のバージョンと言語は、コマンドプロンプトから以下のコマンドで確認することができます。

```
osql -S <SQL Server instance> -E
xp_msver
GO
```

情報は「2 ProductVersion」と「3 Language」の下に表示されます。製品のバージョンは 8.00.2039 でなければなりません。また、MSDE 2000 と同じ言語版の SQL Server 2000 をインストールしてください。

アップグレードインストールの手順は以下のとおりです。

- ▶ サービスの「MSSQL\$SQLSERVERVIEW」、「MSSQLSERVER」、「SQLAgent\$SQLSERVERVIEW」、「SQLSERVERAGENT」、「ServerView Services」、または「ServerView Download Service」を停止します。
 - ▶ 「スタート」→「管理ツール」→「サービス」の順に選択します。
 - ▶ 該当サービスを選択し、さらに右クリックメニューから「停止」を選択します。
- ▶ サービスのスタートタイプを「手動」に変更します。
 - ▶ 該当サービスを選択し、さらに右クリックメニューから「プロパティ」を選択します。
 - ▶ 「スタートアップの種類」の下のリストで「手動」を選択します。
- ▶ SQL Server 2000 の基本インストール

インストールでは以下を指定します。

- インストール種別の選択：
アップグレード、削除、または SQL Server の既存インスタンスへのコンポーネントの追加を行います。
- インスタンス名：
インスタンス名「SQLSERVERVIEW」がすでに入力されています。

3 管理端末へのインストール

- 既存のインストール：
既存のインストールをアップグレードします。
- セットアップ：
以下のメッセージで「yes」を入力します。

Do you want to install additional components ?
- コンポーネントの選択：
「サーバーコンポーネント」、「管理ツール」、および「クライアント接続」を選択します。

▶ SQL Server 2000 Service Pack 4 のインストール

SQL Server 2000 の基本インストール後、適切な言語の SQL Server 2000 Service Pack 4 をインストールしてください。

Operations Manager バージョン 4.80 以降を使用する場合のアップグレード後にすること

- ▶ 「MSSQL\$SQLSERVERVIEW」サービスが開始されたかどうか確認します。
- ▶ 「SQLAgent\$SQLSERVERVIEW」サービスが開始されたかどうか確認します。

Operations Manager を再起動する前に、Operations Manager の内部バックアップジョブを再作成してください。手順は以下のとおりです。

- ▶ コマンドプロンプトを開きます。
- ▶ ディレクトリ < インストールパス >¥ServerView Services¥scripts¥ServerView¥Tools に切り替えます。
- ▶ このディレクトリにある *SVCreateJobs_Upgrade2000* を実行します。

Operations Manager のすべての必要なアップグレード手順はこのバッチファイルから実行されます。個々のステップはログファイル
<DbApplicationFolder>¥SVCreateJobs_Upgrade2000.log にも記録されます。

DbApplicationFolder のパスは、設定ファイル *ServerViewDB.ini* で確認してください。

- ▶ ファイルの実行が成功したら、サービスの「ServerView Download Service」と「ServerView Services」を開始します。
- ▶ 次に、必ず、ServerView データベースのバックアップジョブがセットアップされ、実行できるかどうか確認します。

ジョブは SQL Server Enterprise Manager から確認できます。

- ▶ SQL Server Enterprise Manager を起動します。
- ▶ 「SQL Server グループ」 → 「インスタンス名」 → 「管理」 → 「SQL Server エージェント」を選択します。
- ▶ 「ジョブ」の下にセットアップ済みのジョブが表示されます。

3.15 Operations Manager の Windows ターミナルサーバへのインストール

ターミナルサービス（Windows ターミナルサーバとも呼ぶ）がインストールされている場合、Operations Manager をインストールするには特別なインストール手順が必要です。

Windows ターミナルサーバへのインストール

1. Windows 2008 では、「スタート」→「管理ツール」→「サーバマネージャ」→「役割」の順にクリックします。ターミナルサービスが表示された場合は「ターミナルサーバ」がインストールされています。

Windows 2003 では、「スタート」→「プログラム」→「コントロールパネル」→「サーバの役割管理」の順にクリックします。「ターミナルサーバ」が「このサーバーには次の役割が構成されています」の下に表示されていればターミナルサーバがインストールされています。

2. Operations Manager インストールプログラムのパスを確認します。
 - ▶ ServerView Suite DVD 1 をセットします。
 - ▶ *serverview.EXE* を検索します。
 - ▶ *serverview.EXE* のパスを記録します。
3. Operations Manager をコマンドプロンプトウィンドウからインストールします。
 - ▶ コマンドプロンプトウィンドウを開き、以下のように入力します。

```
Change user /install
```

- ▶ 同じコマンドプロンプトウィンドウで *serverview.EXE* へのパスを入力し、Operations Manager をインストールします。
- ▶ インストール後、コマンドプロンプトウィンドウで以下のように入力します。

```
Change user /execute
```


Operations Manager とターミナルサーバの全般的な手順

Operations Manager をインストールする前にターミナルサーバをインストールすることをお勧めします。その後 Operations Manager を前記のようにインストールします。

ターミナルサーバが Operations Manager よりも後でインストールされた場合、Operations Manager が正常に稼働しているかどうか確認してください。Operations Manager に関する何らかのエラーメッセージが表示された場合は、Operations Manager をアンインストールし、前記の手順を実行します。

リモートの SQL Server を伴うターミナルサーバへの Operations Manager のインストールはサポートしていません。

リモートの SQL Server が使用されている場合は、前記のインストールモードは適用されません。

3.16 Operations Manager ソフトウェアの GUI ダイアログ形式インストール

Operations Manager ソフトウェア（Operations Manager とイベントマネージャ）は、Windows（Windows Server 2003 または Windows Server 2008）のメニューコントロールに従ってインストールすることができます。

ServerView Suite DVD 1 には、「SVSLocalTools」→「Japanese」→「Svmanage」→「WinSVOM」の下に *serverview.EXE* ファイルがあり、これによりインストールを開始します。Microsoft のインストーラがコンピュータにインストールされていない場合はここでインストールされます。



Microsoft SQL Server 2008 Express、Microsoft SQL Server 2005 Express および MSDE 2000 SP4 を使用する場合は OS のタスクスケジューラに、これ以外の Microsoft SQL Server 2008/2005/2000 を使用する場合は、SQLAgent サービスに次のタスクが追加されます。

- JobServerViewClear_xactn_tables
- JobServerViewDaily
- JobServerViewHourly
- JobServerViewLongInterval

インストール手順

- ▶ 管理者権限のあるユーザとしてログオンするか、または、リモートの SQL サーバのインスタンスを使用している場合には、管理者権限のあるドメインユーザとしてログオンします。
- ▶ ServerView Suite DVD 1 を DVD-ROM ドライブにセットします。CD が自動的にスタートしない場合、DVD のルートディレクトリの *start.html* ファイルをクリックします。
- ▶ オプションの「ServerView Software Products」にチェックを入れます。
- ▶ 「開始」をクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、言語（「ENGLISH」、「DEUTSCH」または「JAPANESE」）から「JAPANESE」を選択します。
- ▶ 「Japan Local Tools」→「ServerView Operations Manager」の順に選択します。

- ▶ 「ServerView Operations Manager Application」の配下で、ServerView Operations Manager をクリックします。インストーラが格納されているフォルダにリンクしています。

- ▶ *serverview.exe* プログラムを開始します。

インストールは対話なし（サイレント）で行うこともできます。サイレントインストールについての詳細は [191 ページの「コマンドラインによる Operations Manager のインストール」](#)の項を参照してください。

- ▶ プログラムが起動すると以下のウィンドウが表示されます。



図 4: Operations Manager インストールウィザード - SQL Server の選択

MSDE 2000（Service Pack 4 付き）または SQL Server 2005 Express がそれぞれ SQL Server インスタンス「SQLSERVERVIEW」として、あるいは、任意のインスタンスの SQL Server 2000（Service Pack 4 付き）または SQL Server 2005 がご使用のシステムにインストール済みかどうか確認します。

- 一致する SQL Server インスタンスがない場合、オプションの「新規に SQL Server をインストールする」を選択して MSDE 2000 または SQL Server 2005 Express（Windows Server 2008 の場合）をインストールできます。
次に「次へ」をクリックします。

自動的にインストールされた MSDE または SQL Server 2005 Express のインスタンスにおいては、ServerView データベースはローカルの管理用サーバ/パソコンにインストールされます。Windows Server 2003 では、システムを再起動するように要求されます。再起動すると Operations Manager インストールウィザードが自動的に起動します。

- 一致する SQL Server インスタンスがローカルの管理用サーバ/パソコンにある場合、ローカルの SQL Server インスタンスを使用できます。オプションの「インストール済の SQL Server を使う」を選択し、「次へ」をクリックします。Operations Manager のスタートページに戻ります。
- リモートにインストールされた SQL Server インスタンスを使用することもできます。オプションの「別サーバの SQL Server にリモート接続する ...」を選択し、「次へ」をクリックします。「リモート DB」ウィンドウが開きます。



図 5: Operations Manager インストールウィザード - リモート DB

SQL Server 名

SQL Server のインスタンス名（SQL Server のデフォルトのインスタンスではシステム名となります）

ユーザ名

SQL Server のドメインアカウントに設定したユーザ名（[51 ページの「SQL サーバ管理者権限を持つユーザアカウントの追加」の項](#)参照）

ドメイン名

ドメインの名前

パスワード

ユーザ名にアクセスするパスワード

それぞれ入力し、「次へ」をクリックします。

詳細は [40 ページの「別のシステムへのリモートのインストール」の項](#)を参照してください。

- ▶ Operations Manager インストールウィザードが開きます。
- ▶ 「次へ」をクリックすると、使用許諾やインストールについての情報などに関するウィンドウが開きます。
- ▶ 以前のバージョンがインストール済みの場合は以下のウィザードが表示されます。



図 6: Operation Manager インストールウィザード - 既存の構成の保存

以前のバージョンの設定や構成を保存することができます。

▶ インストールディレクトリの指定



図 7: Operations Manager インストールウィザード - インストールディレクトリの選択

デフォルトでは、ソフトウェアはディレクトリ

C:\Program Files\Fujitsu\ServerView Suite\ServerView にインストールされます。アップグレードインストールではインストールディレクトリを選択することはできません。以前のバージョンに使用されたディレクトリが常に使用されます。

- Web サーバを選択します。



図 8: Operations Manager インストールウィザード - Web サーバの選択

このダイアログは、システム上にインストールされている Web サーバによって異なります。

- Web サーバがインストールされていない場合、ServerView Web サーバが提供されます。
- Microsoft Internet Information Server (IIS) がインストールされている場合、ServerView Web サーバと Internet Information Server から選択することができます。
- Apache2 Web サーバがインストールされている場合、Apache2 Web サーバと Internet Information Server から選択することができます。

デフォルトでは、既存の Operations Manager のインストールで指定した Web サーバが事前に指定されています。アップグレードインストールでは Web サーバを選択することはできません。以前のバージョンに使用された Web サーバが常に使用されます。

セットアップ中は、選択した Web サーバによって異なるウィンドウが表示されます。この記述についてはご使用の状況に該当するウィンドウを参照してください。



- ServerView Web-Server を選択した場合、Apache2 for Win32 をベースとした Web サーバが SVOM とともにインストールされます。また、Windows のタスクスケジューラに「At** (** : タスク ID)」のタスク名でタスクが追加されます。
- IIS を選択した場合、インストール済みの IIS を Web サーバとして使用します。
- Web サーバとして、すでに Apache2.0 / Apache2.2 がインストールされている場合、「Web サーバの選択」画面の選択項目は、「ServerView Web-Server」ではなく「Apache2(Installed Apache2 server)」が表示されます。

- ▶ ServerView データベースに接続する SQL Server のインスタンス名 (40 ページ参照) を選択します。



図 9: Operations Manager インストールウィザード - SQL Server インスタンスの選択

- ▶ SQL サーバーデータベースバックアップの設定を選択します。[150 ページ](#)の「**ServerView データベースのバックアップ**」の項も参考にご覧ください。



図 10: Operations Manager インストールウィザード - SQL Server バックアップのパス

標準

管理用サーバ/パソコンが動作しない時がある場合は、バックアップモードを「標準」のままにしておきます。
「標準」は SQL Server リカバリモデルの「シンプル」に相当します。

完全

Operations Manager を使って多くの重要な監視を行い、管理用サーバ/パソコンがほぼ常に動作している場合は、「完全」を選択します。「完全」はリカバリモデルの「フル」に相当します。

リモートにインストールされた SQL Server インスタンスを使用する場合（スタート画面で「既存の SQL Server を使用する ...」を選択）、新規インストール画面で、以下の追加選択オプションで指定します。



パスを指定しない場合、SQL Server のデフォルトのバックアップのパスにバックアップファイルが作成されます。この場合、設定ファイル *ServerViewDB.ini* にはデフォルトのバックアップのパスが入っています。[162 ページの「バックアップファイルの内容をチェックする」の項を参照してください。](#)

- ▶ インストールタイプを指定します。



図 11: Operations Manager インストールウィザード - インストールタイプの選択

「カスタム」を選択すると、Operations Manager インストールウィザードに従ってインストールする個々の Operations Manager 製品を選択することができます。

3 管理端末へのインストール

- ▶ インストールタイプ「カスタム」を選択すると下記の「インストール機能」ウィンドウが表示されます。インストールしたい管理製品を選択します。「Complete」ではすべてを選択します。どの ServerView コンポーネントがインストールされているかについては、[24 ページの「ServerView Operations Manager のコンポーネント」](#)の項を参照してください。

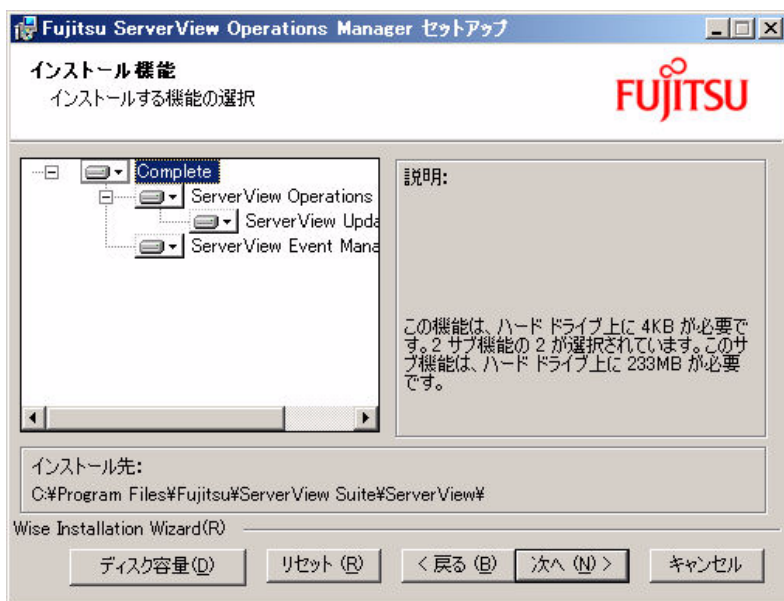


図 12: Operations Manager インストールウィザード - 機能の選択

- ▶ Microsoft Internet Information Server(IIS) または Apache2 Web サーバを選択した場合、「Web サーバパス」ウィンドウで、選択した Web サーバの対象ディレクトリとポートを入力する必要があります。

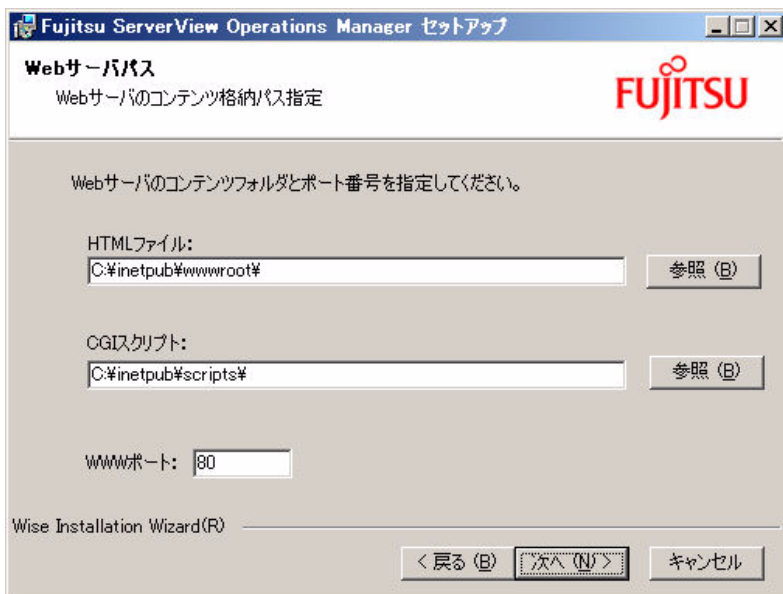


図 13: Operations Manager インストールウィザード - 宛先パス

- ▶ 「Web サーバサービス」ウィンドウ（[103 ページの図 8](#)を参照してください）で ServerView Web サーバを選択した場合、必要なセキュリティメカニズムを入力します。アップグレードインストールではこのウィンドウは表示されません。



図 14: Operations Manager インストールウィザード - セキュリティメカニズム

「SSL 認証を使用する」を選択すると、インターネット経由のデータ転送を別のプロトコル、Secure Socket Layer プロトコル（SSL）によって保護することができます。同時に、リモートからのアクセスをユーザー ID/パスワードメカニズムによって安全にすることができます。詳細は [32 ページの「SSL 暗号化」の項](#)と [33 ページの「ユーザー ID/パスワード機構」の項](#)をご覧ください。

なお、このオプションを選択した場合は、インストール終了後、システムを再起動することを推奨します。


-  既存の Web Server を使用してローカルパスを変更している場合など、環境に応じて表示されている格納先のフォルダを変更する必要があります。
 - IIS のポート番号を自動に取り込むことはできません。IIS のポート番号を変更した場合、変更したポート番号を入力し直してください。
 - ServerView Installation Manager で SVOM を自動インストールした場合、SSL と認証の使用は有効になっています。無効にしたい場合は、SVOM をアンインストールし、再度 SVOM のインストーラを起動してインストールしてください。認証に使用するユーザ名とパスワードは、デフォルトでユーザ名「admin」、パスワード「admin」に設定されています。
- ▶ ダウンロードサービスを利用するユーザのパスワードを入力します。



図 15: Operations Manager インストールウィザード - ダウンロードマネージャのログイン情報

- ▶ 「コンピュータの詳細」ウィンドウは、コンピュータについての情報（コンピュータの名前、IP アドレス、SNMP コミュニティ）を表示します。



図 16: Operations Manager インストールウィザード - コンピュータの詳細

「IP アドレス」に Web サーバが使用する IP アドレスを入力します。

「SNMP コミュニティ」に管理用サーバ/パソコンのコミュニティを入力します。これはトラップを受信するために重要です。

オプションの「Server View サービスを開始する際に、自動的に IP アドレスの変更をチェックする」を選択すると、「Server View サービス」がスタートアップ時にコンピュータの IP アドレスを確認します。IP アドレスが変更されている場合、自動的に変更された内容を取得します（例：Web ユーザーインターフェイスの URL）。

Change Computer Details 画面でもこのオプションを設定できます。設定手順は、「スタート」→「プログラム」→「ServerView Suite」→「Operations Manager」→「Change Computer Details」の順に選択します。このオプションが選択されていない場合は、サーバのプロパティ画面で設定を行ってください。詳細は、ServerView Operations Manager ユーザーズガイドをご覧ください。

- ▶ 連携を行う統合管理システムを選択します。



図 17: Operations Manager インストールウィザード - 統合

このウィンドウは、管理用サーバ/パソコンに統合管理ソフトウェアが見つかった場合のみ表示されます。

i 統合管理システムが選択可能な状態になるためには、対応する管理システムが管理用サーバ/パソコンにインストールされている必要があります。

統合についての詳細は、対応する ServerView Integration ガイドに記載されています。

3 管理端末へのインストール

- ▶ インストールを開始します。



図 18: Operations Manager インストールウィザード - インストールの開始

「次へ」をクリックするとインストールを開始します。必要であれば、「戻る」をクリックするとインストール内容を訂正することができます。「キャンセル」をクリックすると、何も変更せずに Operations Manager インストールウィザードが終了します。

Operations Manager インストールウィザードの最後のウィンドウには終了の情報が表示されます。「終了」をクリックしてインストールを完了します。

3.17 他の Operations Manager ソフトウェアのインストール

インストールされていない Operations Manager ソフトウェアは、あとからインストールすることができます。インストールが始まると、以下のウィンドウが表示されます。



図 19: Operations Manager インストールウィザード - インストール

- ▶ 「修正」を選択します。
- ▶ 「インストール機能」ウィンドウで、インストールしたい Operations Manager 製品を選択します。

3.18 Operations Manager ソフトウェアのアンインストール

Web コンポーネントをアンインストールして同じコンポーネントの旧バージョンをインストールしたい場合、最初にすべてのキャッシュをクリアする必要があります。



- Operations Manager をアンインストールする前に、設定ファイル *ServerViewDB.ini* で SQL Server のインスタンス名と SQL Server のエディションを確認して記録しておきます。インスタンス名は「Server_Instance」、エディションは「DbServerEdition」に定義されています。
- Deployment Manager または Installation Manager がまだインストールされている場合は、まずこれらをアンインストールするように要求されます。
- SVOM をアンインストールする場合、すべての SVOM プログラムを終了させてから行ってください。SVOM をアンインストールした後、ディレクトリ、サブディレクトリ、ファイルが削除されないことがあります。
- アンインストールを行うときに、途中で処理を中断したり、次の手順以外の操作を行ったりすると、正しくアンインストールされません。アンインストールは最後まで確実に行ってください。
- アンインストールを行うため、サーバリストやアラーム設定などの設定は削除されます。自動的に設定を引き継ぐ機能はありませんので、アンインストール前に設定内容を控えておいてください。アップデートインストール後、再度設定してください。
- 同じバージョンの SVOM を再インストールするために SVOM をアンインストールする場合には、SQL Server のアンインストールは必要はありません。
データベースごと再インストールしたい場合など、状況に応じてアンインストールしてください。
- アンインストール画面において文字化けが生じることがありますが、動作には影響はありません。
- アンインストール終了後、SVOM のショートカット、またはプログラムグループに SVOM が残っている場合があります。手動で削除してください。

- アンインストール後、タスクスケジューラに「At** (**: タスク ID)」というタスクが残っている場合があります。この場合は、タスクのプロパティを開いて「実行するファイル名」が次と同じ場合は、タスクを削除してください。

SVOM のタスクスケジューラで実行されるファイル :

[システムドライブ] :%Program Files%Fujitsu%ServerView Suite%ServerView%ServerView Services%WebServer%ClearMyLogs.exe

- SVOM 関連のサービスがまとめて削除されます。削除する対象は、個別に選択できません。

Windows のスタートメニューから Operations Manager とイベントマネージャをアンインストールします。

- Windows Server 2003 では、「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「プログラムの追加と削除」の順に選択します。
- Windows Server 2008 では、「スタート」→「コントロールパネル」→「プログラムと機能」を選択します。製品のバージョンを表示するには、「表示」メニューで「詳細」を選択します。「バージョン」オプションを選択して「OK」をクリックします。

「Fujitsu ServerView Operations Manager」から、「削除」を選択します。これにより、パッケージは完全にアンインストールされます。「変更」を選択すると、個々のコンポーネントを削除できる別のウィンドウが開きます。



図 20: アンインストール

「修正」を選択すると、アンインストールしたい個々のコンポーネントを選択できる別のウィンドウが開きます。

「削除」を選択するとパッケージを完全に削除します。

SQL Server インスタンスのアンインストール

SQL Server インスタンスの「SQLSERVERVIEW」を使用している場合、このインスタンスをアンインストールできます。

設定ファイル *ServerViewDB.ini* で、エディション（「DBServerEdition」）が「Express Edition」だった場合、以下の手順に従います。

- ▶ 「Microsoft SQL Server 2005」を選択します。
- ▶ 「削除」をクリックします。
- ▶ インスタンスの「SQLSERVERVIEW: Database Engine」を選択します。
- ▶ ソフトウェアをアンインストールします。

設定ファイル *ServerViewDB.ini* で、エディション（「DBServerEdition」）が「Desktop Engine」だった場合、以下の手順に従います。

- ▶ 「Microsoft SQL Server Desktop Engine (SQLSERVERVIEW)」を選択します。
- ▶ 「削除」をクリックします。
- ▶ ソフトウェアをアンインストールします。

「SQLSERVERVIEW」が唯一の SQL Server 2005 インスタンスである場合、「Workstation Components」をアンインストールすることもできます。SQL Server Management Studio Express をインストールしている場合、このソフトウェアをアンインストールすることができます。

Enterprise/Standard/Workgroup Edition の SQL Server インスタンスの場合、その SQL Server インスタンスが他のアプリケーションで使用されていないことを確認する必要があります。他のアプリケーションで使用されていなければ、「SQLSERVERVIEW」インスタンスと同じ方法でアンインストールすることができます。

SQL Server 2005 を使用している場合、Microsoft SQL Server Native Client をアンインストールすることができます。

3.19 技術情報

3.19.1 バインド順序の変更

複数枚の LAN カードを搭載するなどして、サーバに複数の IP アドレスが存在する場合、SVOM はネットワークのバインドで設定された順序に従って、IP アドレスを検索します。

バインド順序は、SVOM との通信を行うアダプタを最初に検索するよう、設定してください。

ネットワークのバインド順序を変更する手順は、次のとおりです。

1. コントロールパネルを起動します。
2. 「ネットワーク接続」をダブルクリックします。
「ネットワーク接続」画面が表示されます。
3. 「ネットワーク接続」画面で、「詳細設定」メニューの「詳細設定」をクリックします。
「詳細設定」画面が表示されます。
4. 「アダプタとバインド」タブをクリックします。
5. 変更したい接続をクリックして、右にある矢印ボタンで順序を変更します。



- LAN チーミング環境やクラスタ環境では、サーバ監視に使用する IP アドレスは、実 IP アドレスを使用してください。
上記の環境で割り当てられた仮想 IP アドレスを監視対象とする場合、アドレスタイプの検出が無効となります。
- 自サーバを監視対象とする場合、サービス起動時に監視対象の IP アドレスが仮想 IP アドレスに切り替わる場合があります。
この場合は次の方法で、サービス起動時の自サーバの登録／更新処理を無効化してください。

1. 次のファイルをテキストエディタなどで開きます。

```
c:\Program Files\Fujitsu\ServerView Suite\ServerView\ServerView
Services\scripts\ServerView\common\serverlistconf.xml
```

2. 「addLocalServer」の「true」を「false」に変更し、上書きします。

3.19.2 インストール後のコンピュータ情報変更


共通操作

SVOM のインストール後に、SVOM をインストールした管理用サーバ／パソコン、監視対象サーバのコンピュータ名または IP アドレスを変更した場合、OS を再起動し、SVOM を再起動してください。

SVOM と ServerView エージェントを 1 つのサーバにインストールしている場合

SVOM をインストールしたサーバに ServerView エージェントもインストールしている場合は、このサーバの SVOM を起動し、「サーバの一覧」でこのサーバのコンピュータ名、IP アドレスを確認します。

変更されていない場合、次の設定を行ってください。

- IP アドレスが変更されていない場合
 1. サーバの一覧から、対象のコンピュータを選択します。
 2. 「ファイル」メニュー→「サーバのプロパティ」の順にクリックします。
 3. 「サーバのアドレス」タブをクリックし、変更後の IP アドレスを入力します。
 4. 「OK」をクリックします。
 - コンピュータ名が変更されていない場合
 1. サーバの一覧から、対象のコンピュータを選択します。
 2. 「ファイル」メニュー→「削除」の順にクリックし、いったんサーバを削除します。
 3. 「ファイル」メニュー→「新しいサーバ」の順にクリックし、対象のサーバを再度登録します。
-  - SVOM のインストール後に、サーバ名および IP アドレスを変更すると、サーバの一覧に旧サーバ名、旧 IP アドレスが監視対象として残ったままとなる場合があります。その場合、旧 IP アドレスへアクセスし続けることとなりますので、次の方法で旧サーバ名、旧 IP アドレスの監視エントリを削除してください。
 1. サーバの一覧より削除対象のサーバ名を選択します。
 2. 「ファイル」メニュー→「削除」の順にクリックし、サーバを削除します。

3.19.3 SVOM のシステムサービス

SVOM のシステムサービスの使用方法について説明します。

SVOM のシステムサービスの起動方法

SVOM のシステムサービスの起動方法について説明します。

ServerView Services と、Web サーバ「Apache2」または「IIS」を開始します。Web サーバは、インストール時に、「ServerView Web-Server」(Apache2_SV) または「Apache2」を選択した場合は「Apache2」、「IIS」を選択した場合は「IIS」を使用します。

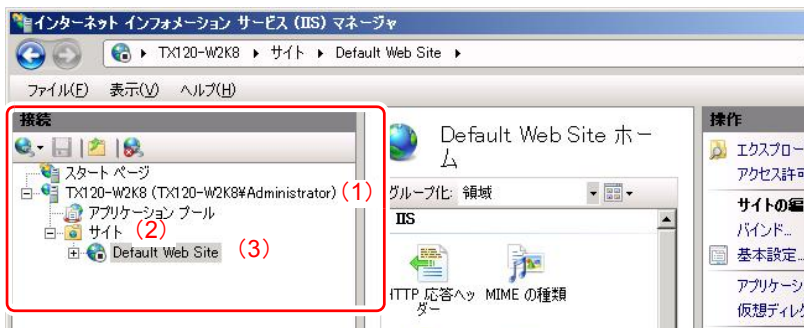


- ServerView Services、Apache2 は、デフォルトで「スタートアップの種類」が「自動」に設定されていますので、本操作を行わなくてもサーバ起動時に自動的に起動します。
- IIS のデフォルト設定では、本操作を行わなくてもサーバ起動時に自動的に起動します。
- Windows Server 2008 では「スタートアップの種類」に「自動（遅延開始）」がありますが、SVOM のサービスを「自動（遅延開始）」へ変更することは未サポートです。
- ServerView Services の場合
 1. コントロールパネルを起動し、「管理ツール」アイコンをダブルクリックします。
 2. 「サービス」アイコンをクリックします。
 3. サービス一覧で「ServerView Services」を選択します。
 4. 「操作」メニュー → 「開始」の順にクリックします。ServerView Services が開始されます。
- Apache2.0 / Apache2.2 / Apache2_SV の場合
 1. コントロールパネルを起動し、「管理ツール」アイコンをダブルクリックします。
 2. 「サービス」アイコンをクリックします。
 3. サービス一覧で「Apache2」、「Apache2.2」、または「Apache2_SV」を選択します。
 4. 「操作」メニュー → 「開始」の順にクリックします。Apache2 が開始されます。

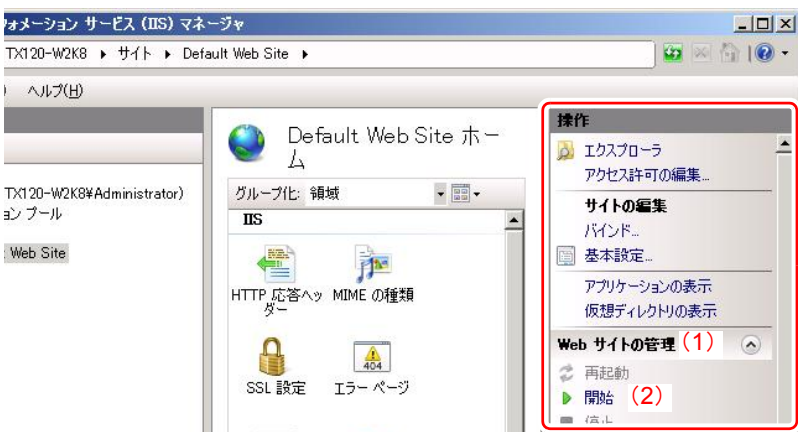
3 管理端末へのインストール

– IIS (Windows Server 2008) の場合

1. コントロールパネルを起動し、「管理ツール」アイコンをダブルクリックします。
2. 「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」アイコンをクリックします。
3. 画面左の「接続」メニューから、「ローカルコンピュータ」(1) → 「サイト」(2) → 「Default Web Site」(3) の順にクリックします。



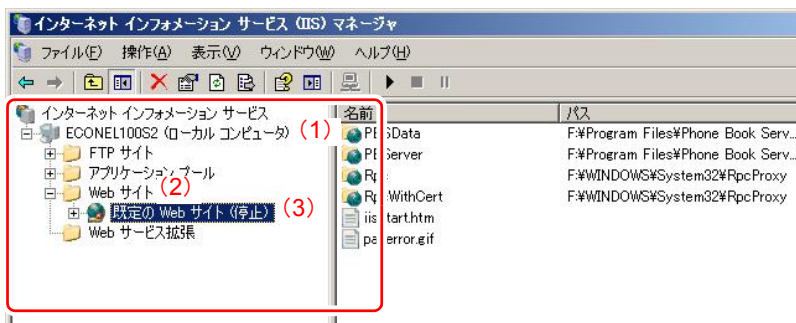
4. 画面右の「操作」メニューから「Web サイトの管理」(1) → 「開始」(2) の順にクリックします。



IIS が開始されます。

– IIS (Windows Server 2003) の場合

1. コントロールパネルを起動し、「管理ツール」アイコンをダブルクリックします。
2. 「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」アイコンをクリックします。
3. 画面左のツリー表示から「ローカルコンピュータ」(1) → 「Web サイト」(2) → 「既定の Web サイト」(3) の順にクリックします。



4. 「操作」メニュー → 「開始」の順にクリックします。



IIS が開始されます。

SVOM のシステムサービスの停止方法

SVOM のシステムサービスの停止方法について説明します。
ServerView Services と、Web サーバ「Apache2」または「IIS」を停止します。Web サーバは、インストール時に、「ServerView Web-Server」または「Apache2」を選択した場合は「Apache2」、IIS」を選択した場合は「IIS」を使用します。



Web サーバ「Apache2」または「IIS」は、SVOM のみが使用するサービスではありませんので、必要に応じて停止してください。

– ServerView Services の場合

1. コントロールパネルを起動し、「管理ツール」アイコンをダブルクリックします。
2. 「サービス」アイコンをクリックします。
3. サービス一覧で「ServerView Services」を選択します。
4. 「操作」メニュー→「停止」の順にクリックします。

ServerView Services が停止します。

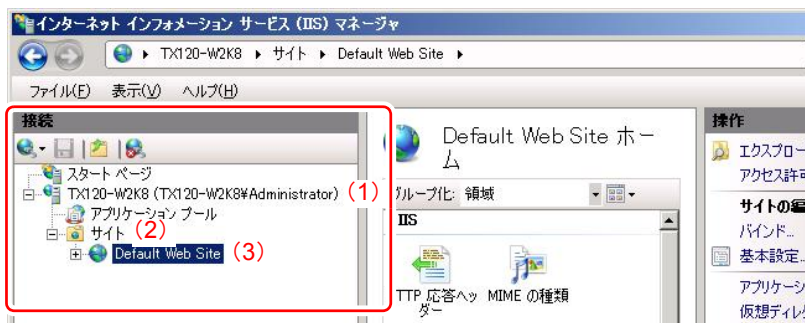
– Apache2.0 / Apache2.2 / Apache2_SV の場合

1. コントロールパネルを起動し、「管理ツール」アイコンをダブルクリックします。
2. 「サービス」アイコンをクリックします。
3. サービス一覧で「Apache2」、「Apache2.2」、または「Apache2_SV」を選択します。
4. 「操作」メニュー→「停止」の順にクリックします。

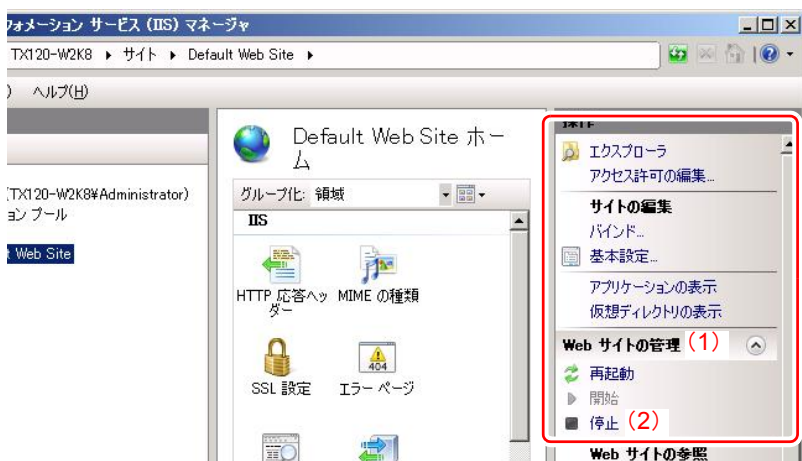
Apache2 が停止します。

– IIS (Windows Server 2008) の場合

1. コントロールパネルを起動し、「管理ツール」アイコンをダブルクリックします。
2. 「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」アイコンをクリックします。
3. 画面左の「接続」メニューから、「ローカルコンピュータ」(1) → 「サイト」(2) → 「Default Web Site」(3) の順にクリックします。



4. 画面右の「操作」メニューから「Web サイトの管理」(1) → 「停止」(2) の順にクリックします。



IIS が停止します。

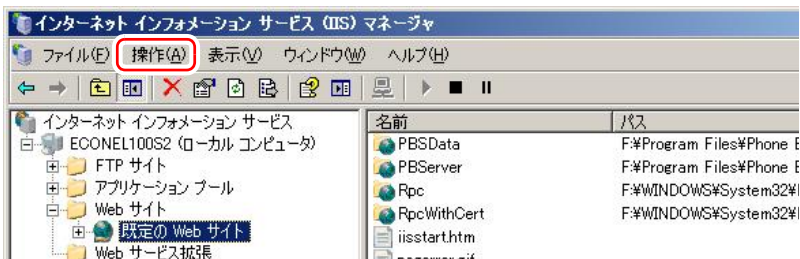
3 管理端末へのインストール

– IIS (Windows Server 2003) の場合

1. コントロールパネルを起動し、「管理ツール」アイコンをダブルクリックします。
2. 「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」アイコンをクリックします。
3. 画面左のツリー表示から「ローカルコンピュータ」(1) → 「Web サイト」(2) → 「既定の Web サイト」(3) の順にクリックします。



4. 「操作」メニュー → 「停止」の順にクリックします。




IIS が停止します。

3.19.4 データベースのバックアップとリストア

SVOM で使用するデータベースのバックアップとリストア方法について説明します。


SVOM for Linux ではアップデートインストールはサポートしていません。アップデートインストールを行う場合は、いったんアンインストールを行う必要があります。また、SVOM のアンインストールを行うと、設定（データベース）が引き継がれません。そのため、設定（データベース）のバックアップ、およびリストアが必要です。

 SVOM のアンインストールを行うと、ServerView エージェントに依存しない情報（サーバリストやアラーム設定など）は同時に消去されます。保存しておきたい設定がある場合、データのバックアップ、リストアを行ってください。

SVOM 設定データのバックアップ

SVOM では設定データをバックアップできます。バックアップされる情報は次のとおりです。

- サーバリスト
- 受信したトラップ
- アラームの設定
- アーカイブマネージャのタスク設定
- パフォーマンスマネージャのレポート関連
- パフォーマンスマネージャのしきい値リスト

 ASR&R（ファン、温度、再起動設定、Power On/Off 設定、ウォッチドッグ設定）、およびパフォーマンスマネージャのしきい値動作は ServerView エージェント、またはハードが保持しているため、SVOM でバックアップを取得しなくても、対象サーバをサーバリストに追加するだけで復旧されます。

バックアップは、次の手順で行います。

- 1. コマンドプロンプトを起動します。
- 2. バックアップコマンドが格納されたフォルダへ移動します。

バックアップコマンドは次に格納されています。Web サーバによって異なります。

– IIS の場合

```
C:¥Inetpub¥scripts¥ServerView¥Tools
```

– ServerView Web-Server (Apache2_SV) の場合

```
C:¥Program Files¥Fujitsu¥ServerView Suite¥ServerView¥ServerView  
Services¥scripts¥ServerView¥Tools
```

– Apache2.0 / Apache2.2 の場合

```
< Apache のインストール先 > ¥cgi-bin¥scripts¥ServerView¥Tools
```

- 3. 次のコマンドを実行します。

SVBackupServerViewDB.bat <cmd> [<path>]


項目	説明
<cmd>	1 または 2 を指定します。 1：指定したフォルダにバックアップを作成します。 2：規定の SVOM 内フォルダにバックアップを作成します。 例) C:¥Program Files¥Fujitsu¥ServerView Suite¥ServerView¥Sqlldb
[<path>]	バックアップ格納先フォルダの指定します。<cmd> に 1 を指定した場合のみ有効です。

表 3:

例) 指定したフォルダ (C:¥SV_BKUP) へバックアップを作成する場合
> SVBackupServerViewDB.bat 1 C:¥SV_BKUP

指定したフォルダにバックアップが作成されます。

```
C:¥SV_BKUP¥ServerViewDBData.bak
```



<cmd> を指定せずにコマンドを実行した場合、対話型で進めることができます。コマンドラインの場合、タスクスケジューラなどで定期的にバックアップをするような使い方も可能になります。リストアは対話型のみです。

SVOM 設定データのリストア

127 ページの "SVOM 設定データのバックアップ" でバックアップしたデータを SVOM へリストアします。



バックアップしたデータをリストアする場合、バックアップを取得した SVOM のバージョンと同じバージョン、同じデータベースエンジン、同じサーバ（または PC）にリストアしてください。いずれかが異なっている場合の動作は保証しません。

リストアは、次の手順で行います。

1. コマンドプロンプトを起動します。
2. リストアコマンドが格納されたフォルダへ移動します。

リストアコマンドは次に格納されています。Web サーバによって異なります。

- IIS の場合

`C:\inetpub\scripts\ServerView\Tools`

- ServerView Web-Server (Apache2_SV) の場合

`C:\Program Files\Fujitsu\ServerView Suite\ServerView\ServerView Services\scripts\ServerView\Tools`

- Apache2.0 / Apache2.2 の場合

`< Apache のインストール先 > \cgi-bin\scripts\ServerView\Tools`

3. 次のコマンドを実行します。

SVRestoreServerViewDB.bat

リストアコマンドは対話型です。実行すると、バックアップデータ格納先フォルダ名の入力待ちとなります。フォルダ名を入力後、リストアを行うか確認が行われます。

例) `C:\SV_BKUP` に格納されているバックアップデータをリストアする場合

> SVRestoreServerViewDB.bat

> フォルダのパスを入力してください「例: d:\SVBackup」:

C:\SV_BKUP ←入力

> 処理を開始します (処理を中断する場合は X を入力) [Y/N]: y ←入力

4. リストアの後処理を行います。

必ず実行してください。

1. ServerView Services を起動します。
2. バックアップコマンドでバックアップを実行します。

127 ページの "SVOM 設定データのバックアップ" の手順 1 と手順 2 を実行した後、次のコマンドを実行します。

SVBackupServerViewDB.bat 2

3.19.5 アクセス権設定

SVOM に対するアクセス権設定について説明します。

SVOM は、Apache / IIS を利用した Web ブラウザベースのコンソールです。SVOM に対するアクセス権は、使用する WebServer の設定に依存します。アクセス権設定を変更した場合、121 ページの「SVOM のシステムサービス」の項をご覧ください。すべてのサービスの停止／起動を行ってください。



ここでは、SVOM を使用するうえでの最小限の設定について説明しています。さらに詳細な設定が必要な場合は、各 WebServer のマニュアルをご覧ください。

Apache についての設定

– SSL 有効でインストールを実施した場合

SVOM インストール時に SSL 有効を選択した場合、設定ファイルとして *ssl.conf* が有効となります。この場合、デフォルトの設定で WebServer 全体に対してパスワードによる制限が有効となっています。次の設定をすると、デフォルトのパスワード設定は無効となります。

接続ホストによるアクセス制限

この設定では、接続可能なホストを「192.168.0.2」のみに制限しています。

設定ファイル *C:\Program Files\Fujitsu\ServerView Suite\ServerView\ServerView Services\WebServer\conf\ssl.conf* の次の記述をコメントアウトします。

settings for user/password authentication:

```
# wwwroot
```

```
<中略>
```

```
#</IfDefine>
```

さらに *C:\Program Files\Fujitsu\ServerView Suite\ServerView\ServerView Services\WebServer\conf\ssl.conf* に次の記述を追加します。

```
<Directory
```

```
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/scripts/SE  
RVER~1">
```

```
    Order deny,allow
```

```
    deny from all
```

```
    Allow from 192.168.0.2
```

```
</Directory>
```

```
<Directory
```

```
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/wwwroot/S  
ERVER~1">
```

```
    Order deny,allow
```

```
    deny from all
```

```
    Allow from 192.168.0.2
```

```
</Directory>
```

```
<Directory
```

```
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/wwwroot/A  
LARMS~">
```

```
    Order deny,allow
```

```
    deny from all
```

```
    Allow from 192.168.0.2
```

```
</Directory>
```

```
<Files "sv_www.html">
```

```
    Order deny,allow
```

```
    Deny from all
```

```
    Allow from 192.168.0.2
```

```
</Files>
```

```
<Files "AlarmService.htm">
```

```
    Order deny,allow    Deny from all
```

```
    Allow from 192.168.0.2
```

```
</Files>
```

```
<Files "svagent.html">
```

```
    Order deny,allow
```

```
    Deny from all
```

```
    Allow from 192.168.0.2
```

```
</Files>
```

ユーザ認証によるアクセス制限

SVOM に接続するとユーザ認証を要求されます。コマンドプロンプトから次のコマンドを実行して、ユーザの作成とパスワード設定を行います。

```
C:¥>cd C:¥Program Files¥Fujitsu¥ServerView  
Suite¥ServerView¥ServerView Services¥WebServer¥bin
```

```
C:¥Program Files¥Fujitsu¥ServerView Suite¥ServerView¥ServerView  
Services¥WebServer¥bin
```

```
>htpasswd -c svpasswd websvuser
```

```
New password: *****
```

```
Re-type new password: *****
```

```
Adding password for user websvuser
```

設定ファイル *C:¥Program Files¥Fujitsu¥F5FBFE01¥ServerView
Services¥WebServer¥conf¥ssl.conf* の次の記述をコメントアウトします。

```
# settings for user/password authentication:
```

```
# wwwroot
```

```
<中略>
```

```
#</IfDefine>
```

さらに *C:\Program Files\Fujitsu\ServerView Suite\ServerView\ServerView Services\WebServer\conf\ssl.conf* に次の記述を追加します。

```
<Directory
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/scripts/SE
RVER~1">

    AuthType Basic

    AuthName "SV Console"

    AuthUserFile
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/WebServer
/bin/svpasswd"

    Require user websvuser

</Directory>

<Directory
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/wwwroot/S
ERVER~1">

    AuthType Basic

    AuthName "SV Console"

    AuthUserFile
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/WebServer
/bin/svpasswd"

    Require user websvuser

</Directory>

<Directory
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/wwwroot/A
LARMS~1">

    AuthType Basic

    AuthName "SV Console"

    AuthUserFile
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/WebServer
/bin/svpasswd"

    Require user websvuser

</Directory>
```

– SSL 無効でインストールを実施した場合

SVOM インストール時に SSL 無効を選択した場合、*ssl.conf* が有効となりません。

この場合、デフォルトの設定で WebServer に対してパスワードによる制限は行われていません。

接続ホストによるアクセス制限

この設定では、接続可能なホストを「192.168.0.2」のみに制限しています。

設定ファイル *C:\Program Files\Fujitsu\ServerView Suite\ServerView\ServerView Services\WebServer\conf\httpd.conf* に次の記述を追加します。

```
<Directory  
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/scripts/SE  
RVER~1">
```

```
    Order deny,allow
```

```
    deny from all
```

```
    Allow from 192.168.0.2
```

```
</Directory>
```

```
<Directory  
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/wwwroot/S  
ERVER~1">
```

```
    Order deny,allow
```

```
    deny from all
```

```
    Allow from 192.168.0.2
```

```
</Directory>
```

```
<Directory  
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/wwwroot/A  
LARMS~">
```

```
    Order deny,allow
```

```
    deny from all
```

```
    Allow from 192.168.0.2
```

```
</Directory><Files "sv_www.html">
```

```

    Order deny,allow
    Deny from all
    Allow from 192.168.0.2
</Files>
<Files "AlarmService.htm">
    Order deny,allow
    Deny from all
    Allow from 192.168.0.2
</Files>
<Files "svagent.html">
    Order deny,allow
    Deny from all
    Allow from 192.168.0.2
</Files>

```

ユーザ認証によるアクセス制限

SVOM に接続するとユーザ認証を要求されます。次のコマンドを実行して、ユーザの作成とパスワード設定を行います。

```

C:¥>cd C:¥Program Files¥Fujitsu¥ServerView
Suite¥ServerView¥ServerView Services¥WebServer¥bin

C:¥Program Files¥Fujitsu¥ServerView Suite¥ServerView¥ServerView
Services¥WebServer¥bin

>htpasswd -c svpasswd websvuser

New password: *****

Re-type new password: *****

Adding password for user websvuser

```

設定ファイル *C:\Program Files\Fujitsu\ServerView Suite\ServerView\ServerView Services\WebServer\conf\httpd.conf* に次の記述を追加します。

```
<Directory
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/scripts/SE
RVER~1">

    AuthType Basic

    AuthName "SV Console"

    AuthUserFile
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/WebServer
/bin/svpasswd"

    Require user webservuser
</Directory>

<Directory
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/wwwroot/S
ERVER~1">

    AuthType Basic

    AuthName "SV Console"

    AuthUserFile
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/WebServer
/bin/svpasswd"

    Require user webservuser
</Directory>

<Directory
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/wwwroot/A
LARMS~">

    AuthType Basic

    AuthName "SV Console"

    AuthUserFile
"C:/PROGRA~1/Fujitsu/SERVER~1/SERVER~1/SERVER~1/WebServer
/bin/svpasswd"

    Require user webservuser
</Directory>
```


IIS についての設定

ここでは、Windows Server 2003 で IIS に設定を変更していない場合を例として記述します。SVOM のインストール前に IIS の DocumentRoot の変更などを行っている場合は、それに準じた設定を行ってください。「スタート」ボタン → 「すべてのプログラム」 → 「管理ツール」 → 「インターネットインフォメーションサービス (IIS) マネージャ」の順にクリックして、IIS マネージャを起動します。

－ 接続ホストによるアクセス制限

次の 3 つのフォルダに対して設定を行います。

- － 既定の Web サイト ¥scripts¥ServerView
 - － 既定の Web サイト ¥ServerView
 - － 既定の Web サイト ¥AlarmService
1. 各フォルダのプロパティから「ディレクトリセキュリティ」を開き、「IP アドレスとドメイン名の制限」の「編集」をクリックします。
 2. 「拒否する」を選択し、接続を許可したい IP / ドメイン名のみを追加します。
 3. 「既定の Web サイト」配下の次のファイルに対しても、同様のアクセス制限を行います。

AlarmService.htm、*AlarmService.html*、*svagent.htm*、*sv_www.html*



「既定の Web サイト」に SVOM 以外のコンテンツを格納しない場合、「既定の Web サイト」そのものにアクセス制限を設定することもできます。

－ ユーザ認証によるアクセス制限

次の 3 つのフォルダに対して設定を行います。

- － 既定の Web サイト ¥scripts¥ServerView
- － 既定の Web サイト ¥ServerView
- － 既定の Web サイト ¥AlarmService

3.19.6 SVOM のプロセス（デーモン）について

プロセス名	機能
Apache.exe	SVOM で使用する Web サーバです。 IIS 環境では存在しません。
AlarmService.exe	SNMP トラップのログ履歴を作成します。
DownloadServer.exe	WEB サーバからファイルをダウンロードします。
DownloadServerSVC.exe	WEB サーバからファイルをダウンロードします。
UpdateServer.exe	BIOS、FW、ドライバなどのアップデートを行な います。
SVFwdServer.exe	SNMP トラップを受信して、イベントログ格納、 メール送信、ポップアップなどのアクションを実 行します。
SVArchiveServer.exe	定期的に監視サーバと通信して、各データを収集 します。
SVBmcService.exe	定期的に BMC と通信して情報を収集します。
SVServerListService.exe	SVOM に登録されている各監視サーバの管理を行 います。
ExportServer.exe	エクスポートデータの作成、およびファイル出力 を行います。
SVDataProvider.exe	データベース関連を制御します。
SVDBServer.exe	定期的にデータベースと通信して情報を収集しま す。
SVInventoryServer.exe	インベントリ情報の収集を行います。
SnmpTrapListen.exe	SNMP トラップを受信して、フィルタリング処理 やフォワード処理を行う別モジュールに引き渡し ます。
SnmpListMibValue.exe	MIB 情報の一覧を採取します。
SnmpGetMibValue.exe	MIB 情報の一覧より値を獲得します。

表 4: SVOM のプロセス（デーモン）

3.20 トラブルシューティング

SVOM をインストールすると、At* (ID 番号) の名前で登録されるタスクは何の役割をしていますか？

WebServer に ServerView Web-Server を選択して SVOM のインストールを行った場合、タスクスケジューラに At* (ID 番号) の名前でタスクが登録されます。このタスクでは、WebServer のログファイルの肥大化を抑止しています。

タスクのスケジューラを無効にする場合には、定期的に次のファイルサイズに注意してください。

[システムドライブ] :%Program Files\Fujitsu\ServerView Suite\ServerView\ServerView Services\WebServer\logs\access.log

ドメインコントローラへの昇格、ドメインコントローラからの降格

SVOM がインストールされているサーバをドメインコントローラに昇格、またはドメインコントローラから降格する場合は、次を実施してください。

なお、すでにドメインコントローラとして構成されているサーバに SVOM をインストールする場合は、対処の必要はありません。

ー ドメインコントローラへの昇格／降格のパターン

昇格／降格のパターン	①	②	③	④	⑤	⑥
ドメイン：ドメインコントローラ		昇格	昇格	↓		↓
ドメイン：メンバサーバ	昇格	↑	↑	降格	↓	↓
グループ：メンバサーバ	↑		↑		降格	降格

表 5: ドメインコントローラへの昇格／降格のパターン

パターン①⑤の場合、対処の必要はありません。

パターン②③④⑥の場合、次の対処が必要です。

- ー SQL Server 2000 または MSDE を使用している場合

140 ページの "SVOM のアンインストール／インストールが必要な場合" または 140 ページの "タスクの再設定が必要な場合" のどちらかを実施してください。

- ー SQL Server 2005 (Express Edition を含むすべてのエディションが対象) を使用している場合

140 ページの "SVOM のアンインストール／インストールが必要な場合" を実施してください。

– SVOM のアンインストール／インストールが必要な場合

SVOM で設定したデータの退避、復元が可能です。[127 ページの「データベースのバックアップとリストア」の項](#)をご覧ください。

1. SVOM をアンインストールします。
2. SQL Server の SQLSERVERVIEW インスタンスをアンインストールします。
3. 「コントロールパネル」→「タスク」の順にクリックし、「JobServerView ～」で始まるタスクが存在していた場合は、それらをすべて削除します。
4. ドメインコントローラへの昇格（または降格）を行います。
5. SVOM をインストールします。

SVOM に同梱されているもの以外の SQL Server を使用する場合は、SVOM をインストールする前に、あらかじめ SQL Server をインストールしておく必要があります。

– タスクの再設定が必要な場合

1. ドメインコントローラへの昇格、降格を行います。
2. 「コントロールパネル」→「タスク」の順にクリックします。
「JobServerView ～」で始まる SVOM のタスクが 4 つ登録されています。
3. これらのタスクを右クリックし、「プロパティ」をクリックします。
プロパティが表示されず、次のメッセージが表示された場合は、手順 4 に進んでください。プロパティが表示された場合は対処の必要はありません。

エラー：

0x8007000d: データが無効です。

4. Microsoft 社のサポート技術情報
(<http://support.microsoft.com/kb/822904>) の回避策にある、「d42* ファイルの再作成」を行います。

タスクスケジューラに SVOM 以外のタスクがスケジュールされていた場合、タスクの作成者などに上記の回避策を行って問題がないか、またタスクの再スケジュール方法などを確認した後に、上記の回避策を行ってください。

5. SVOM のタスクの再スケジュールを行います。

1. 管理者権限を持ったアカウントで、対象 SVOM が動作しているサーバ／パソコンにログインします。
2. 次のバッチファイルを実行します。

– IIS の場合

C:¥Inetpub¥scripts¥ServerView¥Tools¥SVSqlJobsSchtasks.bat

– Apache2.0 / Apache2.2 の場合

*C:¥Program Files¥Fujitsu¥ServerView Suite¥ServerView¥
ServerView Services¥scripts¥ServerView¥Tools¥
SVSqlJobsSchtasks.bat*

「タスクの設定が正常に終了しました。」と表示されれば終了です。
上記メッセージが表示されない場合や、エラーが表示された場合は、再度バッチファイルを実行してください。

4 ServerView データベース

Operations Manager には次の SQL データベースが必要です。

- Windows Server 2008 では、SQL Server 2008 または SQL Server 2005 を使用できます。最新のサービスパックを適用することをお勧めします。SQL Server 2005 Express は Operations Manager に添付されています。
- Windows Server 2003 では、SQL Server 2000、MSDE 2000、SQL Server 2005、または SQL Server 2005 Express を使用できます。MSDE 2000 は Operations Manager に添付されています。

4.1 構成ファイル ServerViewDB.ini

構成ファイル *ServerViewDB.ini* は、SQL Server インスタンスに関する情報、インストールパス、およびログファイルのパス名が含まれています。構成ファイルは <WinDir> ディレクトリに格納されています。

- ▶ 「スタート」→「ファイル名を指定して実行」の順に選択します。
- ▶ 「名前」に「%windir%」を入力します。
- ▶ 「OK」をクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、「ServerViewDB.ini」ファイルを選択して開きます。

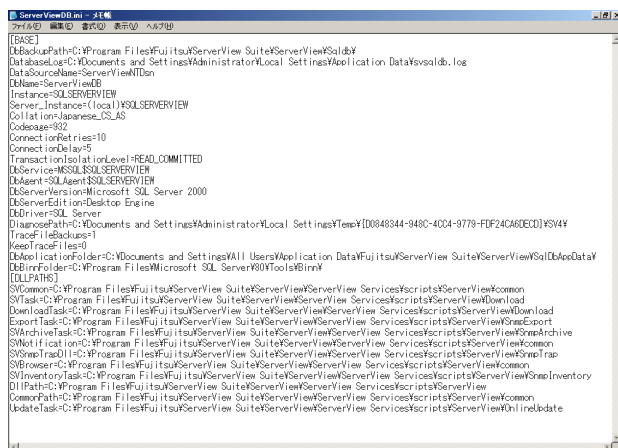


図 21: *.ini ファイルの一例

ServerViewDB.ini 構成ファイルにおける重要なエントリ

ServerViewDB.ini 構成ファイルで以下が重要なエントリです。

- データベースサーバのインスタンス名 : エントリ「Server_Instance」
このエントリは <SQL Server_Instance> で指定する必要があります。
- データベースバックアップファイルのパス : エントリ「DbBackupPath」
- データベースのバックアップモード : エントリ「DbBackupMode」
- SQL サーババージョン : エントリ「DbServerVersion」
- SQL サーバエディション : エントリ「DbServerEdition」

SQL サーバ 2000 と SQL サーバエディションの Desktop Engine は、本マニュアルでは MSDE 2000 と表記します。

4.2 データベースへの接続中断

LAN の問題など、ServerView データベースへの接続が中断される場合、以下が発生しています。

- 「ServerView Services」 サービスおよび「ServerView Download Service」（あれば）が停止します。
- メッセージ（下図を参照）が Windows のイベントログに書き込まれます。
- Operations Manager の動作中には、次の画面が表示されます。



図 22: エラーメッセージ

ServerView データベースへの接続がいったん切断されると、サービス、「ServerView Services」 および「ServerView Download Service」は手動で再起動する必要があります。

- ▶ 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
- ▶ 関連するサービスを選択します。
- ▶ コンテキストメニューの「開始」を選択します。

4.3 ServerView データベースの管理

4.3.1 SQL Server 2008/2005

次のプログラムは SQL Server 2008/2005 での ServerView データベースの管理に使用できます。

- SQL Server Management Studio (Basic) for SQL Server 2008
SQL Server Management Studio (Express) for SQL Server 2005
Graphical プログラムです。Enterprise/Standard/Workgroup エディションでは、SQL Server 2008/2005 のコンポーネントとして、Microsoft SQL Server 2008/2005 インストール DVD に収録されています。

SQL Server 2008 Express および SQL Server 2005 Express の場合、SQL Server Management Studio の基本バージョンを含むさまざまなエディションがあります（SQL Server 2008 Express with Tools、SQL Server 2008/2005 Express with Advanced Services）。Management Studio の基本バージョンはイントラネットから別々にインストールパッケージとしてダウンロードして、追加または後でインストールすることもできます。インストール後、最新のサービスパックが使用されているかどうかを確認してください。

- osql
コマンドラインプログラム osql は、SQL Server 2008/2005 のインストール後に使用できます。
- sqlcmd
コマンドラインプログラム sqlcmd は、SQL Server 2008/2005 のインストール後に使用できます。

ServerView データベースを管理する場合、SQL Server インスタンスはプログラム内で制限する必要があります。構成ファイル *ServerViewDB.ini* で、*Server_Instance=<SQL Server instance>* 下の SQL Server インスタンスでエントリを検出します。

SQL Server Management Studio (Basic/Express)

SQL Server のインスタンスを入力するには、以下を実行します。

- ▶ 「スタート」 → 「すべてのプログラム」 → 「Microsoft SQLServer 2008/2005」 → 「SQL Server Management Studio (Express)」を開始します。
- ▶ 「サーバへの接続」ダイアログで、サーバの種類、データベースエンジンのサーバ名を選択します。サーバ名で、SQL Server のインスタンス名を選択します。
- ▶ 「接続」をクリックします。

osql

SQL Server インスタンスに接続するには、入力プロンプトを開始し、次のコマンドを入力します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E
```

sqlcmd

SQL Server インスタンスに接続するには、以下を実行します。

- ▶ 入力プロンプトを開始します。
- ▶ 次のコマンドを入力します。

```
sqlcmd -S <SQL Server instance> -E
```

4.3.2 SQL Server 2000 および MSDE

次のプログラムは SQL Server 2000 および MSDE 2000 での ServerView データベースの管理に使用できます。

- Enterprise Manager
SQL Server 2000 のグラフィカルプログラムコンポーネントです。
- DbaMgr2k
無料のグラフィカルプログラムです。
- osql
osql は SQL Server 2000 または MSDE 2000 のインストール後に使用できます。

ServerView データベースを管理する場合、SQL Server インスタンスは *ServerViewDB.ini* 構成ファイルで特定する必要があります。SQL Server インスタンス名は、*Server_Instance=<SQL Server instance>* エントリより検出します。

Enterprise Manager

SQL Server のインスタンスを入力するには、以下を実行します。

- ▶ スタートメニューから Enterprise Manager を開始します。
- ▶ 「SQL Server Group」→「Action」→「New SQL Server registration」を選択して、ウィザードの指示に従います。
- ▶ 使用可能なサーバのリストから SQL Server インスタンスを選択します。

DbaMgr2k

Operations Manager のインストールに従い、DbaMgr2k の設定は *<WebServer>/scripts/ServerView/Tools/* ディレクトリに格納されます。DbaMgr2k は *SetupDbaMgr2k.exe* ファイルを実行することによりインストールされます。

ただし、ServerView Suite DVD 1 から DbaMgr2k をインストールすることもできます。

- ▶ ServerView Suite DVD 1 で、「SVSSoftware」→「Software」→「ServerView」→「Windows」→「ServerView_S2」→「DbaMgr2k」ディレクトリに切り替えます。
- ▶ *Setup_DbaMgr2k.exe* ファイルを実行します。

SQL Server のインスタンスを入力するには、以下を実行します。

- ▶ DbMgr2k（デスクトップアイコン、クイック起動アイコン、またはスタートメニューを使用）を開始します。
- ▶ エントリ「SQL Server」をダブルクリックします。
- ▶ 「SQL Server connection properties」ウィンドウで次の設定を行います。
 - ▶ アイコンをクリックして（「Show available SQL Server/MSDE on local network」）ローカルネットワークにあるすべての SQL サーバまたは MSDE サーバを表示します。
 - ▶ SQL Server インスタンス *<SQL Server instance>* を選択し、「OK」でエントリを確定します。
 - ▶ 「Public name」で、同じエントリを行うか、選択したエントリの説明を入力します。
 - ▶ 「Trusted NT Connection box」をダブルクリックします。
 - ▶ 「Connect」ボタンをクリックします。

構成後に、システムを再起動してください。

次の SQL Server インスタンスを使用できます。

`<Computer name>\<Instance> or
(local)`

osql

SQL Server インスタンスに接続するには、入力プロンプトを開始し、次のコマンドを入力する必要があります。

`osql -S <SQL Server instance> -E`

4.4 ServerView データベースのバックアップ

ServerView データベースおよび SQL Server システムデータベース *msdb* は、インストール時に入力されるバックアップジョブにより、自動的に一定の時間間隔でバックアップされます。



以下を注意してください。

システム稼働時、ServerView データベースの自動バックアップ時間を調整してください。自動バックアップは、システム稼働時のみ実行されます。自動バックアップジョブ「JobServerViewLongInterval」は、バックアップ処理を実行するだけでなく、データベースのサイズが大きくなりすぎていることも確認します。このメンテナンスは定期的に行う必要があります。

バックアップはオンラインで実行されます。データベースサービス「MSSQL\$SQLSERVERVIEW」または「MSSQLSERVER」（SQL Server 2008/2005 の場合：「SQL Server（SQLSERVERVIEW）」または「SQL Server（MSSQLSERVER）」）は引き続き実行されるので、ServerView データベースにはバックアップ中もアクセスできます。

4.4.1 ServerView データベースのバックアップジョブ

Operations Manager のインストール中、標準または完全どちらかの SQL Server バックアップモードを選択できます。*ServerViewDB.ini* コンフィグレーションファイルでは、*DbBackupMode* 項目の下に選択したバックアップモードが表示されます。

インストール中、標準を選択した場合、*JobServerViewDaily* バックアップジョブが実行されます。このジョブは、ServerView データベースを毎日バックアップし、前日のバックアップを上書きします。

完全を選択した場合、次のバックアップジョブを利用できます。

- JobServerViewDaily
データベースを毎日バックアップし、前日のバックアップへ追加します。
- JobServerViewHourly
毎時トランザクションログをバックアップします。
- JobServerViewLongInterval
週 1 回データベースをバックアップし、以前のバックアップをすべて上書きします。

バックアップモードの違いの概要

	標準バックアップ モード	完全バックアップ モード
SQL Server recovery model:	simple	full
最大データ損失量	1 日入力されたデータ	1 時間入力されたデータ
バックアップの頻度	1 日 1 回	毎時
バックアップジョブ監視の オーバーヘッド（ 154 ページの「バックアップジョブの進行確認と編集」の項 参照）	低	高
ディスク使用量	低	高

システムが正常に稼働している際、バックアップを実行するための適切な時間を定義します。

完全バックアップモードを選択した場合は、バックアップジョブ *JobServerViewHourly* および *JobServerViewLongInterval* が実行されているかを定期的に確認し、ログファイル *ServerViewDB_log.LDF* が大きくなりすぎないようにします。急速にファイルが肥大している場合は、ファイルサイズを縮小します。[184 ページの「ServerViewDB_log.LDF ファイルの肥大化」の項](#)と次の段落で説明する手順に従います（4.4.2 から 4.4.5）。

ログファイル *ServerViewDB_log.LDF* は標準バックアップモードでも生成されます。サイズは自動的に縮小されますが、バックアップはされません。

osql でスケジュールを設定することもできます。[193 ページの「osql によるデータベース管理（Windows）」の項](#)をご覧ください。

ServerView データベースをハードディスクへバックアップするのと同様に、定期的に外部メディアへも保存してください。Windows では、「スタート」→「すべてのプログラム」→「アクセサリ」→「システムツール」→「バックアップ」の順に選択しバックアッププログラムを使用します。

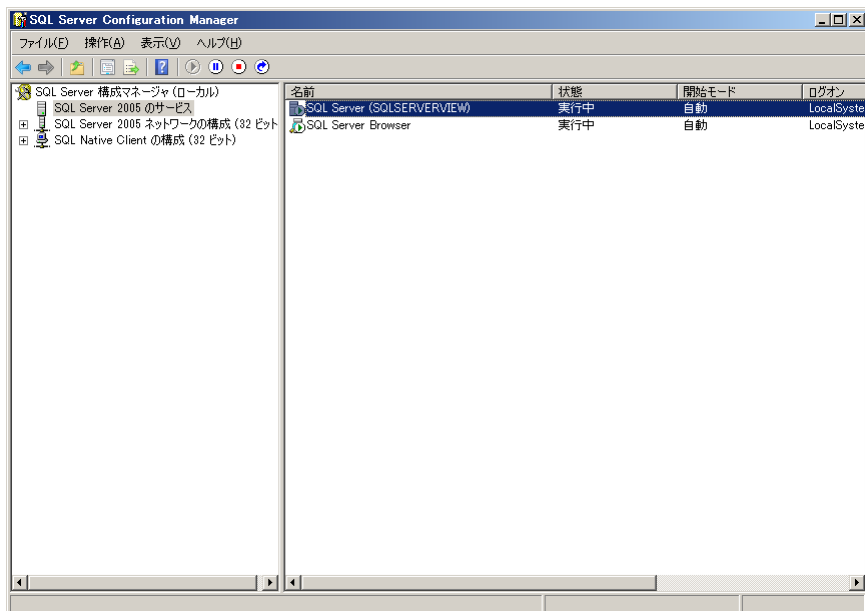
4.4.2 ジョブの実行要件

ジョブを実行する場合、以下を実行して、開始タイプを「自動」に設定してください。

- SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 の場合、Windows Task Scheduler
- SQL Server 2008/2005 Enterprise/Standard/Workgroup Edition の場合、SQL Server エージェント *SQL Server-Agent (MSSQLSERVER)*
- SQL Server 2000 の場合、SQL Server エージェント *SQLSERVERAGENT*

「管理ツール」→「サービス」を使用して、これらの設定をチェックすることができます。

SQL Server 2008 および SQL Server 2005 の場合、「スタート」→「すべてのプログラム」→「Microsoft SQL Server 2008/2005」→「構成ツール」→「SQL Server 構成マネージャ」を選択することにより、SQL Server に影響を与えるサービスのリストを表示できます。



ServerViewDB.ini 構成ファイルのエントリ 「DbAgent」で SQL Server エージェントの名前を検索します。

SQL Server 2008 Express/2005 Express の場合、SQL Server エージェントは存在しません。MSDE 2000 の場合、Operations Manager version 4.8 として使用されることはありません。ジョブ管理については、[156 ページの "SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 のタクスによる進行確認と編集 "](#)に記載されています。

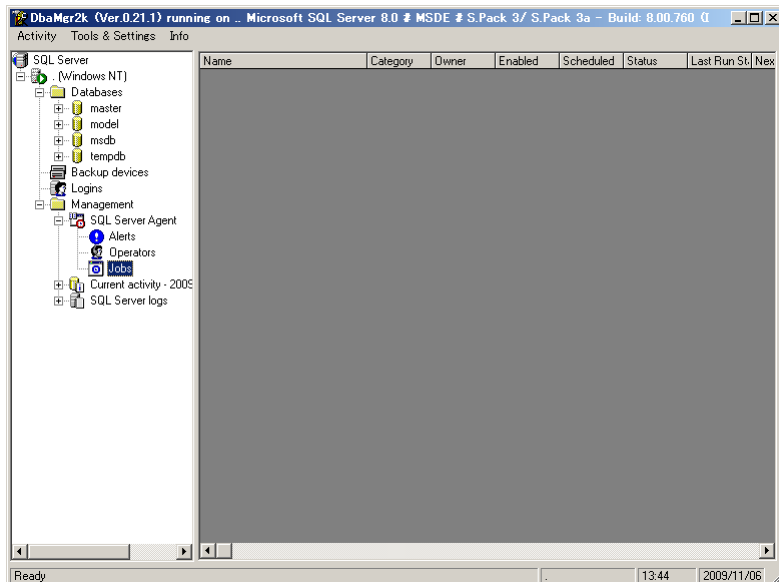
4.4.3 バックアップジョブの進行確認と編集

データベース管理ツールでの進行確認と編集（SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 以外）

バックアップジョブのスケジュールを表示するには、以下を実行します。

- ▶ Enterprise Manager、DbaMgr2k、または SQL Server Management Studio を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックして、([Management] の Enterprise Manager または DbaMgr2k の) エントリ「SQL Server Agent」を選択します。
- ▶ 次に「Jobs」をクリックします。

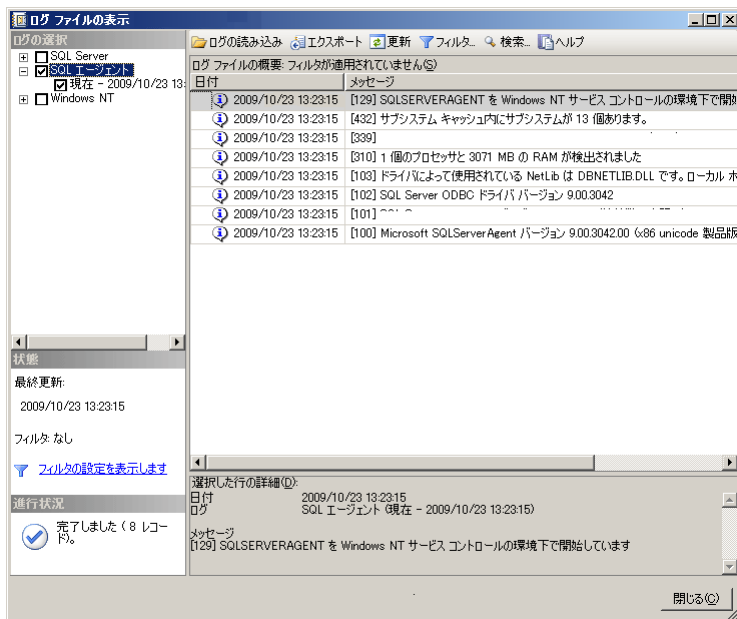
Enterprise Manager または DbaMgr2k で、バックアップジョブが「Last Run Status」列で成功したかどうかをチェックできます。



- ▶ 適切なバックアップジョブを選択し、コンテキストメニューの「Properties」を選択します。

SQL Server Management Studio で、各ジョブの進行状況の詳細を表示します。

- ▶ 「SQL Agent」で、すべてのジョブまたは特定のジョブを選択します。
- ▶ コンテキストメニューの「View History」を選択します。



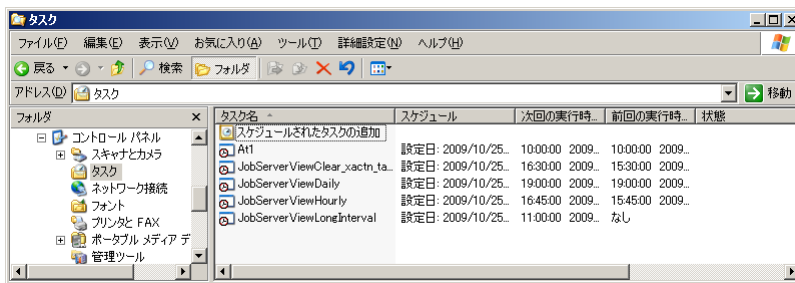
- ▶ コンテキストメニューの「Properties」を選択します。
- ▶ プロパティウィンドウで、「Schedules」のリンクを選択し、必要に応じてジョブのスケジュールを調整します。
- ▶ 「Edit」をクリックし、スケジュールを調整します。システムが通常に動作しているときのジョブの実行時間を選択します。

SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 のタスクによる進行確認と編集

SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 を使用して、バックアップおよびメンテナンスのジョブを SQL Server エージェントで管理することはできません。SQL Server 2005 Express の場合、このコンポーネントは存在しません。ジョブは Windows タスク スケジューラ で設定されるため、このコンポーネントで監視できます。

Windows Server 2003

- ▶ コントロールパネルを開きます。
- ▶ 「タスク」をダブルクリックします。



ServerView バックアップジョブおよびスケジュール表を確認します。

- ▶ Windows エクスプローラメニューで、「詳細設定」→「ログを表示」を選択します。表示されたウィンドウに、出力メッセージが表示されます。最近のエントリは次の行の上にあります。

[***** 一番最近のエントリはこの行より上にあります *****]

タスクの実行に成功すると、次のテキストが表示されます。

" 結果：タスクは次の終了コードで完了しました：(0)."

JobServerView が先頭にあるジョブの値が 0 かどうかを確認します。

タスクの実行に失敗すると、次のテキストが表示されます。

" 結果：タスクは次の終了コードで完了しました：(1)."

その上にエラーの説明が表示されます。

- ▶ ウィンドウを閉じます。

- ▶ 関連するバックアップジョブを選択し、コンテキストメニューの「プロパティ」を選択します。
- ▶ プロパティウィンドウで、「スケジュール」タブを選択します。表示されたウィンドウでスケジュールを変更します。

Windows Server 2008

- ▶ 「管理ツール」で、「タスク スケジューラ」を選択します。
- ▶ 「タスクスケジューラ ライブラリ」を選択し、「エントリ タスクステータス」までスクロールします。
- ▶ 「JobServerView」ジョブのいずれかをダブルクリックします。すべての ServerView ジョブは中央のウィンドウに表示されます。
- ▶ 「履歴」タブをクリックして、ジョブの進行状況を表示します。
- ▶ ウィンドウの上部で、「JobServerView」ジョブを選択します。
- ▶ コンテキストメニューで、「プロパティ」を選択し、「Trigger」タブを選択します。
- ▶ 「Edit」をクリックし、スケジュールを調整します。システムが通常に動作しているときのジョブの実行時間を選択します

SQL Server のエディションすべてのイベントビューアで追跡する

予定されているデータベースバックアップジョブの実行を確認するには、Windows イベントビューアを次のとおり利用します。

- 「スタート」→「管理ツール」→「イベントビューア」の順に選択します。
- Windows 2008 では、「Windows ログ」を選択します。
- 「アプリケーション」を選択します。

次の一覧表は、使用する SQL Server に応じてバックアップジョブ実行中に Windows アプリケーションイベントログへ書き込まれる項目を示します。

4 ServerView データベース

2008 Express/2005 Express/MSDE 2000 の場合 :

カラム ソース	カラム イベント ID	説明
MSSQL\$SQLSERVERVIEW	18264 18265	データベースがバックアップされました。データベース : ServerViewDB、 ダンプされたページ : ...、 MEDIANAME='ServerViewDB' : {'ServerViewDBData'}。このメッセージは情報です。ユーザの操作は不要です。
MSSQL\$SQLSERVERVIEW	17060	Windows のタスクスケジューラジョブ「JobServerView...」が起動されました。

2008/2005/2000 Enterprise/Standard/Workgroup エディションの場合（リモートの SQL Server マシンにあるリモート SQL Server の追跡の場合）:

カラム ソース	カラム イベント ID	説明
SQLSERVERAGENT oder SQLAgent\$Instanzname	208	スケジュールされた SQL Server ジョブ「JobServerView...」... - 状態 : Succeeded - ...。
MSSQLSERVER oder MSSQL\$Instanzname	18264 18265	データベースがバックアップされました。データベース : ServerViewDB、 ...、ダンプされたページ ...、 MEDIANAME='ServerViewDB': {'ServerViewDBData'}。このメッセージは情報です。ユーザの操作は不要です。

選択した追跡に対してフィルタを作成できます。

4.4.4 バックアップファイルがあるかどうかをチェックする

ServerView データベースは定期的にバックアップされます。これにより、*.bak* の拡張子の 2 つのファイルが作成されます。

- *ServerViewDBData.bak*
ServerView データベースのバックアップファイル。
- *ServerViewDBLog.bak*
ServerView データベースのトランザクションログのバックアップファイル。完全バックアップモードで作成する場合のみ有効です。

ServerViewDB.ini コンフィグレーションファイルでは、インストール時のファイルのパスが *DbBackupPath* の下に表示されます。また、バックアップモードの設定が *DbBackupMode* の下に表示されます。



以下は、リモートで SQL Server インスタンスをインストールしたインストールの場合のみ適用されます。

Operations Manager ソフトウェアのインストール中に、「SQL Server Backup Path」ウィンドウでリモートの SQL Server にあるバックアップファイルのパスを指定することができます。パスを指定しない場合、SQL Server のデフォルトのパスにバックアップファイルが作成されます。この場合の構成ファイル *ServerViewDB.ini* には「*DbBackupPath*」のデフォルトのエントリが含まれています。

SQL Server 2000 のデフォルトのパス：

```
\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL<$Instancename>\BACKUP\
```

SQL Server 2000 のデフォルトのパス（名前のないインスタンス）：

```
\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL\BACKUP\
```

SQL Server 2005 のデフォルトのパス：

```
\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL.<n>\MSSQL\Backup\
```

n: インスタンス番号

SQL Server 2005 のデフォルトのパス：（名前のないインスタンス）

```
\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL.1\MSSQL\Backup\
```

パス名は、SQL Server Management Studio、DbaMgr2k および Enterprise Manager にも表示されます。

SQL Server Management Studio

- ▶ SQL Server Management Studio を起動します。
- ▶ 「サーバへの接続」ダイアログで、「サーバの種類」、「サーバ名」および「データベースエンジン < インスタンス名 >」を選択します。
- ▶ 「接続」をクリックします。
- ▶ 次に、「オブジェクト エクスプローラ」で、エントリ「サーバオブジェクト」を選択します。
- ▶ 「バックアップ デバイス」をクリックします。
- ▶ 「ServerViewDBData」を選択してから、コンテキストメニューの「プロパティ」を選択します。
- ▶ ServerView データベースのバックアップファイルのパス名は「Destination」フィールドの下に表示されます。
- ▶ 完全バックアップモードを使用する場合、「バックアップ デバイス」→「ServerViewDBLog」→「プロパティ」で、トランザクションログのパス名を見つけることができます。トランザクションログのバックアップファイルのパス名は「バックアップ先」の下に表示されます。

リモートの SQL Server インスタンスの使用中で、インストール時に「SQL Server Backup Path」用に何も指定していない場合、以下を設定することができます。

- 「バックアップ デバイス」をクリックします。
- コンテキストメニューから「新しいバックアップ デバイス ...」を選択します。
- デバイス名に「ServerViewDBData」と入力します。
- 「OK」をクリックします。

完全バックアップモードを使用する場合、バックアップファイル「ServerViewDBLog」についてこれらの手順を繰り返します。

DbMgr2k

- ▶ DbMgr2k（デスクトップアイコン、クイック起動アイコン、またはスタートメニューを使用）を開始します。
- ▶ 「<SQL Server_Instance>」で接続します。
- ▶ エントリ「Backup devices」を選択します。
- ▶ バックアップファイルのパス名は「Physical Location」列に表示されます。

Enterprise Manager

- ▶ Enterprise Manager を起動します。
- ▶ 「<SQL Server_Instance>」→「Management」→「Backup」を選択します。
- ▶ バックアップファイルのパス名は「Physical Location」列に表示されます。

リモートの SQL Server インスタンスの使用中で、インストール時に「SQL Server Backup Path」用に何も指定していない場合、以下を設定することができます。

- 「Backup」をクリックします。
- コンテキストメニューから「New Backup Device...」を選択します。
- 「Name」の下に「ServerViewDBData」と入力します。
- 「OK」をクリックします。

完全 バックアップモードを使用する場合は、バックアップファイル「ServerViewDBLog」についてこれらの手順を繰り返します。

4.4.5 バックアップファイルの内容をチェックする

バックアップファイルに書かれているバックアップジョブの内容をチェックできます。また、バックアップファイルのデータレコードなどの番号を表示することもできます。

リモートの SQL Server インスタンスの使用中に、Management Studio または Enterprise Manager にバックアップメディア「ServerViewDBData」および「ServerViewDBLog」が表示されている場合は、このチェックを実行できます。そうでなければ、上記のように設定して、コンテンツチェックで処理することができます。

チェックには次のオプションがあります。

- SQL Server 2000 用に Enterprise Manager または DbaMgr2k を開始します。
 - ▶ SQL Server インスタンスをクリックします。
 - ▶ 「Backup (devices)」をクリックします。
 - ▶ バックアップデバイスを選択します。
 - ▶ コンテキストメニューの「Properties」を選択します。
 - ▶ 「(View) Contents」ボタンをクリックします。
- SQL Server Management Studio (Express) を起動します。
 - ▶ SQL Server インスタンスをクリックします。
 - ▶ 「サーバオブジェクト」をクリックします。
 - ▶ 「バックアップ デバイス」をクリックします。
 - ▶ バックアップデバイスを選択します。
 - ▶ コンテキストメニューで、「プロパティ」を選択します。
 - ▶ 「メディアの内容」タブを選択します。

Backup Device - ServerViewDBLog

Script ▾ Help

Selected page: General Media Contents

Media

Media sequence: Media 1, Family 1

Created on: 6/13/2007 8:24:22 PM

Media set

Name: ServerViewDB

Description: Backup of ServerViewDB log

Media family count: 1

Backup sets:

Name	Type	Component	Server	Database	Position	Date	Size	User Name
ServerViewDB L...		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	1	6/13/2007 8:24...	76288	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	2	6/13/2007 8:45...	1261568	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	3	6/13/2007 9:45...	143360	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	4	6/13/2007 10:4...	77824	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	5	6/13/2007 11:4...	11284	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	6	6/14/2007 12:4...	77824	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	7	6/14/2007 1:45...	11284	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	8	6/14/2007 2:45...	11284	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	9	6/14/2007 3:45...	11284	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	10	6/14/2007 4:45...	11284	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	11	6/14/2007 5:45...	11284	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	12	6/14/2007 6:45...	408528	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	13	6/14/2007 7:45...	275456	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	14	6/14/2007 8:45...	77824	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	15	6/14/2007 9:45...	77824	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	16	6/14/2007 10:4...	11284	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	17	6/14/2007 11:4...	11284	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	18	6/14/2007 12:4...	340882	NT AUTHORITY...
		Transaction Log	KANGASNEMI	ServerViewDB	19	6/14/2007 1:45...	208896	NT AUTHORITY...

i . 定期的に、バックアップ デバイス「ServerViewDBLog」に 1 週間分の記録があるか確認してください。1 週間を超えると「ServerViewDBLog」は上書きされます。上書きされない場合、バックアップジョブ「JobServerViewLongInterval」は実行されません。この場合、*.bak ファイルを減らしてください。

ログファイル *ServerViewDB_log.LDF* が大きくなりすぎた場合、[184 ページの「ServerViewDB_log.LDF ファイルの肥大化」の項の説明に従って、サイズを小さくします。](#)

自動バックアップとファイルサイズ縮小を常時実行するには、[152 ページの「ジョブの実行要件」の項](#) およびその後の項で説明している手順に従います。

4.5 ServerView データベース のリストア

エラーのイベントで、バックアップから ServerView データベースをリストアすることができます。現在の ServerView データベースまたはエラーが発生している ServerView データベースは削除しないでください。リストア時にエラーを検出すると、最初からリストアを再開する必要があります。

リストアでは、データベースバックアップで最初に読み込みが行われ、1 つ以上のトランザクションログが利用可能な場合はバックアップされます。

ServerViewDB.ini ファイルの「DbBackupMode」エントリが完全に設定されている場合、トランザクションログのバックアップを利用できます。

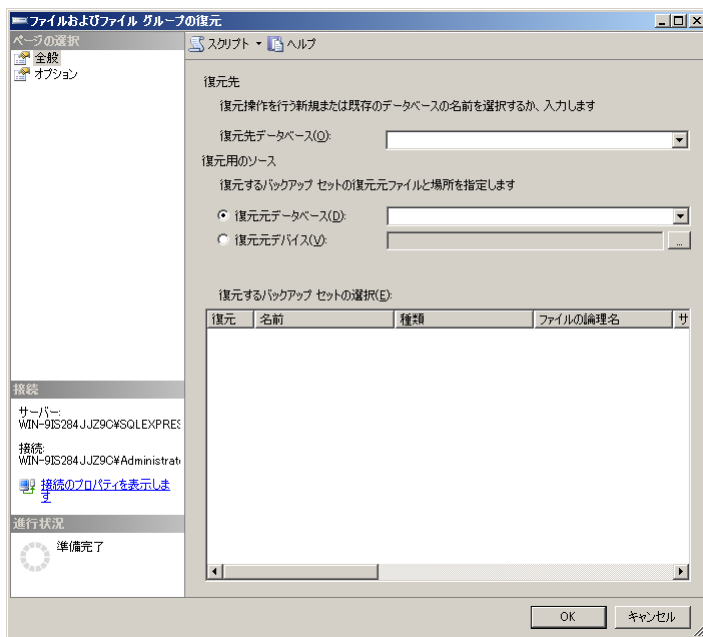
データバックアップのディレクトリに関する情報は、[159 ページの「バックアップファイルがあるかどうかをチェックする」の項](#)をご覧ください。

4.5.1 SQL Server Management Studio によるリストア

ServerView データベースおよび（利用可能な場合）トランザクションログをリストアするには、以下を実行します。

1. ServerView データベースへのアクセスを制限します。
 - ▶ SQL Server Management Studio を起動します。
 - ▶ SQL Server インスタンスと接続し、「データベース」→「ServerViewDB.」を選択します。
 - ▶ コンテキストメニューの「プロパティ」を選択します。
 - ▶ 「オプション」ページを選択し、「アクセス権限」でエントリ「RESTRICTED_USER」を選択します。「OK」をクリックしてから、「YES」をクリックします。
2. データベースのバックアップからリストアします。
 - ▶ 「データベース」をクリックしてから、コンテキストメニューの「ファイルおよびファイル グループの復元…」を選択します。

- ▶ 「ファイルおよびファイルグループの復元」ウィンドウが開きます。



- ▶ 「全般」ページで、「復元先データベース」フィールドに名前「ServerViewDB」または「msdb」を入力するか、リストから名前を選択します。
- ▶ 「復元元デバイス」を選択します。
- ▶ 「...」ボタンをクリックします。
- ▶ 適切な格納場所からデータベースバックアップ「ServerViewDBData.bak」を追加し、「OK」をクリックします。
- ▶ 格納するデータベースバックアップを選択します。
- ▶ 「復元するバックアップセットの選択」で、「復元」列のボックスをクリックします。
- ▶ 「オプション」ページに切り替えます。
- ▶ 復元オプション：「既存のデータベースを上書きする」をチェックします。

- ▶ トランザクションログバックアップ *ServerViewDBLog.bak* を利用できない場合は、「OK」をクリックします。利用できる場合は、復元状態：「データベースは操作不可能状態のままで、コミットされていないトランザクションはロールバックしない。別のトランザクション ログは復元できます。」を選択します。
- ▶ 「OK」をクリックし、再度「OK」をクリックします。

データベースのリストアが開始されます。「オブジェクト エクスプローラ」に、「ServerViewDB (リストア中 ...)」と表示されます。

3. 利用可能な場合は、トランザクションログをリストアします。

- ▶ 「データベース」をクリックしてから、コンテキストメニューの「ファイルおよびファイル グループの復元 …」を選択します。
- ▶ 「ファイルおよびファイルグループの復元」ウィンドウが開きます。
- ▶ 「全般」 ページの「復元先データベース」フィールドで、リストから名前「ServerViewDB」を選択します。
- ▶ 「復元元デバイス」を選択します。
- ▶ 「...」 ボタンをクリックします。
- ▶ 適切な格納場所からトランザクションログファイル「ServerViewDBLog.bak」を追加し、「OK」をクリックします。
- ▶ 格納するデータベースバックアップを選択します。

「復元するバックアップセットの選択」で、「復元」列のボックスをクリックします。
- ▶ 「オプション」ページに切り替えます。
- ▶ 復元オプション：「既存のデータベースを上書きする」をチェックします。

さらにトランザクションログをリストアする場合、オプション：「データベースは操作不可能状態のままで、コミットされていないトランザクションはロールバックしない。」を選択します。

最後のトランザクションログをリストアする場合、オプション：「コミットされていないトランザクションをロールバックして、データベースをしよう可能な状態にする。別のトランザクションは復元できません。」を選択します。

- ▶ 「OK」をクリックしてから、もう一度「OK」をクリックします。

最後のトランザクションログをリストア後、データベースのステータスを通常に戻してください。「オブジェクト エクスプローラ」では、アドオン「(リストア中 ...)」は表示されません。

サービス「ServerView Services」および「ServerView Download Service」を再起動します。

- ▶ 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
- ▶ 適切なサービスを選択し、コンテキストメニューの「再起動」を選択します。

これで、Operations Manager を使用して、再び ServerView データベースにアクセスできるようになります。

4.5.2 Enterprise Manager によるリストア

ServerView データベースおよび（利用可能な場合）トランザクションログをリストアするには、以下を実行します。

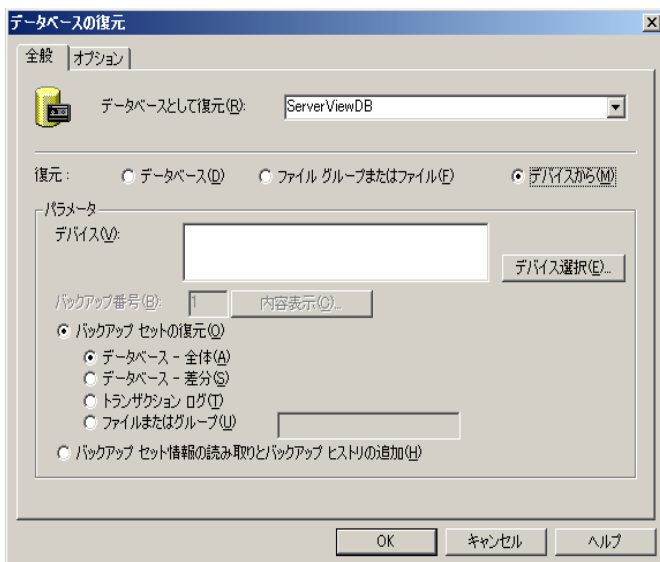
1. ServerView データベースへのアクセスを制限します。

- ▶ Enterprise Manager を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「データベース - ServerViewDB」を選択します。
- ▶ コンテキストメニューを表示し、「プロパティ」を選択します。
- ▶ 「オプション」タブを選択し、「アクセス制限」を選択してから、「db_owner」、「dbcreator」または「sysadmin」のメンバを選択します。

2. 以下のようにデータベースのバックアップからリストアします。

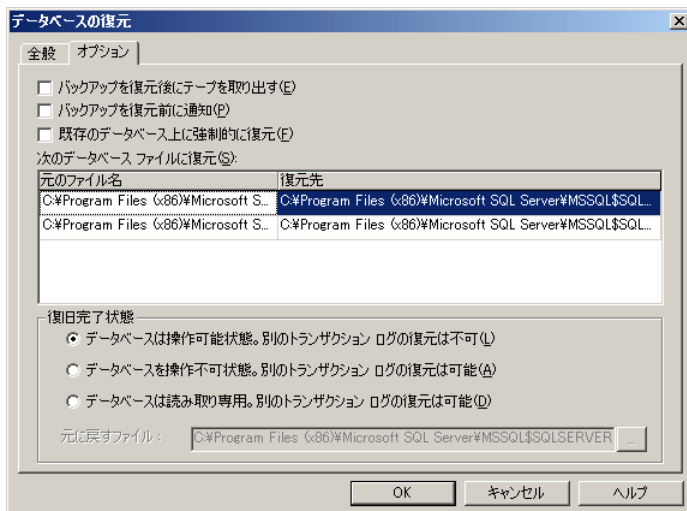
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックします。
- ▶ 「データベース」をクリックし、コンテキストメニューの「全てのタスク」の「データベースの復元」を選択します。

「データベースの復元」ウィンドウが開きます。



- ▶ 「全般」タブで、「データベースとして復元」フィールドに名前「ServerViewDB」または「msdb」を入力するか、リストから名前を選択します。
- ▶ オプション「デバイスから」を選択します。
- ▶ オプション「データベース - 全体」を選択します。
- ▶ 「デバイス選択 ...」をクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、「追加 ...」をクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、ファイル *ServerViewDBData.bak* または *msdb.Data.bak* か、バックアップデバイス「ServerViewDBData」または「msdbData」を選択し、「OK」→「OK」をクリックします。

- ▶ 「オプション」タブに切り替えます。



- ▶ トランザクションログバックアップ *ServerViewDBLog.bak* を利用できない場合、オプション「データベースは操作可能状態 ...」を選択します。

利用できる場合は、オプション「データベースを操作不可状態。別のトランザクションログの復元は可能」を選択します。

- ▶ 「復元先」列のパス名をチェックします。ServerView データベースで以下のエントリを確認します。

```
<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB.mdf
<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB_log.LDF
```

- ▶ 「全般」タブに切り替えます。
- ▶ 「内容表示」ボタンをクリックします。
- ▶ リストアするデータベースバックアップを選択します。
- ▶ 「OK」→「OK」をクリックします。

データベースのリストアが開始されます。Enterprise Manager にメッセージ「ServerViewDB (ローディング)」が表示されます。

3. 利用できる場合は、トランザクションログをリストアします。

- ▶ 「全般」タブで、「データベースとして復元」フィールドに名前「ServerViewDB」を入力するか、リストから名前を選択します。
- ▶ オプション「デバイスから」を選択します。
- ▶ オプション「トランザクションログ」を選択します。
- ▶ オプション「デバイス選択 ...」をクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、「追加 ...」ボタンをクリックします。
- ▶ 表示されたウィンドウで、ファイル *ServerViewDBLog.bak* またはバックアップデバイス「ServerViewDBLog」を選択してから、「OK」→「OK」をクリックします。
- ▶ 「内容表示」をクリックします。
- ▶ 関連する（データベースに適合する）列を選択します。
- ▶ 「OK」をクリックします。
- ▶ 「オプション」タブに切り替えます。
- ▶ 複数のトランザクションログをリストアする場合、オプション：「データベースを操作不可能状態。別のトランザクション ログの復元は可能」を選択します。または、最後のトランザクションログのみをリストアする場合、オプション：「データベースは操作可能状態。別のトランザクションログの復元は不可」を選択します。
- ▶ 「全般」タブを選択してから、「OK」をクリックします。
- ▶ オプション：「データベースを操作不可能状態。別のトランザクションログの復元は可能」を選択した場合、トランザクションログをリストアするたびに手順 3 を繰り返します。

最後のトランザクションログをリストア後、データベースのステータスを通常に戻してください。Enterprise Manager のロードに関するメッセージが表示されなくなります。

リストア後に、ServerView データベースへのアクセスは自動的に再度有効になります。

4.5.3 DbMgr2k によるリストア

ServerView データベースおよびトランザクションログをリストアするには、以下を実行します。

1. ServerView データベースへのアクセスを制限します。

- ▶ DbMgr2K を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「Databases」→「ServerViewDB」を選択します。
- ▶ コンテキストメニューを表示し、「プロパティ」を選択します。
- ▶ ウィンドウで、「Options」アイコンを選択します。
- ▶ プロパティウィンドウで、ボタンセクションの「Access granted to」の下にあるエントリ「Members of db_owner」を選択します。
- ▶ 「Status」フィールド（最上部のセクション）の値を「dboUseOnly」に変更します。
- ▶ 「Save」をクリックして、エントリを保存します。

2. データベースバックアップを表示します。

- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、エントリ「Backup devices」を選択します。
- ▶ 右側のフィールドで、「ServerViewDBData」をクリックしてから、コンテキストメニューから「Properties」→「Contents」を選択します。

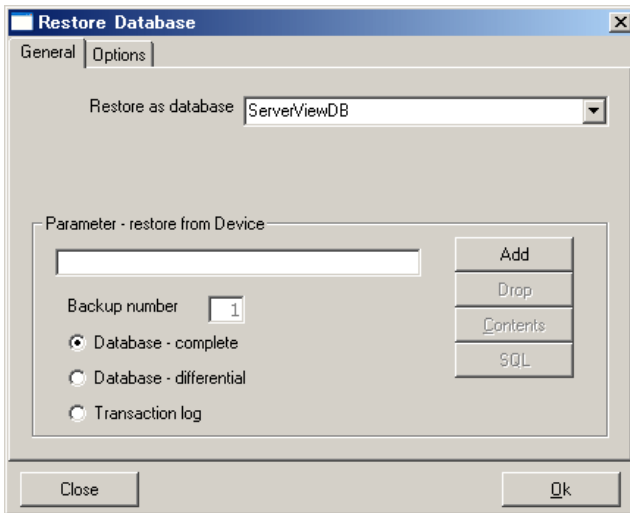
データベースバックアップが表示されます。バックアップを作成すると、「BackupFinishDate」列が表示されます。

利用できる場合は、トランザクションログ「ServerViewDBLog*」の場合、同じにします。

3. 以下のようにデータベースのバックアップからリストアします。

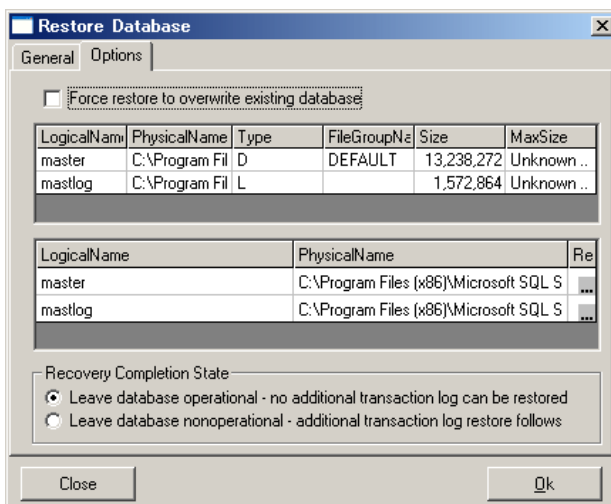
- ▶ SQL Server インスタンスをクリックします。
- ▶ 「Databases」をクリックしてから、コンテキストメニューの「Restore Database」を選択します。

「Restore Database」ウィンドウが開きます。



- ▶ 「General」タブで、「Restore as database」フィールドに名前「ServerViewDB」または「msdb」を入力するか、リストから名前を選択します。
- ▶ オプション「Database - complete」を選択します。
- ▶ 「Parameter - restore from Device」でバックアップ場所を選択します。
 - ▶ 「Drop」をクリックしてから、「Add」をクリックします。
 - ▶ 表示されたウィンドウで、*ServerViewDBData.bak*または*msdbData.bak*ファイルか、バックアップデバイス「ServerViewDBData」または「msdbData」を選択します。
- ▶ 「OK」をクリックします。

- ▶ 「Options」 タブに切り替えます。



- ▶ トランザクションログバックアップ *ServerViewDBLog.bak* を利用できない場合はオプション「データベースは操作可能状態 ...」を選択します。利用できる場合は、オプション「データベースは操作不可能状態。別のトランザクション ログの復元は可能」を選択します。
- ▶ 2 番目のテーブルのパス名をチェックします。「PhysicalName」で ServerView データベースの次のエントリを表示可能にしてください。

```
<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB.mdf
<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB_log.LDF
```

- ▶ 「General」 タブに切り替えます。
- ▶ 「Contents」 をクリックします。
- ▶ リストアするデータベースバックアップを選択します。
- ▶ 「Apply」 をクリックします。

データベースバックアップがリストアされます。

4. 利用できる場合は、トランザクションログをリストアします。

- ▶ 「General」 タブで、「Restore as database」フィールドに名前「ServerViewDB」を入力するか、リストから名前を選択します。
- ▶ オプション「Transaction log」を選択します。

- ▶ 「Parameter - restore from Device」でバックアップ場所を選択します。
 - ▶ 「Drop」をクリックしてから、「Add」をクリックします。
 - ▶ 表示されたウィンドウで、*ServerViewDBLog.bak* ファイルまたはバックアップデバイス「ServerViewDBLog」を選択します。
 - ▶ 「OK」をクリックします。
- ▶ 「Contents」をクリックします。
- ▶ 「BackUp Media Content」ウィンドウで、関連する（データベースに適合する）列を選択します。
- ▶ 「Apply」をクリックします。
- ▶ 「General」タブの「Backup number」の値は、「BackUp Media Content」ウィンドウの「Position」の値が反映されます。
- ▶ 「Options」タブを選択します。
- ▶ 複数のトランザクションログをリストアする場合、オプション「Leave database nonoperational - additional transaction log restore follows」を選択しますまたは、最後のトランザクションログのみをリストアする場合、オプション「Leave database operational - no additional transaction logs can be restored」を選択します。
- ▶ 2 番目のテーブルのパス名をチェックします。「PhysicalName」で ServerView データベースの次のエントリを表示可能にする必要があります。

```
<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB.mdf  
<Server_Installation_Pathname>\Data\ServerViewDB_log.LDF
```
- ▶ 「General」タブを選択してから、「OK」をクリックします。
- ▶ オプション「Leave database nonoperational - additional transaction log restore follows」を選択した場合、トランザクションログをリストアするたびに手順 4 を繰り返します。
- ▶ 最後に、「Close」をクリックします。

リストア後に、ServerView データベースへのアクセスは自動で有効になります。

4.5.4 データベースバックアップのチェック

定期的に、Enterprise Manager、DbMgr2k、SQL Server Management Studio でバックアップをチェックすることができます。Windows でリストアのセクション（[167 ページ](#)、[171 ページ](#)、[164 ページ](#)）の指示に従いますが、以下の変更があります。

- ▶ 「全般」タブで、データベースとして「復元」フィールドに「RECOVERYTEST」などの名前を入力します。
- ▶ 「オプション」タブで、以下のように復元先列のパス名を変更します。

ServerViewDB.mdf を *RecoveryServerViewDB.mdf*

ServerViewDB_log.LDF を *RecoveryServerView_log.LDF*

関連するセクションで説明したように他のすべて入力を行います。名前「RECOVERYTEST」を付けてデータベースを保存する必要があります。これは次のようにチェックできます。

- ▶ SQL Server インスタンスをクリックし、「データベース」を選択します。
- ▶ コンテキストメニューの「最新情報に更新」を選択します。

データベース「RECOVERYTEST」をリストに表示する必要があります。

さらに、以下のようにデータベース「RECOVERYTEST」を削除できます。

- ▶ データベースを選択してから、コンテキストメニューの「削除」を選択します。

4.6 ローカルからリモート SQL Server への ServerView データベースの移動

4.70 以上の ServerView Operations Manager では、リモート SQL サーバを ServerView データベースとしてインストールできます。

この機能は新規インストール、または 4.20 からのアップデートインストールでのみ実行できます。ローカルの SQL サーバを ServerView データベースとしてインストールされている ServerView Operations Manager からのアップデートインストールはサポートされていません。しかし、ユーザは以下に記載の構成を実行できます。

データベースの移動を行う場合は、既存の ServerView Operations Manager を少なくとも 4.71 以降にする必要があります。



この説明は、ServerView Operations Manager のインストールのみに対応しています。インストールされている他のコンポーネント (ServerView アップデート マネージャ、ServerView Deployment Manager) は移動後に必ず再インストールする必要があります。

ローカル管理用サーバ / パソコンとリモートサーバは両方とも同じドメインに所属する必要があります。また、「Domain Users group」には少なくとも 1 つのユーザアカウントが必要です。

4.6.1 リモートサーバの要件

SQL Server のバージョンは、使用する両システムで同じであるか、ローカルサーバよりもリモートサーバの方が上である必要があります。

リモートサーバでは、[41 ページの "要件"](#) で記載されているように処理します。

4.6.2 構成手順

ServerView データベースをローカル管理用サーバ/パソコンからリモートでインストールした SQL Server に移動するには、以下を実行します。

1. ローカル ServerView Operations Manager をアップグレードしてください。
ローカル管理者として、管理用権限のあるアカウントでログオンし、ローカル ServerView Operations Manager を最新版にアップグレードします。リモートでのインストールは、同じバージョンを使用する必要があります。そうでなければ、データベースのスキーマが適合しません。
2. ServerView データベースにアクセスする、すべてのアプリケーションおよびサービスを停止します。
 - 「ServerView Services」
 - 「ServerView Download Service」
3. 現在のローカルインストールを、以下のフォルダに保存します。アンインストールと再インストールを後で行う必要があるため、このデータのコピーが必要です。
 - `<wwwroot>\ServerView\Archive*`
 - `<wwwroot>\ServerView\SnmpArchive\ArchiveTasks`
 - `<wwwroot>\ServerView\SnmpExport\ExportedData\`
 - `<wwwroot>\ServerView\SnmpExport\Tasks`
 - `<wwwroot>\ServerView\Download\Tasks`
 - `<scripts>\ServerView\common\mibs`
4. ローカル SQL Server インスタンスから ServerView データベースの接続を解除してコピーします。
現在の SQL データベースはローカルサーバからコピーする必要があります。以下を実行します。
 - ▶ ServerView データベースファイルのパスを指定します。データベースのコンテキストメニューで「データベース」→「ServerViewDB」→「プロパティ」→「データファイル」または「ファイル」を選択すると、SQL Server Enterprise Manager または SQL Server Management Studio にパスが表示されます。
 - ▶ 次の機能を備えた対応する SQL Server 管理ツールを使用してデータベースの接続を解除します。
 - 「全てのタスク」→「データベースのデタッチ (SQL Server Enterprise Manager)」
 - 「タスク」→「デタッチ (SQL Server Management Studio)」

- ▶ データベースファイル *ServerViewDB.mdf* および *ServerViewDB_log.LDF* はインスタンスから削除され、コピーの準備ができます。
 - ▶ データベースファイルを別のフォルダにコピーします。後で、リモート SQL Server インスタンスで ServerView データベースを置換する際に、これらのファイルが必要になります。
5. ローカル ServerView Operations Manager をアンインストールします。
ローカルでインストールされた ServerView Operations Manager は管理用サーバ/パソコンでアンインストールする必要があります。エラーメッセージがない場合に正常に動作させるため、ServerView データベースを一時的に元のパスのインスタンスに再接続する必要があります。データベースのコンテキストメニューの対応する SQL Server 管理ツールを使用してデータベースを接続します。データベースファイル (*ServerViewDB.mdf*) への現在のパスを、以下のダイアログで指定する必要があります。
- 「全てのタスク」→「データベースのアタッチ」(SQL Server Enterprise Manager) または、
 - 「アタッチ」(SQL Server Management Studio)
- アンインストールを実行して、[116 ページの「Operations Manager ソフトウェアのアンインストール」](#)の項を参照してください。
6. リモート SQL Server による新規インストール
管理用サーバ/パソコンで ServerView Operations Manager の新規インストールを開始し、オプション「Use existing remote SQL Server」を選択します。[68 ページの「管理端末でのその他の手順」](#)に記載されているように実行します。
7. リモート SQL Server で ServerView データベースを置換します。
インストール後に、リモートサーバの ServerView データベースはローカルインストールで前にコピーしたデータベースと置換する必要があります。以下を実行します。
- ▶ ServerView データベース、特にサービス「ServerView Services」と「ServerView Download Service」にアクセスできる管理用サーバ/パソコンおよびサービスですべてのアプリケーションを停止します。
 - ▶ リモート SQL Server で SQL Server Management Studio または SQL Server Enterprise Manager を開き、リモートインスタンスに接続します。
 - ▶ ServerView データベースの現在のパスを取得します。
 - ▶ ローカルデータベースでの上記の説明のとおり、リモート SQL Server にある既存のデータベースの接続を解除します。

4.6 ローカルからリモート SQL Server への ServerView データベースの移動

- ▶ データベースファイルをローカルサーバからコピーした該当ファイルと置換します。
 - ▶ データベースに再接続します。
8. 移行時にデータベースが SQL Server 2000 から SQL Server 2005 にアップグレードされた場合、アップグレードされたデータベースで以下のコマンドを実行することをお勧めします（Query Analyzer または Management Studio）。
- DBCC UPDATEUSAGE ('ServerViewDB')*
9. リモート SQL Server インスタンスでデータベースをバックアップします。
10. 前のインストール（手順 3 で指定）で保存されたフォルダをローカル管理用サーバ/パソコンの該当するフォルダにコピーします。
11. 最後にローカル管理用サーバ/パソコンのサービス「ServerView Services」および「ServerView Download Service」を再起動します。

4.7 負荷分散の変更

ServerView を使用して受けるシステム負荷、または、同時実行のジョブ数を変更することができます。

以下のサービスは、同時実行の数を *ini* ファイルで定義されてた数だけジョブを開始します。

```
ArchiveService    <scripts>\ServerView\SnmpArchive\SVArchiveServer.ini
DownloadService  <scripts>\ServerView\Download\DownloadServer.ini
ExportService     <scripts>\ServerView\SnmpExport\ExportServer.ini
InventoryService  <scripts>\ServerView\SnmpInventory\SVInventoryServer.ini
```

これらの構成ファイルはすべてセクション「GLOBALS」で変数「ConcurrentJobsAllowed」を保持します。その場所で得られた数は、開始される同時実行ジョブの数を示しています。

例

すべてのサーバのアーカイブが有効で、サーバリストには 100 の管理可能なサーバがあります。ConcurrentJobsAllowed が *SVArchiveServer.ini* で 30 に設定されている場合、同時に有効化するサーバは 30 あります。

30 の開始されたジョブの 1 つのサーバについてアーカイブが完了すると、別のサーバのアーカイブが開始されます。これは、100 のサーバがアーカイブされるまで、繰り返されます。

「ConcurrentJobsAllowed」の現在のデフォルト値は以下のとおりです。

SVArchiveServer.ini	30
DownloadServer.ini	19
ExportServer.ini	30
SVInventoryServer.ini	30



1. ConcurrentJobsAllowed の数を変更する前に

ConcurrentJobsAllowed の数を変更する前に、各サービスのジョブが実行されていないことを確認してください。「ArchiveService」、「DownloadService」、「ExportService」の場合、タブ設定の各 GUI で簡単に確認することができます。タスクのステータスを示す青色の矢印がある場合、そのサーバのジョブは実行中です。

「InventoryService」の場合、「SnmplInventory」のプロセスが実行されているかどうかを、プロセスリストで確認してください。Windows の場合、タスクマネージャでプロセスリストを表示できます。

2. MSDE 2000 および同時実行のジョブ

Windows でのデータベースサーバとして MSDE 2000 を使用しており、SQL Server ログファイルの同時実行違反のメッセージが表示されている場合、「ConcurrentJobsAllowed」の数を減らすことにより、同時実行違反を解決することができます。

以下の方法をお勧めします。

- a) Inventory Service の「ConcurrentJobsAllowed」の数を「10」に減らします。
- b) 「ArchiveService」、「DownloadService」、「ExportService」、「InventoryService」のタスクを同時に開始しないようにします。
- c) 他のサービスの場合、「ConcurrentJobsAllowed」の数を減らします。

3. 同時実行ジョブの数を減らすことによる影響

同時実行ジョブの数を減らすことによる影響として、一方ではシステムの負荷が減り、他方ではサーバのグループでタスクを完了するのに時間が掛かります。

4.8 エラー診断

ServerView データベースでエラーが発生する場合、エラー診断のため、各種ファイルおよび情報を、富士通のカスタマヘルプディスクに送信することができます。

4.8.1 ログファイル

ServerView データベースのインストール時にエラーが発生する場合、以下のログファイルを採取してください。

- %TEMP%\servview.log
- <DatabaseLog>\svsqldb.log
- %windir%\ServerViewDB.ini

インストールエラーが Wise SQL Scripts または bcp によるファイルのインポート中に発生する場合、<DiagnosePath> ディレクトリを圧縮してください。ServerView を ServerView データベースに接続処理中にエラーが発生する場合、<SVCommon> ディレクトリにあるログファイル *.log を採取してください。

関連する環境変数（%TEMP% および %windir%）をその値で置換します。すべての Windows OS では、変数の値は *set* コマンドによるコマンドプロンプトに表示されます。

コマンドプロンプトに以下のコマンドを入力して、角括弧にワイルドカードを取得します。

```
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr /B DatabaseLog
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr /B DiagnosePath
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr /B SVCommon
```

4.8.2 エラーイベントの重要な情報

エラーイベントでは、以下の情報が重要です。

- Operations Manager のバージョン

「ソフトウェア」のエントリ「Fujitsu ServerView Operations Manager」をクリックしてから、サポート情報をクリックします。

- OS のバージョン

Windows エクスプローラを開いて、ヘルプメニューから「バージョン情報」を選択します。

- OS の言語

- インストールされているデータベース（SQL Server 2008/2005/2000 または MSDE 2000）

入力プロンプトで以下のコマンドを入力します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E
select @@version
GO
```

以下のような詳細が表示されます。

```
Microsoft SQL Server 2005 - 9.00.3042.00 (Intel X86)
Feb 9 2007 22:47:07
Copyright © 1988-2005 Microsoft Corporation
Express Edition on Windows NT 5.2 (Build 3790: Service Pack
1)
```

- インストールされている言語

入力プロンプトで以下のコマンドを入力します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E
select @@language
GO
```

4.8.3 ServerViewDB_log.LDF ファイルの肥大化

150 ページの「ServerView データベースのバックアップ」の項に記載されているように、完全バックアップモードのバックアップジョブを定期的に行なわなかったり一定期間実行しなかったりすると、トランザクションログファイル *ServerViewDB_log.LDF* のサイズが非常に大きくなることがあります。このような場合は、手動でサイズを小さくする必要があります。



iWeÄ バックアップモードのバックアップジョブがないことは *ServerViewDB_log.LDF* のサイズがこれ以上大きくならないことを意味します。

以下を実行します。

1. *ServerViewDB_log.LDF* file ファイルのサイズをチェックします。

ファイルは以下のディレクトリにあります。

- SQL Server 2000 エディションの場合
`%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server\MSSQL$<Instance_name>\Data\`
- SQL Server 2008/2005 エディションの場合
`%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server\MSSQL.<n>\MSSQL\Data\`

ServerViewDB_log.LDF ファイルが *ServerViewDB.mdf* ファイルより大きい場合、圧縮する必要があります。

2. ファイル *ServerViewDB_log.LDF* を圧縮します。

- サービス「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を停止します。
- 該当する場合、データベース管理プログラムを閉じます。
- 「dbcc_shrink.sql」スクリプトを呼び出します。

Operations Manager バージョン 4.91 では、圧縮用に「dbcc_shrink.sql」スクリプトが用意されています。スクリプトは `<DllPath>\Tools` ディレクトリにあります。このディレクトリには、ドキュメント *Shrink_ServerViewDB_log.LDF.doc* も格納されており、この問題に関して必要に応じて更新された詳細な説明があります。

スクリプトを実行するには、入力プロンプトに以下のコマンドを入力します。

```
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr Server_instance
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr -i DllPath=
cd /d <DllPath>\Tools
osql -S <Server_instance> -E -i dbcc_shrink.sql -n
```


- ファイルのサイズを再度チェック（1を参照）して、*ServerViewDB_log.LDF* ファイルが *ServerViewDB.mdf* ファイルよりも小さいことを確認します。
- サービスを起動します。
 - ▶ SQL Server エージェント「SQLSERVERAGENT」（SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 以外）を起動します。
 - ▶ 開始タイプを「自動」に設定します（SQL Server 2008 Express/2005 Express および MSDE 2000 以外）。
 - ▶ サービス「ServerView Services」と「ServerView Download Service」を開始します。
 - ▶ そして、バックアップジョブ *JobServerViewLongInterval* を開始します。

バックアップジョブ *JobServerViewLongInterval* はデータベースとトランザクションログのバックアップを作成し、バックアップファイル *ServerViewDBData.bak* および *ServerViewDBLog.bak* のサイズを小さくします。

SQL Server 2008 Express/2005 Express と MSDE 2000 の場合、対応する SQL Server エージェントと他のすべての SQL Server のエディションについて、バックアップジョブは Windows タスクスケジューラで実行されます。

3. 推奨事項

完全 バックアップモードでは、ServerView バックアップジョブが正常に実行されていることをチェックします。詳細情報については、[150 ページの「ServerView データベースのバックアップ」の項](#)を参照してください。

定期的に実行されるバックアップジョブ *JobServerViewHourly* により、*ServerViewDB_log.LDF* のサイズが大きくなりすぎないようにします。このジョブはファイル内にある毎時実行する際に不要な部分を削除します。

4. 追加のトラブルシューティング

バックアップジョブのエラーメッセージは *ERRORLOG.** と呼ばれるログファイルに記載されています。これらのファイルは、使用する SQL Server の LOG ディレクトリにあります。For MSDEMSDE 2000 の場合、ファイルは以下のディレクトリに格納されています。

%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server\MSSQL\$SQLSERVERVIEW\LOG\.

ログファイルに以下のメッセージが表示される場合、適切な対策を行う必要があります。

```
"The backup data in 'ServerViewDBLog' is incorrectly
formatted. Backups cannot be appended, but existing backup
sets may still be usable."
```

バックアップを新規作成する場合、既存のバックアップデバイスのフォーマットを整える必要があります。以下の場合、再フォーマットする必要があります。

1. バックアップが中断された。
2. ディスクエラーが発生した。
3. 使用可能なディスク領域が十分ない。
4. バックアップパスを検出できなかった。
5. バックアップ作成時に書き込みエラーが発生した。

バックアップの再フォーマット：

- ▶ 原因を検出し、対処します。
すべての可能性をチェックします（上記を参照）。1. および 2. の場合：追加情報について、イベント表示でアプリケーションとシステムログをチェックします。
- ▶ 入力プロンプトに以下のコマンドを入力して、ServerView バックアップファイルのバックアップパス <DBBackupPath> を検出します。

```
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr DBBackupPath
type %windir%\ServerViewDB.ini | findstr Server_Instance
osql | sqlcmd -S <Server_Instance> -E
```

SQL Server 2008/2005 で *sqlcmd* を使用している場合。

- ▶ バックアップファイルをフォーマットします。

```
BACKUP DATABASE ServerViewDB TO DISK =
'<DBBackupPath>ServerViewDBData.bak' WITH FORMAT,
MEDIANAME='ServerViewDB'
GO
BACKUP LOG ServerViewDB TO DISK =
'<DBBackupPath>ServerViewDBLog.bak' WITH FORMAT,
MEDIANAME='ServerViewDB'
GO
quit
```

- ▶ ServerView バックアップジョブを正常に実行していることを確認し、[150 ページの「ServerView データベースのバックアップ」の項](#)を参照してください。

4.8.4 ServerView データベースのエクスポート

エラー診断の場合、ServerView データベースのコピーおよびトランザクションログをサービスセンターに送信する必要がある場合があります。

このまれなイベントでは、サービス「MSSQL\$SQLSERVERVIEW」または「MSSQLSERVER」を停止して、データベースをオフラインに切り替えることをお勧めします（SQL Server 2008/2005 の場合、サービス名は「SQL Server (SQLSERVERVIEW)」または「SQL Server (MSSQLSERVER)」）。これらのサービスの停止後、誰もデータベースにアクセスできなくなります。したがって、このセクションで説明された手順は、毎日繰り返し使用されることに適していません。しかし、エラー解析のために、ServerView データベースファイルやトランザクションログファイル（拡張子 *.mdf*）をインポートすることは、データベースのバックアップファイル（拡張子 *.bak*）から復元するよりも管理しやすいです。

これには、以下の手順が必要です。

- エラーに関する重要な情報を見つけ出し、[183 ページの「エラーイベントの重要な情報」の項](#)を参照してください。
- ServerView データベースおよびトランザクションログのディレクトリを検出します。

Enterprise Manager、Dbamgr2k、SQL Server Management Studio の場合

- ▶ Enterprise Manager または Dbamgr2k を起動します。
- ▶ SQL Server インスタンスを選択します。
- ▶ 「データベース」→「ServerViewDB」を選択してから、コンテキストメニューの「プロパティ」を選択します。
- ▶ 「データファイル」タブをクリックします。

「場所」列にファイル *ServerViewDB.mdf* のパス名が含まれています。SQL Server Management Studio の「パス」列には、パス名が含まれています。

- ▶ Enterprise Manager または Dbamgr2k で、「トランザクション ログ」タブに切り替えます。

「場所」列にファイル *ServerViewDB_log.LDF* のパス名が含まれています。

osql の場合

- ▶ osql を起動して、以下のコマンドを入力します。

```
use ServerViewDB
exec sp_helpfile
GO
```

「filename」列にはパス名が表示されます。

- サービス「SQL Server <DbService>」を停止します。「DbService」の下にある構成ファイル *ServerViewDB.ini* でサービス名が検出できます。
- Service Center にファイル *ServerViewDB.mdf* および *ServerViewDB_log.LDF* をトランザクションログと一緒に送信します。
- サービス「SQL Server <DbService>」を開始します。

5 コマンドラインインターフェイス

5.1 コマンドラインによる Operations Manager のインストール

メニューによるインストールだけでなく、Windows のコマンドラインによっても、Operations Manager および ServerView イベントマネージャをインストールできます。ServerView Suite DVD 1 をセットし、Operations Manager のインストールパッケージを解凍するように指定してください。なお、ファイルを出力するディレクトリを指定することもできます。

自動インストールの場合、以下の各オプションのデフォルト値について定義する構成ファイル (*silent_install.ini*) があります。

- インストールパス
- Web サーバ
- ポート番号
- ホスト名
- IP アドレス

このファイルを編集して要件に合わせて調整することができます。この構成ファイルによって、インストールダイアログが表示されないサイレントインストールを行うことができます。

インストール中に、以下の条件を満たすインスタンスがシステムにインストールされているかどうか、チェックを行います。

- MSDE 2000 (Service Pack 4)、または SQL Server 2005 Express が SQL Server のインスタンス名「SQLSERVERVIEW」で存在する。
- 別のインスタンス名で SQL Server 2008/2005/2000 Standard/Enterprise/Workgroup Edition が存在する。

条件を満たすインスタンスが見つからない場合、Windows 2003 の場合は MSDE 2000 が、Windows 2008 の場合は SQL Server 2005 (Express) がインストールされます。

サイレントインストール

サイレントインストールを実行するには、コマンドラインに切り替えます。以下の呼び出しで自動インストールを開始します。

start /wait serverview.exe /s

インストール完了後、アプリケーションイベントログの Windows イベント表示でインストールが正常に完了したかどうかを確認します。インストールログは %TEMP%\MSIsvinst.log ファイルで確認できます。



Operations Manager は ODBC V3.51 (Service Pack 1) のダイナミックリンクライブラリと一緒にインストールされます。これらに含まれる DLL より最新のバージョンがシステムにインストールされている場合、異なるバージョンに伴うエラーメッセージが表示される可能性があります。この問題が発生した場合には、Microsoft のサポート情報を調べ、記事 ID Q170769、PRB: "ODBC Resource DLL is a Different Version Than..." というエラーを確認してください。この記事は、問題についての概要を説明し、その解決方法を示しています。記事は以下の Web で検索できます。

<http://support.microsoft.com/support/kb/articles/Q170/7/69.asp>.

5.2 osql によるデータベース管理 (Windows)

SQL Server 2000 または MSDE 2000 は、エンタープライズマネージャまたは DbaMgr2K だけでなく、osql でも管理できます。SQL Server 2000 または MSDE 2000 がインストールされている場合、同様に osql がインストールされます。osql を使用して、以下の機能を実行することができます。

- MSDE 2000 の製品バージョンおよび言語をチェックする
- バックアップのタイミングをチェックおよび指定する
- ジョブの属性を変更してスケジュール設定を変更する
- ServerView データベースをリストアする

MSDE 2000 の製品バージョンおよび言語をチェックする

以下のようにして MSDE 2000 の製品バージョンおよび言語をチェックすることができます。

- ▶ 入力プロンプトに切り替えます。
- ▶ 以下のコマンドで osql を起動します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E  
xp_msver  
GO
```

必要な情報は 2 *ProductVersion* および 3 *Language* というエントリです。

quit コマンドを使用して osql を終了します。

バックアップジョブの設定のタイミングをチェックおよび指定する

以下のようにして自動的に実行されるバックアップジョブの設定のタイミングをチェックできます。

- ▶ コマンドプロンプトを起動します。
- ▶ 以下のコマンドで osql を起動します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E -Q "use ServerViewDB exec  
SVGet_JobInfo" -w 300 -s "TAB" -o <output_filename>
```

Excel で出力ファイルを開くことができます。*freq_type* と *freq_interval* で時間間隔の値を探します。*freq_type* の値が 4 (daily) である場合、*freq_interval* の値が日数です。*freq_type* の値が 8 (weekly) である場合、*freq_interval is* の値は以下のとおりです。

1 = 日曜日
2 = 月曜日
4 = 火曜日
8 = 水曜日
16 = 木曜日
32 = 金曜日
64 = 土曜日

ジョブの属性およびスケジュール設定の変更

ジョブの属性およびスケジュール設定を変更するときには、保存したプロシージャ「*sp_update_jobschedule*」および「*sp_update_job*」を使用することができます。

プロシージャは Microsoft MSDN オンラインページで説明されています。

- ▶ Microsoft Web サイト (www.microsoft.jp) を開きます。
- ▶ MSDN オンラインを選択します。
- ▶ これらのプロシージャを探します。

バックアップジョブが正常に実行されると、<*DbBackupPath*> ディレクトリに *Control*.txt* ファイルが見つかります。*DbBackupPath* の下にある構成ファイル *ServerViewDB.ini* でパス名を検索します。

ServerView データベースをリストアする (Windows)

ServerView データベースをリストアする前に、最初にデータベースへのアクセスを制限する必要があります。その後、データベースとトランザクションログをリストアできます。

- ▶ コマンドプロンプトを起動します。
- ▶ 以下のコマンドで *osql* を起動します。

```
osql -S <SQL Server instance> -E
```

データベースへのアクセスの制限

以下のコマンドを使用してデータベースへのアクセスを制限します。

```
exec sp_dboption 'ServerViewDB', 'dbo use', 'true'  
GO
```

データベースのバックアップをリストアする

以下のコマンド、オプション *NORECOVERY* を使用して、選択したデータベースのバックアップをリストアします。

```
RESTORE DATABASE [ServerViewDB] FROM DISK =  
'<Path>\ServerViewDBData.bak' WITH FILE = <Position>,  
NORECOVERY,  
MOVE 'ServerViewDB' TO '<Drive>:\Program Files\Microsoft SQL  
Server\MSSQL$SQLSERVERVIEW\Data\ServerViewDB.mdf'  
GO
```

トランザクションログをリストアする

以下のコマンド、オプション *NORECOVERY* を使用して、選択したトランザクションログのバックアップをリストアします。

```
RESTORE LOG [ServerViewDB] FROM DISK =  
'<Path>\ServerViewDBLog.bak' WITH FILE = <Position>,  
NORECOVERY,  
MOVE 'ServerViewDB_log' TO '<Drive>:\Program Files\Microsoft SQL  
Server\MSSQL$SQLSERVERVIEW\Data\ServerViewDB_log.LDF'  
GO
```

最新（最後）のトランザクションログをリストアする

以下のコマンドを使用して、最新（最後）のトランザクションログをリストアします。

```
RESTORE LOG [ServerViewDB] FROM DISK =  
'<Path>\ServerViewDBLog.bak' WITH FILE = <Position>,  
RECOVERY,  
MOVE 'ServerViewDB_log' TO '<Drive>:\Program Files\Microsoft SQL  
Server\MSSQL$SQLSERVERVIEW\Data\ServerViewDB_log.LDF'  
GO
```

6 Fujitsu Technology Solutions Software License Agreement for End User

1. Subject of this Agreement

1.1 For the purposes of this agreement “Software” shall mean the software with the object code, the version and the specification indicated in the software product data sheet of Fujitsu Technology Solutions.

The Software consists of machine-readable instructions and/or printed documentation and related licensed materials.

1.2 Please read this agreement carefully before you use the Software. If you do not agree with the license terms in this agreement, you are not permitted to use the Software and must immediately return all copies of the Software and all accompanying items to the Licensor/Sublicensor (either Fujitsu Technology Solutions or the reseller who supplied you with the Software) with proof of purchase for a full refund.

1.3 Any use of the Software requires the proper payment of the applicable license fees. By using the Software you agree to be bound by the terms of this agreement.

1.4 Fujitsu Technology Solutions reserves the right to implement at any time in the future an additional software license key and/or license certificates as countermeasures against software piracy.

1.5 Software components from third-party software suppliers which are part of the scope of the delivery are subject to separate license agreements that are included with the Software or that are transmitted by Fujitsu Technology Solutions upon request.

2. End User License

2.1 Fujitsu Technology Solutions grants you a non-exclusive and non-transferable license to use the Software on the number of workstations for which you have purchased licenses. Unless you purchase additional licenses, you are not permitted to operate the Software on more than the maximum number of licensed workstations or on hardware that exceeds the specified type.

You are permitted to make a backup copy of the Software for archiving purposes, provided you properly mark the copy or partial copy of the Software with the copyright notice and any other ownership information.

2.2 You are not permitted to copy, modify or distribute the Software.

Furthermore, you are not permitted to re-compile, re-engineer, convert, revise, compile or modify the Software. You may not sub-license, without selling the related hardware, assign, rent, lease or transfer the Software except as expressly permitted by this agreement or due to mandatory legal regulations.

2.3 If you acquired the Software as a program upgrade, your license for the use of the old software version ends automatically with the installation of the upgrade version of the Software. If parts of the old software version are not replaced by the upgrade version, the license for the old version continues to be effective until the remnants of the old software version are also replaced or deactivated or shut down in any other way.

2.4 Unless specified otherwise in the respective software data sheet of Fujitsu Technology Solutions, the license for a software version or release does not give you any rights to new releases (updates), new versions (upgrades) or technical support services for the Software. Supplemental software support contracts and maintenance services, including or excluding new releases and new versions and additional technical support services, can be purchased separately either from Fujitsu Technology Solutions directly or from authorized software resellers.

3. Downloading

For Software supplied by Fujitsu Technology Solutions over a network or a similar distribution path, the following additional conditions shall apply: All products supplied for downloading by Fujitsu Technology Solutions are selected, made available and — if supplied by third parties — provided without modification. However, you are fully responsible for ensuring the most current version and usability of downloadable material for your own purposes and on your own system. You download Software at your own risk. Fujitsu Technology Solutions will not accept any liability, particularly not for transmission errors or problems that arise during the downloading process (line failures, connection interruptions, server failures, data corruption, etc.).

The website of Fujitsu Technology Solutions is operated and administered only for those countries in which Fujitsu Technology Solutions has one or more offices. Fujitsu Technology Solutions accepts no responsibility that Software and/or documentation can or may be downloaded from a Fujitsu Technology Solutions website also in locations other than the countries mentioned above. If

you access a website of Fujitsu Technology Solutions from abroad, you are fully responsible for complying with any local regulations. Fujitsu Technology Solutions expressly prohibits the downloading of Software and/or documentation from a Fujitsu Technology Solutions website in countries where such downloading is considered illegal.

4. Copyright

All rights and licenses, unless they are expressly granted to you in this license terms, as well as all property and usage rights related to the Software (including parts of the Software) remain fully with Fujitsu Technology Solutions and/or its third-party licensors.

The license terms do not authorize you to use the brands, logos or trademarks of Fujitsu Technology Solutions or its third-party licensors, nor are you permitted to use any other brands which are deceptively similar to the brands, logos or trademarks of Fujitsu Technology Solutions. Each and any use of brands, logos or trademarks with respect to the Software or Fujitsu Technology Solutions requires the express consent of Fujitsu Technology Solutions.

5. Licensor's warranty and liability disclaimer, if Software is sold and delivered by Reseller

If you acquire the Software directly from an authorized reseller (called "Reseller"), the right to install and use the Software may be subject to additional software license conditions agreed upon between you as the licensee and the respective reseller.

In all cases of an authorized software resale, the software is sublicensed and made available to the licensee directly by the Reseller. In such cases, Fujitsu Technology Solutions is not a contractual party of the software license agreement between you, as licensee and the Reseller, as far as the procurement of the software licenses are concerned. Legal claims in connection with the software licensing can therefore be asserted only on the basis of the agreements with the Reseller. Under no circumstances, however, will the respective scope of the license for the licensee exceed the scope of the license agreements as specified in sections 1, 2, 3 and 4 of this agreement.

Subject to mandatory legal regulations, particularly those governing liability and/or warranties, which cannot be excluded in connection with end user license agreement regulations and with reference to the licensee's claims against the Reseller, Fujitsu Technology Solutions disclaims all warranties for the Software in this agreement.

For the same reason, Fujitsu Technology Solutions disclaims any and all liability/claims for any violations of third parties' rights as well as any implied warranties for the software's marketability and its suitability for a particular purpose. This disclaimer of liability does not apply in cases of willful or malicious behavior by Fujitsu Technology Solutions.

In this End User License Agreement, Fujitsu Technology Solutions grants no warranties of any kind, either express or implied.

6. Disclaimer of liability with respect to shareware, freeware and/or open source software components

6.1 The Software may contain freeware or shareware which Fujitsu Technology Solutions received from a third party. Fujitsu Technology Solutions paid no license fees for the use of this freeware or shareware. Accordingly, the licensee is not charged any license fees for the use of the freeware or shareware. You recognize and accept that Fujitsu Technology Solutions therefore grants no warranties with respect to such freeware or shareware components and does not assume any liability in connection with the ownership, the distribution and/or the use of the respective freeware or shareware.

6.2 The Software may also contain open source software components that were developed according to the "open source model" and which are distributed exclusively on the basis of the GPL (General Public License:

<http://www.gnu.org/copyleft/gpl.html>) terms and conditions or other standard open source standard license terms and conditions applicable to the respective open source components at the time of their dissemination. You recognize and accept that the licensing of such open source software components is governed exclusively by the above-mentioned GPL terms or by the conditions which are otherwise included with the open source software components. Fujitsu Technology Solutions receives neither license fees nor any other compensation for the delivered open source software components. As far as Fujitsu Technology Solutions or a third party receives any compensation in connection with open source software components, it is received exclusively for additional delivery items and/or services.

Because of the special nature of the development and distribution of open source software components, Fujitsu Technology Solutions assumes no express or implied liability for such components and excludes any kind of warranty for such open source software components, particularly in connection with missing specifications, lack of functionality, programming errors or any other malfunctions.

7. General limitations of liability

7.1 Neither Fujitsu Technology Solutions nor its suppliers are liable for any consequential or indirect damages, including damages arising as a result of or in connection with an operational interruption, lost profits or sales, lost data, or costs of capital. Fujitsu Technology Solutions and its suppliers will not be liable for additional ancillary or consequential costs or for any other losses, costs or expenses of any kind which arise as a result of the holding, sale, use or impossibility of use of the Software, independent of whether such claims are asserted due to warranty rights, contracts, tort or any other legal theory.

7.2 The liability of Fujitsu Technology Solutions for direct damage caused as a result of a contract violation and/or other action or lapse on the part of Fujitsu Technology Solutions which have not been excluded or cannot be completely excluded due to mandatory law are limited to no more than €250,000.00. Any and all other liabilities for direct damage are excluded. Damage caused by Fujitsu Technology Solutions as a result of slight negligence are excluded to the extent permitted by applicable legal regulations.

7.3 Limitations and exclusions of liability resulting from this agreement do not apply to damage where Fujitsu Technology Solutions carries compulsory liability according to applicable laws and where such liability cannot be limited to a maximum amount (for example, liability for bodily damage; product liability or fraudulently incorrect information).

8. Export controls

Due to its components as well as the nature or purpose of these components, the export of the Software and/or its accompanying documents may be subject to official or regulatory approval. In cases where the Software is intended for export, you are obliged to get all approvals and authorizations required to comply with all relevant export regulations.

The Software may not be exported if there is reason to assume that the Software will be used in connection with nuclear, chemical or biological weapons or for missile technology. Furthermore, you may not deliver the Software — or have it delivered indirectly — to such companies or persons who are listed in the applicable U.S. export regulations (particularly the Table of Denial Orders/U.S. Denied Persons Lists (DPL) or in the E.U. export regulations (particularly the EU Terrorist List) or in the applicable warnings issued by the German export authorities or any other competent authorities in any country.

Under no circumstances is Fujitsu Technology Solutions obligated to deliver software, patches, updates or upgrades, to provide software for download or to fulfill any other contractual commitments if this would be a violation of the applicable export regulations of the Federal Republic of Germany, the European Union, the United States of America or of any other countries.

If you export or re-export the Software or a copy of it, this may be a violation of applicable export laws and a severe violation of the terms of this agreement.

9. Miscellaneous

9.1 If any term or condition in this agreement or any other contract that is subject to the terms and conditions of this agreement turns out to be invalid or unenforceable (partly or in full), the validity of all other terms and conditions remains unaffected, unless complying with the remaining terms and conditions would represent an unreasonable hardship for either contract party, even with the application of applicable legal regulations to close the legal gap.

9.2 If you/ the licensee do not pay the license fees due and/or if the licensee does not comply with essential terms and conditions of this license agreement, Fujitsu Technology Solutions reserves the right to cancel the license. In case of such cancellation, you must immediately return any and all copies of the software in your possession and confirm the complete return [of the software copies] or the destruction of these copies in writing.

9.3 Neither you nor Fujitsu Technology Solutions is responsible or liable for the respective party's non-compliance with its obligations if the reason for such non-compliance is outside the party's control due to force majeure.

9.4 Any and all modifications and/or amendments to these license terms and conditions are only valid if they are made in writing.

10. Applicable law

10.1 These license terms and conditions are governed by the laws of the Federal Republic of Germany.

10.2 In the event that provisions of clause 10.1 are unenforceable, these license terms and conditions shall be governed by the laws of the country in which you acquire the Software, with the following exceptions: 1) In Australia, the terms and conditions of this license are governed by the laws of the state or sovereign territory in which the business contract is being concluded; 2) in Albania, Armenia, Belarus, Bosnia-Herzegovina, Bulgaria, Croatia, the Czech Republic, Georgia, Hungary, Kazakhstan, Kirgizia, the former Yugoslavian Republic of Macedonia (FYROM), Moldavia, Poland, Romania, Russia, Slovakia, Slovenia, the Ukraine and the Federal Republic of Yugoslavia, the terms and conditions of this license are governed by the laws of the Federal Republic of Germany; 3) in the United Kingdom [Great Britain], all disputes with respect to these license terms and conditions are governed by English law, and English courts have exclusive jurisdiction; 4) in Canada, the terms and conditions of this license are governed by the laws of the Province of Ontario; 5) in the United States of America and in Puerto Rico as well as in the People's Republic of China the terms and conditions of this license are governed by the laws of the U.S. State of New York.

関連マニュアル一覧

ServerView Suite DVD 2 内には、次のマニュアルが格納されています。

これらのマニュアルは、<http://manuals.ts.fujitsu.com> からダウンロードできます。

- [1] **ServerView Suite
Basic Concepts**
- [2] **PRIMERGY Glossary**
- [3] **PRIMERGY Abbreviations**
- [4] **Secure PRIMERGY Server Management
Enterprise Security**
PRIMERGY server management for secure,
highly available platforms
White Paper
- [5] **ServerView Suite
Installation Manager**
User Guide
- [6] **ServerView Suite
Deployment Manager**
User Guide
- [7] **ServerView Suite
ServerView Operations Manager**
Installation under Windows
Installation Guide
- [8] **ServerView Suite
ServerView Operations Manager**
Installation ServerView Agents for Windows
Installation Guide
- [9] **ServerView Suite
ServerView Operations Manager**
Installation under Windows
Quick Installation Guide

- [10] **ServerView Suite**
ServerView Operations Manager
Installation under Linux
Installation Guide

- [11] **ServerView Suite**
ServerView Operations Manager
Installation ServerView Agents for Linux
Installation Guide

- [12] **ServerView Suite**
ServerView Operations Manager
Installation under Linux
Quick Installation Guide

- [13] **ServerView Suite**
ServerView Operations Manager
ServerView Agents (Linux, VMware)
Quick Installation Guide

- [14] **ServerView Suite**
ServerView Operations Manager
Base Configuration Wizard
User Guide

- [15] **ServerView Suite**
ServerView Operations Manager
Server Management
User Guide

- [16] **ServerView Suite**
ServerView Inventory Manager
User Guide

- [17] **ServerView Suite**
ServerView Archive Manager
User Guide

- [18] **ServerView Suite**
Asset Management
Command Line Interface
User Guide

- [19] **ServerView Suite**
ServerView RAID Manager
User Guide
- [20] **ServerView Suite**
ServerView Event Manager
User Guide
- [21] **ServerView Suite**
ServerView Threshold Manager
User Guide
- [22] **ServerView Suite**
ServerView Performance Manager
User Guide
- [23] **ServerView Suite**
ServerView Update Management
User Guide
- [24] **ServerView Suite**
ServerView Update Manager Express
User Guide
- [25] **ServerView Suite**
PrimeUp
User Guide
- [26] **ServerView Suite**
Bootable Update CD
User Guide
- [27] **ServerView Suite**
ServerView Online Diagnostics
User Guide
- [28] **ServerView Suite**
Local Service Concept (LSC)
User Guide
- [29] **ServerView Suite**
PrimeCollect
User Guide

- [30] **ServerView Suite**
ServerView Virtual-IO Manager
User Guide
- [31] **ServerView Suite**
ServerView Virtual-IO Manager CLI
Command Line Interface
- [32] **VMwareESXi Support of ServerView**
ServerView Operations Manager
Welcome Guide
- [33] **ServerView Suite**
ServerView Integration
Overview
- [34] **ServerView Suite**
ServerView Integration in MOM
User Guide
- [35] **ServerView Suite**
ServerView Integration Pack for MS SCOM
User Guide
- [36] **ServerView Suite**
ServerView Integration Pack for MS SMS
User Guide
- [37] **ServerView Suite**
DeskView and ServerView Integration Pack for Microsoft SCCM
User Guide
- [38] **ServerView Suite**
ServerView Integration in HP OpenView NNM
User Guide
- [39] **ServerView Suite**
ServerView Integration in HP Operations Manager
User Guide
- [40] **ServerView Suite**
ServerView Integration Pack in Tivoli NetView
User Guide

- [41] **ServerView Suite**
ServerView Integration Pack in Tivoli TEC
User Guide
- [42] **ServerView Suite**
ServerView Integration in DeskView
User Guide
- [43] **ServerView Suite**
ServerView Remote Management Frontend
User guide
- [44] **ServerView Suite**
iRMC - integrated Remote Management Controller
User Guide
- [45] **ServerView Suite**
iRMC S2 - integrated Remote Management Controller
User Guide
- [46] **ServerView Suite**
Provision of ServerView Software on the Internet
Description
- [47] **PRIMERGY BX300 Blade Server Systems**
Operating Manual
- [48] **PRIMERGY BX600 Blade Server Systems**
Operating Manual
- [49] **PRIMERGY BX600 Blade Server Systems**
ServerView Management Blade S3
User Interface Description
User Guide
- [50] **PRIMERGY BX900 Blade Server Systems**
Operating Manual
- [51] **PRIMERGY BX900 Blade Server Systems**
ServerView Management Blade S1
User Interface Description
User Guide

- [52] **PRIMERGY Blade Server System
LAN Switch Blade**
User Interface Description
User Guide
- [53] **BIOS-Setup**
Description
- [54] **PRIMEPOWER ServerView Suite**
System Administration within a Domain
User Guide
- [55] **FibreCAT CX
Monitoring FibreCAT SX systems with ServerView Operations
Manager**
Welcome Guide
- [56] **FibreCAT SX
Monitoring FibreCAT SX systems with ServerView Operations
Manager**
Welcome Guide
- [57] **ETERNUS DX60/DX80
Monitoring ETERNUS DX systems with ServerView Operations
Manager**
Welcome Guide
- [58] **StorMan**
Provisioning and managing virtualized storage resources
User Guide
- [59] **APC network management card**
User's Guide
- [60] **VMware
VMware ESX Server**
Installation Guide
- [61] **VMware
VMware ESX Server**
Administration Guide

索引

A

Apache Web サーバ 30, 31

D

Dbamgr2k 148

E

Enterprise Manager 148

M

Microsoft Internet Information Server
(IIS) 27

MSDE 2000 61

O

Operations Manager のバージョ
ン 183

osql 146, 148, 193

OS のバージョン 183

S

Secure Socket Layer protocol 32

ServerView Database の管理 146

ServerView Web サーバ 26

ServerView アーキテクチャ 19

ServerView データベース
管理ステーションへのローカルの
インストール 39

別のシステムへのリモートのイン
ストール 40

管理 193

ServerView データベース
(Windows) 143

ServerView データベースのバック
アップ 150

ServerView データベース のリスト
ア 164

ServerView データベース
エクスポート 188

service

MSSQL\$SQLSERVERVIEW 15
0

MSSQLSERVER 150

SQL Server 2000 62

基本インストール 63

SQL Server 2000 (MSDE 2000) 61

SQL Server 2005 52

SQL Server Management Studio
(Basic) 146

SQL Server Management Studio
(Express) 146

SQL Server インスタンス
認識 40

SQL Server インスタンスの認識 40

SQL Server インスタンス名 38

sqlcmd 146

SSL 32

SSL 暗号化 32

W

Web サーバ 26

Web ブラウザ 32

設定 32

Windows Server 2008 27

あ

アップグレード

MSDE 2000 から SQL Server
2000 92

SQL Server 2005 Express から
SQL Server 2005 88

SQL Server 2008 Express から
SQL Server 2008 85

アンインストール

SQL Server インスタンス 118

い

- インストール
 - Operations Manager ソフトウェアのメニュー駆動 98
 - SQL Server 2000 63
 - SQL Server 2005
 - Enterprise/Standard/Workgroup Edition 58
 - SQL Server 2005 Express Edition 54
- インストールオプション
 - SQL Server 37
- インストール済みのデータベース 183

え

- エディション
 - SQL Server 2000 62
 - SQL Server 2005 53
- エラー診断 182
- エントリアドレス 34

こ

- 構成ファイル ServerViewDB.ini 143

せ

- セキュリティ証明書 33
- 設定
 - Web ブラウザ 32

て

- データベースバックアップ
 - チェック 175
- データベースへの接続の中断 145
- デフォルトユーザ ID 34

に

- 認証証明書 33

は

- バックアップジョブの進行状況 156
- バックアップファイル
 - 存在チェック 159

ほ

- ポート
 - 使用ポート 34
- ポート番号
 - 3169 34
- ポート番号 3170 34
- 本書の表記 18

ゆ

- ユーザ ID/ パスワードメカニズム 33

ろ

- ログファイル 182